

越谷市郷土研究会会報第七号

古士以賀大谷

平成四年六月刊



目

次



巻頭言

越谷市教育長

斎藤 有雄

1 ページ

関東大震災

村田 留吉 64

研究集録

四丁野会田太郎兵衛家の先祖について

山崎 善司 65

大聖寺惣門と武州大相模

不動明王瑞像記について

加藤 幸一 2

感想

回想

高山 はつ 75

明治初期の卒業証書と寺子屋時代の教科書

小島 誠 15

越谷に五年

古田 美雄 79

古文書に見る伊勢参宮旅行について

鈴木 秀俊 19

第158回史跡めぐりに参加して

若松 素心 81

関東大地震の話

高橋 清 30

修験道場 武藤家の歴史

名倉 さわ 38

報告

研究史 海はどこまでできていたか

会員アンケート

会員 諸氏 89

縄文海進時の最高海水準について

宮川 進 42

埼玉県東部低地における遺跡調査報告

宮川 進 57

文化祭&市民まつり 展示出品リスト

事務局 95

行事实施一覧表
史跡めぐり&研究発表会

会 員 名 簿
役 員 名 簿
あ と が き
表 紙

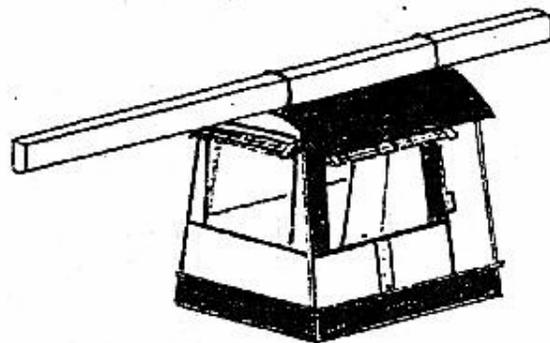
事 務 局 105

事 務 局 109

事 務 局 110

山 田 政 信 111

金 子 泰 岑



卷 頭 言

このたび、越谷市郷土研究会が、会報「古志賀谷」第七号を発行するに際して、会長さんからのご鄭重な執筆依頼に接し、とまどいながら「巻頭言」を書かせていただきました。

よい機会でございますので、紙面をおかりして、郷土研究会の皆様方との疎遠をお詫び申し上げ、さらに、日頃の尊い研究調査活動とその業績に対し、深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

お陰様をもちまして、郷土研究会の研究調査の成果によって、越谷の歴史と文化の歩みは、貴重な資料収集や史跡調査あるいは伝承文化などが解明されてまいりました。

郷土は市民の心の拠りどころ「ふるさと」として、愛着をもつて心深く根づくことができるものと、衷心より願っているものがあります。

越谷市教育長

齊 藤 宥 雄

お聞きしますと、皆様の研究調査活動も会長さんのご英断で、歴史文化の向上に役立つものならば県外にまで及んでいるということでありますが、郷土文化の創造にとってはまことに大切にして必須の要件かと存じます。

その皆様方の活動の源泉・エネルギーはどこから発生するものであろうかと考えるわけですが、結論的には、皆様お一人お一人の深い愛郷心によるものだと感じた次第であります。

最近NHK大河ドラマでの歴史的人物による郷土の再認識がなされる傾向がありますが、越谷市では、方言学の大家「越谷吾山」の出身地として、また一世紀おくれて、国学者平田篤胤がしばしば訪れ、深いゆかりの地越谷として知られてきております。

これらのことも郷土越谷の誇れる「まちづくり」の一環として位置づけていきたいものです。

皆様方の益々のご活躍を祈念いたします。

大聖寺惣門と武州大相模

不動明王瑞像記について

大聖寺惣門建立時期等の一考察

加藤 幸一

越谷市内の大相模にある真大山大聖寺の「惣門」(仁王門)は、正徳五年(一七一五)に建立されたとされている。昭和四十二年(一九六七)一月十一日に市の有形文化財(建造物)に指定された。越谷市の有形文化財としては昭和三十六年(一九六一)に指定された増森の薬師堂の二十一仏板碑に次いで、野島の浄山寺の大門口と並んで二番目である。

大聖寺は古来より今日まで「大相模の不動」と呼ばれて庶民から親しまれ、不動信仰の中心として極めて盛んであった。その寺の惣門は堂々とした威容を誇り、左右に一对の阿吽の仁王像が安置されている。文政九年(一八二六)頃に完成されたと思われる通称「西方村旧記」によれば、大聖寺の仁王門つまり惣門は正徳五年(一七一五)十月五日の造立とされている。このことは旧記が完成したわずか百年前のことであるからまず間違いないと考えるのが普通であろう。しかし、だからと言ってこの旧記の記載のみで断言してよいであろうか。そこで享保十四年(一七二九)に作られた大聖寺の巻物の縁起状を最初に紹介しながら考察していくことにする。

(一) 「瑞像記」にみる正徳五年の記述内容

「武州大相模不動明王瑞像記」(武蔵国の大相模にある不動様のめでたい像の記録の意)は約一五〇〇字の漢字よりなる漢文で著され、その約三分の二の所に次のような内容が書かれている。

①正徳五年(一七一五)に楼上に釈迦三尊像・十六羅漢像、下に持国天・多聞天の二天像を安置する「二天門」が建てられた。

②享保五年(一七二〇)二月に火災が起こり講堂その他の建物が焼失したが、不動堂は住職の隆元の祈願によって免れた。また「二天門」も無事であった。

③隆元は、享保五年の火災に遭って一部焼失したこの寺を多大な尽力により再建した。

以上の三点の内容はこの瑞像記が享保十四年(一七二九)に作成されたものであるから間違いはなく、「二天門」の完成は十四年前の正徳五年であるのは明らかである。

(二) 二天門について

持国・多聞の二天像を安置した二天門は高崎力氏の聞き取り調査によると、明治二十二年十月九日、不動尊の門前町(惣門の南西、昔の不動道つまり今の相模町三一野口家と同町三一〇四野口家に挟まれていて、同町三一八石塚家前や、同町二二二一浜野食鳥KK前を通っている道で、その両側に栄えた町並み)内の山崎湯屋(現、相模町三一〇一山崎家)より火災が発生し、十七軒の建物を焼き尽くすとともに、この二天門の茅葺き屋根に飛び火して全焼した。この時、二天像の眼が宝石でできていると言われていたため、乞食坊主の太助が火中に飛び込み、眼を取ろうとして焼け死んだと言うエピソードがある。二天門は正徳五年

に建立され、明治二十二年に焼失したのである。ところで、明治二十二年は誤りで、惣門を残して全焼した明治二十八年のことをさすとも考えられるが、二十二と覚えやすい年代であるため記憶違いの可能性は少なく、さらに明治二十八年の大火は大聖寺境内にある石碑「御座の松の碑」によると七月であり、二天門の火災が十月九日と月日までわかるということから信頼性が高く、明治二十八年の七月ではなくそれより六年前の高崎説が正しいのであろう。

大聖寺に焼失する前の二天門の写真が保管されている。写真の枠外両脇には「真大山仁王門原景」「大正五年十一月復写」との添え書きがある。また写真の二天門奥には瓦葺きの本堂（この本堂は明治二十八年に焼失）が見え隠れしている。二天門の前には一對の石灯籠（常夜灯）が見える。これは今もその場所に立っている。高さ約三メートル程あり、寛政元年（一七八九）三月に馬口勞連中により奉獻されたものである。現在、火袋の所がセメントで補修されていて火口がなく空洞ではない。多分、火災を受けたためそのままでは危険となり補修したのであろう。

一方、旧記によると正徳五年に仁王門が建立されたとなっている。すると二天門と仁王門は同時に建立されたことになるが、はたして可能であるのかとの疑問は残る。あるいは二天門と仁王門は同一の門であるのか。二天門には仁王像が安置されておらず、同一の門であるはずがない。明らかに別々の門である。なぜ瑞像記に仁王門のことが一言も触れられなかったのか。不思議である。仁王門建立は享保十四年以降であったとすると説明がつく。次に大聖寺境内に立つ石碑「惣門修繕碑」について紹介する。

③ 「惣門修繕碑」にみる惣門の沿革史

明治二十一年四月に造立された「惣門修繕碑」によると次の通りである。

夫 積善徳行の基礎朽る事あらんや 爰に当寺廿三世の住 木
食成円師 二王門なきは法に非と発願し 十方の信者に助成を
得て 文化元年十二月 始て瓦葺の大惣門建立し 後ち嘉永元
歳に至り 経る事四拾五年にして大破す 時に三十世の信剛比
丘 広く有志を受 再興し 屋根を銅版に替換す 永世不朽と
思の外 明治十三年に及て僅に三拾余年にして損破す 修補成
り難を 西方 東方 見田方 三村の信徒同盟五十余名 一致
相議し 懇篤世話方に尽力す 八方 有信の浄財を納得し 明
治十七年に至り修繕銅板葺落成す 宜なる哉 是即ち 本尊明
王の威徳と 衆庶の功徳と 利益感応して 成就する所謂なり
因て 衆有志に報るに 五穀成満 家内安全 子孫繁昌の祈念
怠る事なし 其功勲を碑に勅して 後覽の為に備んと 爾云
明治二十一年四月 当寺三十二世 住 真島（まじま） 戒信
謹誌

つまり、仁王門がないのはだめだとして文化元年（一八〇四）十二月、初めて瓦葺きの仁王門を建立。しかし、嘉永元年（一八四八）に大破する。そこで、再建し屋根を銅板葺きにする。明治十三年（一八八〇）にまた損破する。修理しにくいのを修理し明治十七年（一八八四）に屋根が銅板葺きの惣門（仁王門）が完成する。

仁王門の仁王は伽藍の守護神とされるが、「瑞像記」によると、仁王門建立以前に既にこの寺院の伽藍神としての愛宕神社が不動

堂（本堂）の傍らに祭られていたという。愛宕社はこの寺院が創建された時から伝わっていたといひ、また家康を祭る東照宮を修繕した時に伽藍を守る神となつたといひ、昭和三十五年発行の『越谷市の史蹟と伝説』の中の高崎力氏による「武州大相模不動尊全景」の昔の境内図によると、現在の本堂南東、弁天様を祭る祠のある池の手前の鐘撞堂のある小山が愛宕山となつてゐる。つまりこの小山（現在の鐘撞堂を建立するにあつたこの小山はかなり削られてしまつた）に愛宕社が祭られていたに違ひない。愛宕様は火除けの神なので、伽藍の守護神となつたのであろう。その後、伽藍神としての愛宕社はいつしか忘れられ、多くの寺院で見られる伽藍神としての仁王を祭る仁王門がとつて代つたのであろう。文化元年、第二十三世の住職をして「仁王門なきは法に非ず」と言させたのである。

なお、その後明治二十八年の火災ではこの惣門のみが助かり、また、震災・戦災にも免れ、今日に至つてゐる。

この惣門修繕碑は惣門建立の沿革を解く貴重な資料と言える。もしこの比較的新しい石碑の内容が正しいとするならば、これより古い文政年間の資料である「西方村旧記」の記述はどういうことになるのか。次に旧記の資料を紹介し、その謎を解く鍵に迫つてみたい。

④ 「西方村旧記」について

仁王門についての記述が載っているのは五巻からなる西方村旧記の内の第一巻「往古より旧記壹」である。第一巻が完成後、この巻の最初の方に張り紙として添付されたものである。次にその張り紙を紹介する。

以口上書申上候（口上書きを以て申し上げ候）
大聖寺境内之道 壹筋 御ふさき被成被下候様ニと 御訴訟
申上候旨趣之事

「省略」

右之由来ニて御座候故 大聖寺代々之住持 存念之趣は 余寺
之御朱印地ニハ 相替候間 権現様之御宮 致安置度と 念願
仕候 雖然 挾隘之寺中ニ 往還之道筋三通り迄 御座候故
権現様之御宮 安置之所 往還之道筋端ちかくハ 建立難成候
ニ付 寺中之分 中ミち壹筋 御塞候て被下候は 御宮并 不
動堂拜殿 仁王門等迄 建立仕度と 前々之御支配衆へも 前
々之大聖寺 申上候 拙僧事も 当院之住職 昨今之事ニ候へ
共 前々之住持 同意ニ 右之一事 遂願届度 奉存 御訴訟
申上候 中ミち壹筋 御ふさき被成被下候ハ、 前々之住持
所願之通り 我等 成就仕度奉存候 替り之道筋等 委細之儀
は 以繪圖申上候 当村中之者 何も 拙僧所存之通り 無相
違之旨 以別紙申上候 已上

月日

大相模大聖寺

田山守右衛門殿

松井平八殿

右は文政之度 安養院 書物之内より見出し 乍併 年号無之
殘多事ニ御座候
但 仁王門造立 正徳五乙未十月五日 右門 棟札ニ 書記
有之候

右記の資料はまず「以口上書申上候」と題する大聖寺より役人

の田山守右衛門・松井平八あての口上書き（寺社関係者や武士に對するの訴訟上の供述筆記）が載せられている。その内容は次の通りである。

(ア) 家康を祭ったお宮を建立したいが、そのために境内の中にある道三本のうち一本（中道）を塞ぎたいこと。

(イ) 以前から東照宮・不動堂拝殿・仁王門などを建立したいとの願いがあったが、これをかなえて欲しいこと。

また、そのあとに書かれている説明によると文政年間に安養院から出てきたもので、年号・月日が記されていないのは残念であるとなつている。安養院とは大聖寺の塔頭（わきでらのこと）の一つで、大聖寺の東隣り、現在の墓地がある所にかつてあった。そして最後に但し書きが付け加えられている。これが大聖寺山門正徳五年建立の根拠となつた文である。但し書きは朱書きにされているが、これは後に書き加えられたためであろうか。

次にこれらの筆跡を一部紹介する。向かって右側のAは但し書き、左側のBは口上書きの文字で、矢印は筆の方向とその角度を示している。二つの筆跡を見ると違ふ筆跡のように思える。

A
但し書き
仁王門造るの御成し未十月日

B
口上書き
仁王門造

A
仁王門造るの御成し未十月日

B
仁王門造

(五) 二つの資料の矛盾点

今まで述べてきたことを年表にしてまとめると次の通りである。

正徳 五年（一七一五）	二天門建立（瑞像記）
享保 五年（一七二〇）	仁王門建立十月五日（旧記）
文化 元年（一八〇四）	火災に遭うが、不動堂と二天門は免れる二月（瑞像記）
文政 九年（一八二七）	初めて瓦葺の仁王門建立十二月（修繕碑）
嘉永 元年（一八四八）	この頃、西方村旧記完成 仁王門大破（修繕碑）

その後、銅板葺きの屋根の仁王門と

して再建（修繕碑）

明治十三年（一八八〇）

仁王門損破（修繕碑）

明治十七年（一八八四）

仁王門（銅板葺き屋根）修理完成

（修繕碑）

明治二十一年（一八八八）惣門修繕碑建立四月

明治二十二年（一八八九）二天門焼失十月九日

明治二十八年（一八九五）仁王門を除き全焼七月

（御座の松の碑）

右表で四角に囲まれた二つの事項が仁王門建立年代に関する二つの資料「旧記」と「瑞像記」の相互の矛盾点である。そこで口上書きや但し書きが書かれた張り紙はいつ頃書かれて旧記第一巻に添付されたのか、但し書きはいつ書かれたのであろうか。「右は文政之度……見出し」となっていることから張り紙は文政年間

に添付されたのであろうが、但し書きはいつ頃書かれたかわからない。張り紙が書かれた時期と同じかもしれない。旧記本文や口上書き、但し書きの筆跡を比較するのも一つの検討方法かもしれない。もし但し書きを書いた人がずうっと後の後世の人としたら、その人が二天門を仁王門と書き誤ったとの可能性がないとは言えないが、それだけでは仁王門の建立時期の謎を解く決定的なものとは言えない。つまり「正徳五乙未十月五日」と書かれた棟札が見つかれば仁王門の建立は正徳五年であるなどと断定できようが、本堂が火災にあったり、惣門が何度も修繕しているためほぼ不可能であろう。しかし建物そのものを隅々まで調査したり、あるいは思い切って解体調査すればその棟札を発見するのも夢でないか

もしれない。そうでなくてもそれに代わる手掛かりが出てくるであろう。建物の本格的な調査ができないのであれば、結局この謎を解くためには次のことを解明する必要があると言えよう。

□口上書きに出てくる田山守右衛門と松井平八はいつの頃の者か

正徳五年以前の人物なら仁王門正徳五年建立は妥当と言える。大聖寺山門創建が正徳五年であるが、たとえ文化元年であるうが、また今日の山門が正徳五年に創建されたもの、あるいは文化元年か嘉永元年頃に建立されたものであるにしても、今日の大聖寺山門は堂々とした威容を誇り、越谷市が誇るべき貴重な文化財であることには変わりはない。

山門の柱や礎石等を見るに、かなり古い建造物とも思われ、また昭和五十一年に解体修理される前の仁王像の痛みのひどさを見るに、かなり古い像と思われる。以上の理由より約三百年前の正徳五年建立がもっともらしいとも思えそうだが、惣門修繕碑によると約二百年前のものとなる。いずれにしても謎を解くために今後の調査・研究が望ましい。

次にその研究の一材料として『大相模不動明王瑞像記』について触れることにする。

六 「大相模不動明王瑞像記」の概略

『瑞像記』は越谷市内の大相模の西方（西の方）にある真大山大聖寺に現存している巻物の縁起状で、当時の住職英山（えいざん）の依頼によって享保十四年（一七二九）八月に江戸の宝林山靈雲寺第三世の慧（けい）が文を作り、光天が書いたものである。約一五〇〇字の漢字よりなる漢文で著されている。ここには次にあげる内容がみられる。

①寺誌の紛失

寛文年間（一六六一〜一六七二）

②不動坊の起り・良弁創建説（古誌）と

大相模郷・真大山不動坊の名付け

ここではいつのことか年代が明記されていないが、後の資料によると天平勝宝二年（七五〇）となる。良弁は華嚴宗第二祖、東大寺大仏造立に尽力し東大寺初代別当となる。

密教は既に七世紀後半には断片的な形で我が国に伝えられてはいたが、延暦二十三年（八〇四）に入唐した空海（真言密教・東密）・最澄（台密）によってもたらされて本格的に盛んになることから、不動坊の起りが奈良時代であることに疑問が残る。

③不動坊の起り・翁創建説（言い伝え）

延喜年間（九〇一〜九二二）

平安初期は不動明王など密教全盛時代。

太平洋戦争で供出されたこの寺の鐘には、延暦年間（七八二〜八〇五・延暦は延喜の誤りか）に铸造したものを明和三年（一七六六）に再铸造したと刻されていたと伝えられる。

④不動明王像の昔も今も変わらぬ靈驗

⑤家鳴不動のいわれ

⑥不動坊と岩槻城主

天文年間（一五三二〜一五五四）
天文〜元龜年間（一五三二〜一五七二）
岩付太田氏全盛を築く岩槻城主太田資正及び岩槻城将としての玉綱城主北条氏繁の信仰と夫役の免除。
⑦定伝の前歴と密教の推進 天正十二年（一五八四）

原文では密教の寺に改めたと読み取れる。

密教の寺にはよく不動明王像が安置されているが、それまでは顯教（例えば華嚴宗）の寺であったと考えてよいのか。そ

れが天正十二年に密教（真言宗）の寺に変わったと言うのであるか。

奈良東大寺（華嚴宗）には九世紀末の作といわれる不動明王像が秘藏されていることからわかるように密教が他宗派にも強く影響を与えていた。それゆえ密教でない華嚴宗に属していた不動坊で不動信仰が土着の人々によってなされていたとも推定できる。

定伝は後の資料によると大聖寺の中興となる。

⑧定伝と家康

天正十九年（一五九一）十一月

六十石喜捨と寺名の大聖寺への変更及び江戸城の鬼門となる。

⑨定伝の弟子入り

慶長二年（一五九七）

京都醍醐寺の義演大僧正への弟子入り。

⑩定伝と家康

慶長五年（一六〇〇）

関ヶ原の戦いに出陣する家康の戦勝祈願と寺宝となった刀。

この中で、松平右衛門太夫、村越茂介、普阿弥の名がでてくる。茂介（通称）とは村越直吉（一五六二〜一六一四）を指すのか。

⑪隆元と大聖寺の火災

享保五年（一七二〇）二月

この中で、不動堂の無事が述べられている。

⑫隆元の大聖寺再建

⑬隆元の二天門創建

正徳五年（一七一五）

この中で二天門が享保五年の火災に免れたことが述べられている。

⑭大聖寺の伽藍神である愛宕神社

⑮親如法師と家康のお陰で盛んになった大聖寺

天和元年（一六八一）

この中で、一月、五月、九月の各二十七日に催される不動會の盛んなことが述べられている（現在は二十八日）。

⑩現住職英山と「含満井」の起こり

現在の参道東側の本堂そばの水屋の裏あたりにかつて水垢離があり、そばの弁天池（今も湧き水によって涸れずにある）から竹の樋で呼び水をし、戦後まで見られた。英山が「含満井」と書かれた立札を立てた所はここかもしれない。

⑪英山と瑞像記

次に全文の訳を紹介する。

⑫「大相模不動明王瑞像記」の全訳

武蔵国の大相模にある不動様のめてたい像の記録

①武州（武蔵国）埼玉郡大相模郷の真大山は（「者」は「は」）、不動尊の靈域で、瑜伽（ヨーガ）の淨い土地でもある。もと寺誌一卷があり、其の文は纔十余紙であったが、惜しくも、寛文年間（一六六一〜一六七二）に紛失した。

②曾て（この）古誌を読んだ者が、語る處によると、昔南京（奈良）にいた、良弁僧正は、神のようにあらゆる方向を教化し、大きな利益開き導き、方に東国に来て、相模国大山に（寺を建築する地を）ト（占って選ぶ）して築き、心清らかに身を修め一生懸命に励んでいた。その時、不動明王が形を現し、良弁を慰め諭した。良弁は仰ぎ見て、非凡な考えが生まれ、自ら其の顔かたちを模倣して木に刻んだ「長さ一尺七寸（五十一・五センチ）」。おつきの人に負わせ、（行く）所には必ず随行させた。此の村に来られた處、俄に盤石（大きな石）のように重くなり、百人千人と

雖も之を持ち挙げる事ができない。そこで有縁の地で、之を留めるべき處とわかった。將に此に妥かに奉ろうとし、誓って曰く「尊意ならば、前のように軽くなりますように。」と。試みに再び持ち挙げてみると、おおとのの羽のように飄然（ひらひらとするさま）としていた。ついに堂宇を創建して、安置し供養した。爾れ以来、郷は大相模と称し、山は真大山と号し、寺は不動坊と名づけたと言う。

③又此の像について伝えられるところによると、相模国大山の尊像と、同木で刻してあり、（木の）根本を用いている。然るに延喜年間（九〇一〜九二二）、一人の変わった翁がおり、庵を結び、（この）郷の古荒川（今の元荒川）の岸に住んでいた。身体は清流に沐浴し、外では深斎（心身の清め）を以て、心に仏乘（一切衆生をことごとく成仏させる教え）を欣び、内では精進を以て、常に（不動）明王に帰依し、復余念がなかった。日照り・長雨やはやり病（など）、凡そ難あれば、すぐに日夜郷里を巡行しては、明王真言を唱え、救済を以て、其の効験が無いということはなかった。地元の人々は「生き不動」と呼んだ。翁は相模国の大山へ詣でること、年に十（回）を以て数えた。その願いは靈験あらたかな像を得るといふ所にあった。ある朝將に彼の山に赴かんとし、途中で平阜（丘の上の平地）を歴て「即ち今のお旅どころ」、ある苦行者に遇う「世に言う山臥」。笈（行脚僧や山伏などが、旅の際、物を入れて背負って持ち運ぶ、竹で編んだ箱。おい。）を負い石の上に座り、あごひげ・髪の毛は垂れ下がり、（その）威嚴は尋常でなかった。翁、初めて会って、すぐ互いに故旧（旧友）のようになつた。行者曰く「あなたは何を求めて、幾度も大

山に行くのか。」と。翁は其の志（像の取得）を以て告げた。行者は髀を搏って、喟然（溜め息をつくさま）とし、感嘆して曰く「遭遇したのは奇縁かな、我は瑞像を持っていて、秘蔵すること久しく、たとえ値段の付けられぬ貨だと言えども、之と交換したくないのだが、今あなたが懇ろに祈願しているのに感じた。」と。則ち起立して笈を開き、不動明王像を出して、与えた。敵かて極めてものすごい忿怒相は、人間わざではなかった。行者は眉を張り像を指し、正座して翁に言つて曰く「あなたは之（この像）を知っているか、嘗て良弁法師が、（不動）明王の真の身体を感得してご覧になり、手ずから（自分の手で）之に摹（ま）つて（則つて）作つた物（者）こそ、此の像です。」と。置くとすぐ立ち去る。翁は怪しみながら行くところについて行つた。北へ百歩数えたところ、行者顧みて曰く「此の地は不動明王の靈験あらたかな刹（に）ふさわしい、須らく（ここに）安置せよ。」と。そこで忽然と姿を消す。翁は大いに驚き歎び躍て、「おそらく是は大山の大聖（み仏）が私に授ける所であろう。」と思つた。そこで爾の処で、茅を切り払つて像を安置した。翁は亦多年にわたつて苦行し、其の死去した所はわからないと言ふ。二つの縁起は稍異なっているが、併せて伝えよう。

④抑草創以来、數百年（の間）、（この）像に奉仕する者は、或いは出家者の流れ、或いは優婆塞（男子の仏教信者）の類いであつたり、屢交替したが、（この）像の靈験は今も昔も変わらな

が鳴動（地震の時に生ずる土地の震動と音響）し大いに揺れたので、賊は恐れかきこみ、罪を謝り、すぐに像を送り返した。爾後（以来）何事か有るときは、（この）精舎（寺）は必ず震動した。故に世の人々は「家鳴不動」と称した。

⑥天文・弘治・永祿・元龜の間（一五三二〜一五七二）は、武蔵国の岩付城主太田資正、及び北条氏繁が、当山を崇信し、財貨を施し夫役（労役）を免除して、家門の榮えを謀つた。

⑦天正十二年（一五八四）、沙門（僧侶）定伝は「紀伊国（今の和歌山県）の根来寺の性盛法印の付法（師が弟子に教法を伝授して後に伝えさせること）の弟子」、道人（僧侶）として名声があり、住職となつた機会に（「便」＝機会）、すぐ当山をすつかり改めて、密教の寺とした。其の功績は、定に称賛すべきである。

※紀州根来寺……覚鑊（新義真言宗の開祖）の創始

⑧厥の後、東照神君（家康公）が狩りをした折（「次」＝折り）わざわざ茲に來訪し、像の事の縁起を問われた。定伝は恭しく申し上げた。神君曰く「靈（験）なるかな、汝、予が福を像に祈れ」と。（天正）十九年（一五九一）十一月、神君は頻に像の靈験を感じて、定伝を召して、水田六十石を寄捨（喜んで寺に寄進すること）した。「ご朱印（状）及び山内（寺の境内）の「非常」（變異）を禁ずる（封ずる）書が現存」。且つ寺に命じ大聖（仏の尊称）と号させ、永く鎮護国家（仏法によって国家を鎮定し保護すること）の道場と為した。乃ち此の山は、武蔵（江戸城）の鬼門（北東）を鎮める。これ（茲）より已來、別に僧侶六人を置き

「今の六坊（六人坊主）が是」、夙夜（早朝から夜遅くまで）力を勤め、太平を祝禱（神官に依頼し神に祈ること）し、主君の

恩を感謝した。

※山内の非常を禁ずる書……不動明王像の通力が原因になって発する怪奇現象（非常）をまじないで封ずる（禁ずる）

ための祈禱書

⑨慶長二年（一五九七）、定伝は京師（都）に上り、醍醐寺の座主である義演（一五五八〜一六二六）大僧正の部屋に入り、親しく秘密（密教）の印璽（天皇の印である御璽と太政官の印である国璽）を受け、（瓶の底に至るまで瀉ぐように）教えの奥義をあますところなく伝授された。寺に帰って昼夜香を炊き込め修練し、三宝（仏・法・僧の称）を（世に）弘通（あまねく広めること）した。

※義演……醍醐寺第八十代座主、早くから秀吉の帰依と知遇を得る

⑩（慶長）五年（一六〇〇）、神君（家康公）は兵を帥いて奥州征伐に向かったが（江戸出陣は七月二十一日）、途中の下野（今の栃木県）に於いて、石田三成が近江（今の滋賀県）で謀反を起したことを聞くに及んで（下野の小山で三成の挙兵を聞いたのは七月二十四日）、神君は兵を引き返し、暴雨の急なるを避け、旌旗（旗の総称・家康の軍隊を指す）は寺に宿った。松平右衛門太夫・村越茂介・善阿弥など近侍の者が（「供奉」とはお供という意）、像を礼拝しようとする（来々ししようとする）、神君はそこで宝刀一振りを納め、像の冥助（目に見えぬ仏の助け）を乞い、且つ定法に（石田三成を）降伏（仏の力によって悪魔や怨敵などを押さえ鎮めること）するための法を執り行わせた。定伝は（神君の）命令を奉じて、精勤（勤行に励む）し、勇み鋭く刀

を豎てて、壇上で声を張り上げて咒って曰く「とても鋭い刀剣よ、

魔軍を打ち破れ、明王の誓願（大日如来が変身して不動明王となり「一切の悪魔・煩惱を取り拉がむ」と誓った事）、豈に徒に説くならんや。」と。そこで、刀で印を結んだ。十方（あらゆる方角）を護る宝刀は、忽ち西に傾き倒れ、盛んに、空中に音が起り、宛も武器が交わり鳴り響き、鎧武者が競い走る如くであった。逆賊は果たして誅たれ亡ばされたが、其の日は対応しており、実りの秋の九月十五日である。此の刀は世々（寺の）貴重な宝物として伝付（伝えること）し続けた（去々し続ける）。

⑪享保五年（一七二〇）二月の、寺の災難では、講堂（経典を講義したり説法したりする堂）・房舎が、あつという間に焼失した。（火の）勢いが熾んでもう少しで不動堂（不動様を安置している堂）に暨ぼうとした。住職の隆元が、此の災いに遭ったのを悲しみ、とても嘆き泣いて祈請（祈願）した。突風が忽ちに止み、鍾然（高くそばだつさま）として、免れることができた。

⑫その後、隆元は再建に力を竭くし、手ずから（自分の手で）錫杖（僧侶の持つ杖）をつきながら、遐邇（遠いところや近いところ）（など各地）を巡って資金を求めた。人々は雨集（群がり集まる）したので、わずかな期間で、目的は達成した。高い軒・飛ぶような臺、赤い柱・麗しい軒先の横木（となす）。往時の（寺域の）外観を改め、現在の美しさになった。

⑬是より前に、正徳五年（一七一五）、隆元は楼門（二階作りの門）を新たに建て、様式は巧を施し、こしらえは意を尽くした。

※規製施巧、縮構尽意……共に対句で、大体同じ意味
楼上には釈迦三尊像・十六羅漢像を安置し、門の側らには、持国

・多聞の二天像を置き、多くの人々の帰依（教えを受けて、深く仏の真実に従うこと）の目印とした。そこで三学（戒・定・慧の三種の実践修行）の継承発展の跡と成った（作Ⅱとなる）。然るに志に之を願うこと深く、固より也煙が衝いて軒に籠り、余りの火が棟を煙らしたものの、毫しも損なわれる所がなかった。見る者は其の不思議さに驚いた。

⑭（不動）堂の傍に愛宕社がある。当山の開闢（初め、開祖）の神として伝わる。又嘗て東照君（家康公）の祠を修繕した時、特に伽藍（寺の建築物の称）を護る神と為ったのである。

⑮天和（てんな）元年（一六八一）、親如法師は地を（不動）堂の南西に卜し、官（お上、役人、公）に申し上げて、旧制を増飾し、誠意を込めて浄めお祀するに時宜を得た。念呪を執り行うこと誠を竭した。嗚呼神君ひとたび出るや、天下大いに定まり、徳敷しを垂れること窮まりなかつた。庶民各々其の所を得て、徳沢（徳によって教化して得た先人の残した恩恵）の余波を、此の寺に延べ及ぼした（單Ⅱのびる）。（壇上の明かり用の）香油は欠かすことが無く、衣鉢（僧尼の着る袈裟と托鉢をする時に持参する鉢）は置の中にしまわれず、瑜伽（ヨーガ）を修める者は絶え間なく接踵（次々と起こること）し、秘密（密教）仏乘（一切の衆生をことごとく成仏させる教え）は日増しに繁栄・興隆した。（これは）則ち皆神君の賜物である。誰がこのことを思わないであらうか。昔より毎年、正月・五月・九月の二十七日は、不動会と称し、都鄙（都々江戸をさす）や田舎からほうぼうより集まり、僧侶も俗人もどっと集まり、男女・児童も庭を填め堂を満たした。夜通し称名（仏の名を唱えること）を渴仰（仏を深く信じ

仰ぐこと）し、歌唄を誦呪した。礼をもって敬いて各々さし当たつての事を祈るのは、関東での一つの盛んな事と謂える。

※歌唄……梵語または漢文の偈（お経などからとった詩文）を読み歌って（節をつけて唱えて）仏徳を賛美すること

※誦呪……密教の修法で、真言・陀羅尼（一種の呪文）などを節をつけて誦えること

⑯近ごろ現住職英山は、不動堂の荒れ朽ちるのを歎き、將に之を営み構えんとした。且つ参詣者の盥漱（手を洗い口を漱ぐこと）として浄く用いるために、職人に命じ、（不動）堂の前に井戸を掘らせた。掘ること数仞（一仞は八尺）なるも、唯だ乾いた土ばかりで水を得ることができなかった。職人らは疲れ倦んで、將に放棄して止めようとした。英山は本尊に水を得ようとして求めて誓いをたてて祈った。すると幾らも掘らぬうちに、水が奔り湧き、沸き溢れた。炭漫（水の広く遠い形容）として、玉のように深く鏡のように激く、余流（本流から分かれた流）の末流の漚りは、林の際を潤し、洗う者は、身や手に垢・塵を瀧め、飲む者は心や胸に煩わしい思いを蕩した。榜して「合満井」と名付けた。

⑰英山は旧誌の紛失を憂え、予に請うて記録を作らせた。予は素より無学だが、聊か事を録そうと思う。実に不動尊の蔽かで侵し難い徳が、高々と駄舌（駄のさえずりのように訳の分からぬこと）をしゃべりたてること、の辺鄙の邦にまで光被（君主たるべき徳の行き渡ること）し、遮那法（密教を指す）の燈が煌々（きらきら光るさま）と（輝き）、（未来の世の）龍華樹（未来の世にこの木の下で弥勒菩薩が悟りを開くとされる）の開敷（一面に花が咲いていること）の曙（暁、夜明け）にまで至らんことを（つま

り、末法の世を救う第二の釈迦如来となる弥勒如来の誕生まで)、庶幾つてのことであると云う。

享保十四年己酉八月

武蔵国にある都(江戸)の宝林山雲雲寺第三世

僧侶の慧曦が文を作る

(朱印)

慧

(朱印)

寶浩

※「孚」は「子」の古字

小沙弥光天が薫沐して書いた

※薫沐……衣服に香をたきしめ、髪を洗って身を清めること

以上が「武州大相模不動明王瑞像記」の全訳である。寺社の縁起状というのと、とかく寺社にとって都合のよいように書かれるため、事実に基づかないと思われる部分がしばしば見られる。しかし、この「瑞像記」は言い伝えの部分と事実に基づいて書かれている部分とはっきりしていて、資料としての信頼性が高く、享保年間という比較的古い資料であるため、大聖寺の享保以前の沿革を明らかにするには欠かせない資料といえる。一部の虫食いは見られるが、完全なまま美しい状態で残っているこの原資料は大聖寺ばかりか、越谷市にとっても中・近世の寺院関係の歴史を解明するにあたって貴重な資料の一つといえよう。

次に、「瑞像記」に関連して大聖寺での家康が行った戦勝祈願の日と今日の大聖寺の大会式の日との関連について考察したい。

(八) 家康の戦勝祈願の日と大会式の日との関連

関ヶ原の戦いがあったのは慶長五年(一九〇〇)の九月十五日のことである。当時の暦では秋の終わり頃である。

会津の上杉討伐のため野州小山にまで出陣していた家康は、七月二十四日、江戸からの情報として石田三成が近江で挙兵したとの便りを聞く。そして「慶長記」によると「慶長五年八月四日、早朝に小山出立、古河より舟に召し江戸へ御帰り、栗橋の舟橋御切せ也、御供の衆江戸へ参り候に舟橋の渡し舟小船五、六艘にて渡候」とある。本間清利氏著「利根川」には、家康は「江戸へ引き返そうとしたが、栗橋(元栗橋)の舟橋が大雨のため流出したので、思川通り乙女岸から舟に乗り葛西に下った。おそらくこのときの家康の舟路は、思川から渡良瀬川を下り、権現堂川から島川筋の改修利根川路を川口に上り、そこから古利根川を下ったと考えられる。また家康はこのとき古利根川通り大川戸に立ち寄ったが、当初に大川戸陣屋御殿の構築を伊奈忠次に命じている。しかし家康御供の衆はいずれも元栗橋から利根川の合流路権現堂川を小舟で渡り、徒歩で江戸に向かったよう」だとしている。そしてこのお供が大聖寺に立ち寄ったのであろうか。なお越谷びいきではあるが、家康もお供の者と立ち寄ったと考えたいものである。もし、そのような推理が可能なら、家康は栗橋で渡航後、防御上栗橋の舟橋を切断させて江戸に向かったと考え、その時のお供は、小舟五、六艘で渡せるほどの小人数で家康とともに舟橋を渡った、あるいは舟橋を切断後あとを追って小舟五、六艘で渡ったと解釈できるであろう。

「瑞像記」によると、家康の兵は江戸に引き返す途中で急にひ

どい大雨に会い、そのため家鳴不動（大相模不動尊・大聖寺）に立ち寄っている。そしてそこで石田三成を成敗するための戦勝祈願を行う。そこにはお供の松平右衛門太夫・村越茂介・善阿弥などがいた。主君家康とお供の者とが離れて行動することは一般的には考えにくい。この「瑞像記」では家康とお供の者は一緒である。家康一行は、中世の奥州道（現在の土手道と推定）を下ってか、あるいは元荒川を下って、前々から家康とつながりのある住職定伝の住む大聖寺に立ち寄り、戦勝祈願をしたと解釈できる。

「瑞像記」に書かれた通り、戦勝祈願のために立ち寄ったことが事実か否かは今となっては確証はない。しかし、家康のお供の者の名前が具体的に列挙されていることから、少なくともお供の者が栗橋（元栗橋）の渡しを渡り、途中ここに立ち寄ったとの真実性はかなり高いと思う。

とにかく家康は秋八月四日早朝小山を急いで発ち、翌五日に江戸に到着したであろう。すると、もし大聖寺に立ち寄ったとするなら暴雨であったとされるから四日となる。おそらくそこで体を休め、一泊したのであろう。家康にとっての八月四日は戦勝祈願で三成方を倒すとお告げが出た記念すべき日であったのである。

さて、大聖寺では昔から毎年、秋の九月四日に護摩祈禱などを行う大合式（法会）が催しされ、一方、縁日もたち多くの露店で大変賑わっている。この露店がたつ市を梨市と呼んでいる。以前は千葉県などからの露店商もきて梨も販売されていたのである。今はこの日に「カラオケ大会」も実施されている。また、翌日の

五日は地元若者たちによって相撲を催す習わしであった。戦後になっても何年か続けられたが、いつしか廃れ今は催されていない。

なぜ大聖寺の大祭を九月四日にしたのであろうか。必ず何か重大な理由があったはずである。おそらくその理由は、新暦の秋九月四日は旧暦の秋八月四日を指すのであって、新暦が使われるようになってから、八月四日の大会式を一ヶ月遅れの九月四日にして、戦前戦後を通し今日まで続けられてきたのである。

（九）資料「瑞像記」（原文）の紹介

次に、考察には欠かせない原資料「武州大相模不動明王瑞像記」の全文をあえて紹介する。今後の研究に役立つことを期待する。

武州大相模不動明王瑞像記

①武州崎玉郡大相模郡真光山者

阿遮文宮匠除伽之淨塔也昔有

寺志一卷書文境十餘字指我王

寛文中而流吾曾讀古志者皆曰

昔在南末良神傳其神化与方間

導獎利方到東國卜築相州大山

精修嚴勵于昔阿遮明王現形聲

論辨辨明仰生衆有怨便自刻木

換其相發一入令侍者負所至

必隨其過此村故而聖也登石灘

百千人不可舉之即識者緣文皆

當留之驗將安本于以而誓日如

草意則輕亦若多誠耳奉之誠然

猶鴻毛矣遂刻一寺安置任委自

命以示辨揚大相模山嶽真大山

②寺名不動坊云又傳此像則與相

州大山之真像同本所刻而用本

根然延吾中有一兵備陸彦居于

卿之古荒川岸經冰霜以外以

齊心敬佛衆口以精進常歸明王

吾後宿念平濟寢夜凡有難則日

夜巡行辨其顯明王其言以救濟

無不奇驗土俗呼為生不動菩薩

相之大山年以寸數其所祈願在

待宮像一願時赴級山途歷千半

命今向過一苦行者世其負茂而

坐于石上餐餐下成宴非常前

一面而丘如故舊行者日語有竹

所須數柱大山翁告以善忘行者

時皆唱念數日奇哉相會者有瑞

像秘之日久推存價貨不敬易之

合感修態新則起開致法不助明
 王德身之儀如極大成感相非人
 工之所難及為行者殊有指像元
 坐謂翁曰此知之非曾長科法師
 成其現工真身于奉之者以像先
 七道而即言翁性從去所之此教
 百步行履履曰此地何返齋則須
 安直于斯息焉不見翁大驚歌彈
 以爲蓋是大山天聖之所扶于予
 予便就函函謀茅安像前亦苦行
 多年不知其所給予二錄稍異併
 ④以傳之抑草創以來數百餘霜奉
 仕像者或出家者流或優婆塞之
 類屢交臂而傳之壹應令古無異
 ⑤至天文初遂取持像去宿武江某
 宅若夜家產鳴動震震感惶惶謝
 罪即送還像前後有故則精舍必
 ⑥震故世人稱曰家出不動天文弘
 治弘禱元龜之間武之岩付城王
 太日資正及基泰氏誓崇信當山
 ⑦梵堂除役謀家門宋英天五十二
 年沙門定倚者以代換采寺像
 有通聲位時之使印一號當山瓦
 ⑧祕密如畫其功至為可稱焉厥后

東照神君遊佩之法拉台於
 訪問像事緣傳恭恭白之 神君
 日靈我法其祈于福乎像矣十九
 年十一月 神君顯威像威驗
 傳喜拾水曰六十石 山口非
 有見 且命寺說大聖 冰再鏡護國
 家之道場乃此山鎮武城之鬼門
 也自昔已來別置傳六口 令
 飛動力祝禱昇平報謝恩恩長
 二年傳詣京師而入破廟寺座主
 或演大情正之室親受祕密印
 海龍倒底還書萬般以繼日
 ⑩通三寶五年 神君神兵任真及
 經達於下野關石田三成反于逃
 江 神君還軍避幕西急避機宿
 寺於平石街門太夫村越茂介喜
 阿彌等供奉未禮像 神君使的
 寶刀一枚七條冥助且令侍修降
 伏法傳奉命精勤勇銳整刀壇上
 屬聲况日極利刀劍撤破魔軍明
 五本營堂後說乎則以刀印結聚
 十方寶刀思西傾倒而錯：萬聲
 起於空定如鋒插交鳴甲兵杖走
 逆黨無被佛亡則應其時日而照

實秋九月十有五日也其刀世
 ⑪傳付以爲重器者幸任庚子年二
 月寺災諸堂房舍一皆燒失勢燬
 結堅不動堂位侍侍發元悲遠此
 殃孽注血祈禱風颺惠惠說聖得
 ⑫免既而元瑞力再管手自振錫乞
 寶迴避四衆而發不日功就兩刑
 飛毫丹柱文報改觀爲時唯美會
 ⑬今先於是正嘉乙未年元新定傍
 門觀製施巧轉轉玄意榜上安釋
 迦三尊十六羅漢像門刺置持回
 矣閱二天像以爲奉生歸入之標
 乃作三尊紹隆之北照志願之限
 固也衛輝藉游餘燬惠棟老無所
 ⑭換其者敢其不足誠矣堂傍有愛
 岩社相傳當山閣即之神入官嘗
 ⑮修一東照君頌精焉復如舊神天
 和元年親如行師卜地於堂西南
 自官場飾有制祀祀以時修念場
 誠鳴呼 神若一出天下大定匪
 勢甚窮來應各各其以而便信降
 之餘延年此等香油每故衣鉢不
 匪修給如者疑：持障祕密佛奉
 日滿其形則皆 神君之賜也祀

不思之非極古奇歲正五九月二
 十七日稱不動會都歸精練道俗
 實甚男女兒童嬉庭滿堂道夜湯
 仰稱名誦咒歌頌神教各祈現實
 ⑯之事可謂來聞之一盛愛也頃歲
 現任吳山數不動堂之荒朽而得
 營繕之且為諸者聖潔淨用今工
 師而振井於堂前強教初而唯乾
 土不得水爲工等疲倦將臺而上
 山祈誓于本尊求得水乃寧不感
 則水奔湧沸滾滾後玉際鏡澈餘
 流末距終跨潤澤洗者蜀姑塵於
 身于飲者驚愕想於心胸勝名舍
 ⑰滿井矣山臺止百結請予作記于
 書其文息即鐘事安庶幾阿遮成
 德茲：被故古蓮部之邦送耶片
 塔燈：至龍華閣教之賜云
 享德第丁四堂次已而仲秋之數
 武郡寶林山雲雲精舍第三世
 必留慈願作文

沙彌元天 寬沐書

明治初期の卒業証書と寺子屋時代の教科書

小島 誠

埼玉縣平民

九野里喜文

当六月廿九日

卒業候事

第一大学区並埼玉縣管内
第十一番中野郡寺子屋村

平方學校

異に感ずるようですが新憲法施行前までは、履歴書に私達この

「平民」を書いたのです。一般には「庶民」の意です。明治政府は明治二年（一八六九）華族・士族の身分を創設して、農・工・商身分を總括して「平民」と定めたのです。

(2)校印は「第一大学区第十二番中学区第九十番小学」と書いてありますので(4)で説明いたします。尚平方學校とは現在の大字平方つまり明治二十二年町村合併前の平方村で明治六年林西寺に仮設された学校のことです。

(3)この証書で不明の部分（虫喰い）は「下等小学」です。当時の「小学教則」によると

第一章
小学ヲ分テ上下二等トス下等ハ六才ヨリ九才ニ止リ上等ハ十才ヨリ十三才ニ終リ上下合セテ在学八年トス

第二章

下等小学ノ課程ヲ分テ八級トス毎級六ヶ月ノ習業ト定メ始テ学業ニ入ル者ヲ第八級トシ次第二進テ第一級ニ至ル今其毎級課業授ケ方ノ一例ヲ挙テ左ニ示ス尤一般必行ノモノニハ非ズト雖モ各其地其境ニ隨ヒ能ク之ヲ斟酌シテ活用ノ方ヲ求ムベシ

◎第八級 六ヶ月 一日五字一週三十字の課程日曜日ヲ除ク以下之ニ倣ヘ

カナツカヒ 一週六字 即一日一字

綴方 以下略

テナラヒ 一週六字 即一日一字

習字 以下略

コトバノヨミカタ

單語 讀方

一週六字 即一日一字

サンジュツ

洋法算術 一週六字 即一日一字

筆算訓蒙・洋算早学等ヲ以テ西洋数字數位ヨリ加減算九々ノ聲ニ至ル迄ヲ一々盤上ニ記シテ之ヲ授ケ生徒ヲシテ紙上ニ写シ取ラシム但加減ノ算法ニ於テハ先ヅ其法ヲ授ケ而シテ只其題ノミヲ盤上ニ出シ筆算ト暗算トヲ隔日練習セシム暗算トハ胸算用ニテ紙筆ヲ用ヒス生徒一人ツツヲシテ盤上 題ニ答ヘシムルナリ前日ノ分ハ總テ盤上ニ記シテ生徒ヲシテ一同誦セシム

ギョウギノサトシ

修身 口 授 一週二字 即チ二日置キニ一字

民家童蒙解・童蒙教草等ヲ以テ教師口ツカラ縷々之ヲ説諭ス

コトバノソラヨミ

単語 暗 誦 一週四字

一人ツツ直立シ前日ヨリ学ブ処ヲ暗誦セシメ或ハ之ヲ盤上ニ記

サシム

◎第七級 六ヶ月 (一年生の後期)

以下 略

(4)学制(明治五年七月)

大中小学区ノ事

第一章 略

第二章 全国ヲ大分シテ七大区トス之ヲ大学区ト称シ毎区大学

校一所ヲ置ク

第三章 大学区ノ分別左ノ如シ

第一大区

東京府 神奈川縣 埼玉縣 熊谷縣 千葉縣 足柄
縣 新治縣 茨城縣 栃木縣 山梨縣 計一府九縣

東京府ヲ以テ大学本部トス

第二大区より第七大区まで略

第五章 一大学区ヲ分テ三十二中区トシ之ヲ中学区ト称ス区毎

ニ中学校一所ヲ置ク全国七大区ニテ其数二百五十六所

トス(人口約十三万人ヲ以テ一中学区ノ目的トス)

第六章 一中学区ヲ分テ二百十小区トシ之ヲ小学区ト称ス区毎

ニ小学校一所ヲ置ク一大区ニテ其数六千七百二十所全

国ニテ五万三千七百六十所トス(人口大約六百人ヲ以

テ一小学区ノ目的トス)但土地ノ情態ニ因リ數小学区

中一小学ヲ興シ之ヲ保護兼用スルノ類其便宜ニ任ス之

ヲ連区ト称ス(數区ヲ合セテ一區トスヘカラス)

以上は卒業証書を當時の法律をもつて説明したのです。

(二)次に明治前後のあまり知られていない教育事情について記してみます。

(1) 小学校の種類

前記しましたように小学区は大体人口六〇〇人で一学区として一校を設け、学区取締りを置いて就学の勧誘に努めました。当時の小学校は地域の事情により次のように分類されていきました。(A)尋常小学 (B)女児小学 (C)村落小学 (D)貧人小学(仁恵小学とも称う) (E)小学私塾 (F)幼稚小学 (G)廃人学校です。このうち(F)は六才以下の男女児で今の幼稚園に当る。(B)は尋常小学教科の外女子に手芸を加え、(C)は僻地の農民等に教則を省略して其要点を教え (D)は有志者の寄付金を以て設立して貧民の子供を教え (E)は小学教科の免状を有する者其私宅を訪れて教えるものです。

尚当時は学校の設立や保護はその学区内の負担金によること故
生徒が入学するには、当然授業料を納入せねばならず、そこで国
はこの制限を五十銭としました。然しこれでも納入不可能な者は
廿五銭としたり又一家にて二人以上の入学者のある家は割引し三
人以上の居る時は二人分にて可としたのです。

然し当時の世相は学の何たるかを理解せず従って就学児は一向
に増加をみせず、依って政府は学事奨励の爲め明治六年国庫金を
府県に交付しました。これを小学校委託金と称しましたが後補助
金と改称して明治十四年まで継続しました。その金額は年々増加
しこの九年間の総額は四百万五千円に及んだとのことです。

(三) 寺子屋時代の教科書

寺子とは寺子屋（寺小屋）に通って学ぶ子供のことで、寺子
屋は江戸時代の庶民の子供のための初級教育機関です。（武士は
藩校に学び全国で二八〇校設立され、岡山藩の花鳥教場・会津藩
の日新館・肥後藩の時習館が有名。この近くでは岩槻藩に遷喬館
があった）江戸中期より幕府の文教政策への努力と社会の商業
化の興隆は、必然的に文字の重要性を増しこれが寺子屋の増加を
促したのです。寺子屋の経営者を師匠と称し殆どが一教師一教室
でした。職業は平民が最も多く武士・僧侶・医師・神官の順であ
ったとのことです。（日本教育資料による）

こうした寺子屋での教育は「手習う」と称した「習字」が主で
これを「読んで」日常生活に必要な文字を覚えただけです。この
「手習う」本を「往来物」と言ったのです。つまりこれが当時の
教科書で、その語原は、往返一対の消息文の意で実際の書簡を手
習いの手本としたことに始まっているのです。

この往来物も時代の進展、地域社会の変容更に印刷技術の進歩
と相俟って実に多種多様に及んだとのことです。その作者は、中
世では貴族・僧侶・武士であったが江戸末期には手習師匠作成す
るに及びその内容も実生活に直接関するものへと変化していつた
のです。

この分類を「日本教育史」によれば

(1) 教訓的なもの

○ 童子教（左記は今尚生きてのことば）

(イ) 口は是れ禍の根

(ロ) 人は死して名を留め虎は死して皮を留む

(ハ) 三尺下って師の影を踏まず

○ 実語教

(イ) 学問と道徳的実践の大切さを説く

○ 護身往来

○ 処世往来

(2) 社会的なもの

○ 五人組前書

(イ) 毎月または年数回村役人が五人組寄合で読み聞かせて周知

徹底を期し、寺子屋の教材として儒教意識の浸透に利用さ

れた。

○ 庄屋往来

○ 魚字づくし

(3) 消息的なもの

○ 消息往来（高井蘭山編）

(イ) 消息文の慣例語句を集め示したもの

(4) 地理的なもの

○江戸方角

○日本諸国名産往来

○中仙道往来

○日本国尽

(1) これは日本六十余ヶ国と二島(志岐・対島)の名称を畿内

・七道に分けて書きつらねた手本。こどもに方位・方角の

観念を与え宛名・宛所の手習に役だてたものです。

五畿内・山城・大和・河内・和泉・摂津・東海道・伊賀・

伊勢・志摩

東山道

○町尽 村尽も出版され更に明治初期には「大日本府県往来」

世界国尽へと発展したのです。

○女文章名所往来

(1) これは日本国尽を旅行する形式で美文でつづられていると

のことです。

○東海道往来

当時江戸は政治、大阪は経済の中心で、その間を結ぶ東海道

の徒歩交通に、宿場の順を知ることが、相当に重要性があっ

たものと思われれます。これを七五調にしてこどもに「口遊み」

易くしたことは、教科書として当を得たものです。

それを左記に紹介しますと

都路は

五十次あまりに三つの宿

時えて咲くや江戸の花

波しずかなる品川や

頓て越え来る川崎の

軒端ならぶる神奈川の

はや程谷のほどもなく 昏れて戸塚に宿るらん

紫匂ふ藤沢の 野もせに続く平塚も

元の哀れは大磯敷 蛙鳴くなる小田原は

中 略

実にもまもりの大津とは はなのにしきの九重に

こゝろ浮きたる都ぞと 君のことぶきいwaitりけり

いwaitりけり

この「東海道往来」を読んで心にうたれぬ者がありましたらどうか。

安藤広重等の浮世絵を思い浮かべ更には「大和田建樹作詩多梅稚

作曲」の「鉄道唱歌」が自然に口遊むほどである。参考までに鉄

道唱歌の一部を記して終りとします。

46 東寺の塔を左にて とまれば七条ステーション

京都々々と呼びたつる 駅夫のこえも勇ましや

47 51 略(全部京都のこと)

52 神社仏閣山水の 外に京都の物産は

西陣織の綾錦 友禪染の花もみじ

あとがき (1) 卒業証書は平成二年の越谷市民文化祭に掲示しましたが

「字数制限」のため充分に説明いたしかねましたので再び

書くことにしました。

(2) 明治憲法のもとでは法律は片仮名で濁点・半濁点をうちま

せんでした。

参考文献

日本教育史 お茶水書房 近代百年の教育 唐沢富太郎著

日本人の履歴書 唐沢富太郎著 国史大辞典 吉川弘文館

明治学制沿革史 有明書房 日本唱歌集 岩波書店

日本史辞典 岩波書店

古文書に見る伊勢参宮旅行について

鈴木秀俊

この古文書は、庄和町西金野井、新井正男氏所蔵のもので、氏の祖父新井秀三郎氏（安政三年生れ）が、明治二十一年二月二日から同年三月十七日まで四十五日間、南桜井村鎮守香取神社氏子不怒講一行の、伊勢参宮関西方面旅行に参加して書かれた旅日記である。

作者は当時の厳しい旅中で、道中の出来事や交通事情、街道筋の神社仏閣、名所旧跡など詳しく記されている。

伊勢地方漫遊紀行

新井 秀三郎

（前号のあらすじ）

二月二日、不怒講一行は香取神社へ道中安全を祈願。村内川岸から乗船して江戸川を下り、市川を経て東京に至る。馬喰町泊。

三日、新橋駅から汽車に乗り国府津駅下車。箱根湯本温泉泊。

四日、箱根神社、三島神社参拝。沼津泊。五日、興津泊。六日、清見寺、久能山参拝、徳川慶喜公と出逢う。浅間神社参拝、静岡泊。七日、日坂泊。八日、坂下町泊。九日、秋葉神社参拝、天竜

舟下り、浜松泊。十日、豊橋泊。十一日、豊川稲荷参拝、岡崎泊。十二日、桶狭間古戦場巡覧、熱田神宮参拝、名古屋泊。十三日、名古屋市中巡覧、四日市泊。十四日、子安観音参拝、津泊。十五

日、伊勢山田外宮元御師、竜太夫方へ到着、泊。

十六日、伊勢内宮に参拝、神楽殿へ上り太々神楽を奉納。外宮参拝後、竜太夫に帰り祝宴。古市にて伊勢音頭見物。竜太夫泊。

十七日、二見ヶ浦見物、朝熊岳登山。竜太夫泊。十八日、休養、竜太夫泊。十九日、竜太夫出立、一行中五名帰村、二十二名は旅

続行。明星泊。二十日、伊賀田尻泊。二十一日、三本松泊。二十二日、長谷観音、三輪神社、大和神社参拝。奈良泊。二十三日、奈良巡覧、春日神社、二月堂、三月堂、大仏殿など参拝。八木泊。

（前号の続き）

以下は原文のまま

二月二十四日晴、午前七時八木駅を発し、歩行する一里にして大和高市郡大久保村に緩靖天皇桃花舘田丘上陵、周圀百四拾三間四分。東に天の香久山を見、南に神武天皇の御陵見えたり。行きて是を拝するに、大和高市郡神武天皇畝傍山東北陵。周圀四百三拾八間、四方御影石の玉垣を以て囲ひ、内に植木数多あり。神務所にて玉串を求め行く事一里、此間に畝傍山住吉丹社、耳成

山、天の香久山惣称して大和の三山と言う。東に高取の古城を見る。正午、宇野駅笠屋源兵エ方に着し午食す。

此所より東へ八丁を歩行し音無川（紀の川）に到り、笠屋の周旋にて小船二艘を雇ひ、高野山の麓まで川路四里半、二十二名にて賃金一円三十銭と約し乗船す。

此川は左右山高くして、水勢至って急なり。然るに船人は素人にて岩礁へ乗上げ、既に沈没せんとせし事再度なり。乗合同、すわや破船とその用意せり。然るを船人水中に入りて、船を荷ふて漸く押外し一時危難を逃れたり。夫より七・八丁下り、熟練の

船人乗替り、難なく午後六時東岸禿駝に上陸し、二丁ばかり行き旅舎玉屋与次右工門方に泊す。

上人曰く、此音無川は昔、弘法大師幼年の時、宇野駅東岸の山上に栄山寺といふ寺あり。此寺にて学問なされし時、余り水音さわがしきにより、是を御加持なされ水音を静めしによつて、此寺の下二・三丁の間を音無川と名付けたりと云ふ。

尚、此玉屋は有名な旅舎にして上等の構造なれども、婢女杯は至つて品行悪し。且つ此駅は、山の麓にて戸数凡百戸余りなりと見えたり。

二月二十五日晴又曇 午前五時玉屋を発し、かみや、たねを経高野山の麓に至り、是より登り五十丁にして屈曲数ひ難く、至つて険阻の道にして下は雪水鏡の如し。因却尤も甚だし。十一時漸く頂に到り、受付事務所にて社員を檀家寺西禅院に案内す。着して直ちに玄関にて日拝を依頼し、夫より金堂に到り拝す。惣棟造りにして内は金を以て是を塗り、或いは朱塗りの処もあり、堂々として美麗なり。又、境内堂宇数多あり、是を拝す。

而して、金剛峯寺に行かんとせしに、道泥濘にして歩行に苦しみ、依て社員の半数は西禅院に帰り、残り九名は大学林の前を通り、金剛峯寺に到り是を拝するに、実に驚くべき大寺にして座敷あまたあり、且つ美麗なる事言語に述難し。分て秀次公御切腹の間、今上天皇御着座の間、狩野探幽の襖、その他など実に目を驚かせり。

拝終りて高野の町に到り、珠数杯を求め、此処にて案内者交りて奥の院に赴く。道の左右に大木並び、且つその間に旧諸侯の石碑一里の間併列せり。奥の院に到れば僧侶数十名居り、「長者の

万燈、貧者の一燈」と唱ふ。往古より不消の燈あり、此処にて安産の守を出す。後に空海上人の入定せし処あり、小さき堂にして方四・五間の玉垣を囲ふ。是を拝し直ちに足を早め西禅院に帰り、二十一名にて坊入金二円、外に茶料二十銭を入れ、夫より当寺の馳走酒肴を出す。是は精進料理なれども丁寧なり。依て午食す。仏間に至り、僧侶八名出で来り護摩修行を受け、午後三時より歩を急ぎて山を下り、大いに疲れ日没して漸く玉屋に帰着せり。

二月二十六日微雨 午前七時玉屋を発し、行く事凡そ一里にして橋本駅なり。直ちに紀の川を渡り、凡そ一里行き三・四丁の峠あり是を紀見峠といふ。此時に掛り雨甚だ大ひにして、皆、傘を以て身を覆ひども身体悉く雨濡れとなれり。漸くにして峠に登り、一新講社井筒屋平七方に午前十時着し午食す。

尚、十二時過ぎれども益々強雨にして戸外に出る事能わず。然るに社員の内九名は、表の二階に登り婦と共に絃を弾じ、或いは歌ひ、或いは舞、共に笑ひて階上動き出るが如し。小生外十二名奥の座敷に居り、尤も寂然たるにより、而して雨略々小降りとなれば出立せん事を階上に報ずれ共、更に賛成をなす者なし。只一人石原氏、酔いて奥の座敷に来り共に出立せんことを告げれども、歩行叶わざる様子なれば、止むを得ず協議の上九名を残し、午後二時井筒屋を出立せり。

行く事半里にして峠に掛れば、黒雲天を覆ひ大風と共に大雨となり歩行する事能わず。路傍の露店に立寄り休憩する事三十分間にして雨漸く止み、依て、皆悦びて出立せり。四時三十分三日市油屋庄兵エ方に着す。(岩井、関根、山口、岩吉、新井、角山、新与、大佐、鈴勝、大久保)一同協議して、井筒屋に残り居る九

名は、必ず明日来るまで待居るに付、道を急ぎ来るべしとの書状を出す。且つ三日市駅は、凡そ四・五十戸の家込みにて、油屋は元本陣にして正直のはたごやなり。又庭に泉水ありて水車を掛け常に廻りて居れり。午後七時床に付かんとせしに、社員の内二名失へり（関根、角山）驚きて是を尋ぬるに、彼の二名衝突の陰にて対座し、酒肴を調ひ、又鉄瓶を以て鶏卵を蒸し、隠に飲を為し一興せり。

二月二十七日晴、此朝紀見エ峠に泊り居る社員の来るを待つ、九時に至れども更に来らず。一同協議をなし、「跡より来れば道を急ぎ来るべき」と書記したる書面を油屋主人に托し出立す。福町まで歩行せし処、漸く紀見子峠の社員追々馳加わり全員となる。安堵せり。福町より境まで一里余人力車に乗る。賃金九銭。正午、境町さつまや宇右衛門方に着し、午餐す。

午後一時山立し境町妙国寺のそてつを見る。誠に稀世の大樹にして大枝百出す。又夫れに劣らざる株八つあり、見物料一人前五厘を取られたり。尚歩行する事数丁にして大橋あり、是を大和橋といふ。長さ百間余ありて和泉国と大和国と摂津国の三国にまたがり架せる橋なりと言ふ。又僅か歩行し安立町難波屋の笠松、是は方今古木は枯れて、凡そ十間四方位の笠松あるのみ。此木の傍に、実に高値の砂糖団子の売店あり（此団子に添へて一葉の紙に「松はひくいが餅はたかい」との書あり）是を売りて、彼名松の見物料に充てると言ふ。又歩行して住吉明神に到る。是は豊太閣の設置なるや、実に美麗の社にして、前には淀君の架せし太鼓橋あり、形を太鼓の如くにして立ちて渡る事誠に難し。又御社は四社あり、神功皇后、表筒男尊、中筒男尊、底筒男尊を祭ると言ふ。

何れも金の戸、扉に松を画き尤も美なり。屋根は桧皮葺にして、且つ境内に島津誕生石と言ふあり、此石を取り置き難産の時、此石に水をそそぎ戴く時は必ず安産なすと言ふ。

夫より大海神、奥の天神、峯の姫松を拝し天下茶屋に到り一同足を留む。（大阪に向って行く時は左側なり）入口に一人受付か、亦是往來の客引き様のもの待ち居り、我輩を呼びて曰く「此処に太閤秀吉公の古事あり、拝見許す。暫時此処にて休息すべし」と。因て一同控所に待つ事凡そ二十分にして、案内出で来り庭園に通す。此庭は豊太閤の茶をたてし処なりとて、至って風雅の庵あり。側に別荘ありて一人の賓善き老人座し居りて曰く「拙者の先祖は、秀吉公に茶道を以て仕へたる千の利久の末孫二十六代にして、今四百七十五年を経たり。今は不動産ありて専ら農業を以て家計足れり、飽腹貧を知らず。因て関東より来る旅人に、太閤より伝わる軍中散と言ふ薬湯を施す」といふて差出せり。一同是を徳実の老人と思ひ呑む。而して彼老人いわく「此薬たるは、実に無類の良薬なり」とて軍中丸と言ふを出し「何病にても功能神速なり、諸君もたま〜遠路を来りたる」とて、種々物語りし上、三貼だけ是を呈すと。又太閤の御筆の額、及び御拝領の物品拝覧を許すといふて取出し、尚直筆の写を授与せり。其の歌に

山は不二雲にまきれてあさかすみ

津、きてみゆる三保の松原

依て社員も、実に特志にして徳行の君子の如くなるやと思ひ、競ひて是を請く。予も葉一貼を手に取りて見たりしに、金二銭の印紙貼用しあり。因て考へるに葉は無代価にて施すといえども、印紙まで貼りて数多の人に施す事いぶかしからんと心付き、予、

問いて菓の代価はと聞く、老人答えて一貼は、金十銭づつなると言ふ。予、此言によって始めて大山師の仕事なりと思ひ返却す。ついで一同返却する者多し。此菓を買たるもの僅か二・三名あるのみ。予は先に菓湯の報酬として太閤の祠へ賽銭三銭を納め、一同直ちに退出す。因て此山師も失念の至りなり。却説、一度社員の手採りし菓価を通計する時は、金七円に至るべきに能く其損失を逃れたり。将来、関東より旅行する人は、大阪、京都辺には此類の者多ければ御用心專一なり。

而して、午後四時雪降り出し、一同歩行に苦しめり。六時大阪上大和橋北詰、旅舎松屋与平方に到着し、安眠す。

二月二十八日晴 午前五時松屋番丁小熊といふ者を案内に頼み見物せんとて、賃金二十五銭と約し出立せり。小熊は「大阪は実に有名な大都会にして、西は海に浜し南は住吉明神を安置し、北に淀川を帯び東に山を見、景色佳なり」と言ひながら、先づ東に出て高津宮に参詣す。是は順徳上皇を祭りしものにして、高き処に鎮座する美麗の社なり。高倉神社は其側にありて稲荷を祭りしものなりと。是より生魂神社に到る。八方八つ棟造り、官幣大社なり。又歩を急ぎて天王寺に到る。表門（石の鳥居）に聖徳太子直筆の額あり、不思議の池の端に大いなる楠あり、聖徳太子、守屋の大臣と戦争の際、此楠に身を隠せしとて「身隠れの楠」と言へり。又金堂あり、五輪の塔あり、高さ二十四間七尺あり一同これに登れば、大阪全市街を一目し景色よし。又聖徳太子殿あり、金を多く用いて造り立派の御堂なり。又北に亀江の井、聖徳太子御用ひのもの、竜宮の出亀入亀と言ふ名所あり。

爰を出、歩を進めて大阪中央なる高麗橋こまがしに到る。此橋は近県の

里程を定め出す本標あり、五・六十間の鉄橋にして左右にガラスの燈を建れり。夫を渡りて中之島に到り、是は淀川の中洲にして、内に有名な料理店（東京にも優る程なり）自由亭、洗心館等構造尤も美麗なり。又豊国神社あり、是は豊臣秀吉公を祭る官幣社にして、裏に招魂社あり、門前に力士陣幕の納めし御影石の長さ凡そ五間ばかりの角なる棒二本建てあり、実に珍物なり。夫より南に出て、治安裁判所、其他種々の裁判所併列せり。又少し行きて東西本願寺に至る。表門は竜の彫刻ありて誠に立派なれども、山内に入らずして帰れり。

先略、市中見物せしとて、午後一時二十五分松屋へ帰り午食す。一同評決の上八名（竹村定助、山口新次郎、野口平蔵、鈴木彦右エ門、新井与三郎、長与左エ門、君村栄蔵、鈴木勝蔵）は帰郷と定め、京都へ向け出発する事となり、残り十四名（関根定吉、大久保貞蔵、角山島太郎、石原伊三郎、石原与三郎、岩井喜久三、岩井彦三郎、大久保弥七、川口民蔵、橋本福太郎、山口権次郎、大竹佐十郎、下田甚平、新井秀三郎）は、四国琴平神社を参詣し中仙道を帰ると決し、依て別れの宴を開き、何れも別れを惜しみけり。午後二時三十分東西に別れたり。

一里行き大阪西海岸にて、午後四時汽船廣島丸第二号に乗船、讃岐国多度津迄（賃金上等一人分、一円三十銭、中等七十銭、下等五十五銭）中等に入り出航す。一同未だ海上を乗りし事なく如何あらんと心を痛めけるに、此日、折能く浪静かにして座敷に座するが如し。船中広くして二階三階あり、客凡そ五百名を乗れりといふ。船中にて夕飯す。（午後六時より午前七時迄は船中にて食事を出す規定なりと）夫より多度津に到る間に神戸港、高松港

等に寄港あり。二十九日午前七時、多度津港に着し、ハシケ舟にて上陸し（此舟賃金三銭）中の町茶屋弥平方へ到る。朝飯を食す。前の標杭に記しあり「東京を距二百八里二十間」一同、我郷土を遠く距るを思い、感情を引起せり。

二月二十九日曇 多度津より琴平迄三里、人力車十銭、此間右山脈、南は平垣東に四国の不二山を見景色よし。途中右に四・五丁入り空海上人誕生せし寺あり、屏風浦普通寺といふ。境内広く尤も大寺なり。夫より琴平山に到る。此山は象頭山と号し、象の伏したる形なり。直立十八丁にして悉く石段を以て築造せり。又左右に石燈籠、又国々より金円の寄附記載せし石杭あり、南平垣の田野を一望し景色絶佳なり。既に御本社に到れば拝殿、神楽殿、其他社務所の類、額殿等数多あり、何れも検造りにして実に立派なり。参拝終り午後一時下山し、琴平村備前屋幸八方に到る。午飯す。此駅内に玉串を入れる箱売屋数戸あり、依て此箱を購求す。

午後二時出立、歩行を急ぎ三時三十分、朝飯を食せし茶屋弥平方に到り、大阪商船会社木の花丸に三時五十分乗込みたり。此夜少しく風波ありて船酔程動揺すといへども、何なく午前六時大阪港に到着す。且つ船中にて朝食をなす。而して解船へ乗り直ちに大阪に上陸せり。

三月一日晴寒し 社員一同汽車に乗り、西京に行く事に決し、則ち大阪東北隅のステンシャウに到る。されども、まだ発車の期に至らざるにより、待つ事凡そ一時間、然るに神戸より来りし車あり、直ちに是に乗る。此日乗客多くして東京新橋杯より一層盛んなりと見ゆ。午前十一時六分出車す。西京迄此間十三里、吹田、

茨木、高槻、山崎、むかうまちを経て午後六時西京停車場に到着す。時に雨降り来り、烏丸七条通りみやこや方にて昼食す。夫より三条通り大和橋北詰旅舎豊後屋友七方へ着す。此夜一同、二日間船中のつかれを補わんと晚餐して直ちに伏す。此夜雨益々甚だし。

三月二日曇 社員一同案内を頼み午前六時出立、市街を見物せんと先ず東山めぐりをなす。其名所左に加茂川を渡り裁判所あり、国の宮口、仙洞御所、皇太后宮、京都府、紫宸殿、禁裡の御所、西園十九番観世音古山の風を存す。御霊神社朝廷の氏神なり。官幣中社吉田神社は、四社合併せしものとして、尤も善き構造なり。又八百萬の神を祭りし大元宮と言ふあり、小社なれども珍ら敷社なり。其吉田神社に行く途中、第三高等中学校を建設する敷地なりと十丁四方位の圓いあり、実に莫大の学校を造るものと見えたり。

柅尼尊天の祠、及び法然上人の古跡を見る。是は石にて古体なり、後に紫雲石と言ふ。昔、法然上人此石に座して仏法を修行せしなりと。又勢至堂円光大師の御廟の側に熊谷蓮生坊、及び太夫教盛の墓等あり、紫雲山金成光明寺黒谷の庭に熊谷鎧掛の松あり、浄土宗本山なり。又粟田口御所至る。天子の御隠居所なりといふ。此座敷には狩野探幽の描きたる襖など数多あり。其他、靈宝には金の五重の塔、黄金の拵、加藤清正朝鮮出兵の際携帯せし靈像あり。其他種々宝物あり。又天子御装束の間、次に秀吉公御装束の間、其外庭に右近橋、左近橋の名木あり。内覧料金二銭五厘。

亦、知恩院に至る。此寺は徳川三代將軍の建築せし浄土宗の本

山なり。此本堂の軒に傘の差入れたるありて、此傘を見て土人も年の豊凶を知ると言ふ。是は家光公の御建立にして表間口二十四間、梁間十八間、表広間二百二十一畳敷、尤も大寺なり。境内に大釣鐘あり。夫より官幣大社八坂神社を拝し、藤丸山ます屋方にて午食す。立ちて清水観世音に到る。本堂の前に舞台といふあり是を清水の舞台といふ。是より西京市中を見る時景色よし。大谷御本廟、大佛殿、豊国神社を参拝す。夫より東に阿弥陀ヶ峯といふ小山あり、秀吉公伏見桃山の城に於て御他界、此山の頂上に葬りしといふ。夫より十七番札所六波羅密寺観世音を拝し、芝居町、祇園町を通り午後六時豊後屋に帰り泊す。

三月三日晴 此日一同案内を頼み西山を見物し、直ちに道の中仙道に採りて帰らん事に決し、午前七時に立出して十八番札所六角堂如意輪観世音を拝す。又二条城より官幣中社北野天満宮に詣ず。三公門といふあり、本社は八ツ棟造りに内は金銀をちりばめ、尤も美麗なり。官幣大社平野神社は天満宮の後にあり、不二山桜、突羽根桜の名木あり。

夫より田野の間を歩行し、葛城郡大北山村臨濟宗鹿苑寺、通称金閣寺に到る。此庭中を拝見す、案内料金二銭。此寺の境内に入れば別荘あり、是は素、東山義満公御隠居なせし処にして、方五・六間の家にて拂曉閣と号し、二階には御小松帝の御筆の額あり、又足利三代義満公の尊像あり。又庭に池あり常に泉をなす。出亀入亀の島あり、向に衣笠山を見る。是より後の山に弘法大師の作大黒天を祭る。又金花水といふあり義満公のお茶の水、銀花水は御手洗の水なり。竜門滝、安眠澤中に白蛇塚といふあり。夫より雪華亭南天樹の床柱、床の絵は鶯宿梅、此庵は義満公茶の湯座敷

なりといふ。是にて庭覽終り、夫より歩行して別格官幣社信長神社あり、又官幣大社下加茂神社を拝す。爰にて案内人と別れ東に向け歩行、比叡山の麓に至る。

農夫いわく、「此山は方今参詣する人更になし、且つ此先に到りては飲食店もなし」と聞く。依て一条村にて漸く飲食店山口作右衛門方を尋ねて、此店にて昼食す。此家の主人曰く、「此比叡山は、至って険阻にして登る旅人は難渋なり」といふにより、一同薄着に身を造りて出立し登りけるに、実に直立にして大ひに苦し、且つ人行きを見ず。其行く道の分かつたざるに問ふべき人もなかりし。幸ひ土地の婦人と見え七・八名薪採りに登るあり。容、異体にして頭に薪を載せ歩行するありて、一同是を見て異じ、或いは笑ひて凡そ行く事二十丁ばかりにして、婦人各横道に入れり。夫より更に人行き絶へて道を問ふ者なし。且つ一同大いに疲れ、汗を流し上着を脱ぎ、是を負ひ山間を辿りて頂に到れば、眼下に琵琶湖を一目し遙に唐崎の松を見て始めて蘇生の思ひをなせり。夫より七・八丁行き比叡山の東半腹に祭る弁財天を拝す、方三・四間の祠なり。又二・三十丁経て一寺あり、行きて黒谷へ行くべき道を問ふ。貧僧一人出で来り教えていわく「是より尚、左へ登る事十五丁にして黒谷あり、又此処に戻るなり」と、予曰く「是まで難題をなし登りしなれば行きて拝せん」と道を転じけるに、日もはや三時を過ぎければ其泊る処を失ふとて、唐崎さして下る者多く、予が説に賛する者少なし、やむを得ず一同彼処をさして下山せり。

坂下村を経て唐崎に到れば、此処湖水の岸にして日吉神社を安置す。旅舎その他、十五・六戸あり。一ツ松は実に稀世の古木に

て、枝凡そ六十間四方なりと。午後五時此処より小舟を雇ひ、大津まで湖上を乗る。此間一里にして西岸に駒止めの松を見る。昔明智左馬之介、坂本落城の時、此湖水を乗切り上陸して此松に馬をつなぎしとなり。又日既に没せんとしける時、大津より長浜に通る汽船を見、景色極めてよし。然れども社員の乗りし舟は長さ五・六間の小舟なるにより、水没高く棹の内に心中波を恐れたり。因て我友関根氏、兼て齋し来りし書を湖中に投じて、以て竜神を祭る。興ありて一同是を笑へり。七時漸く大津駅の北岸に上陸す。竹内定吉方に泊す。

三月四日曇 午前六時竹内を出立、三井寺に参詣す。奥の院下不動堂に弁慶軍用に使ひたる鍋あり、尤も古し。(直径五尺)奥の院は大堂にして古し。又少し行き小堂に弁慶比叡山に引摺り行きし釣鐘あり(直径五尺五寸)又、西国十四番札所三井寺の観音堂、長楽神社あり。大津東町に相生神社を拝す。別号は当地方にて馬の腹掛け杯はらかけに記しある大津東町馬頭観世音なり。もっとも利益ありとて其守り札を迎ふ、是は町内田中甚助所有なりといへり。又滋賀県庁ありて、方今建築中なり。

此大津より西京迄、三里の間山を穿ちトンネルを構造し、又道を切り水を通して西京の用水に充ると言ふ。尤も大工事にて盛んに人夫群集するを見る。此大津駅は、西京を隔てる事三里にして東に位し、琵琶湖に浜し戸数一万戸に及ぶ小都会なり。尚大津を出て松本村道の左に呼次の松あり、又石山寺に到る。著名の名所にして湖水の西南隅に位し、直立凡そ二・三丁の石山なり。頂に登れば堂宇十余あり、内に紫式部源氏の間有り、古体にして寛雅の風致を存せり。庭中に奇石数多突出し、此処より東を望めば湖

水を眼下に見おろし、実に近江八景の一にして(西国十三番札所なり)石山の秋の月といふも適せりと感賞す。一同此庭にて休憩す。

夫より戻ること凡そ十二丁、勢多の唐橋に到る。大小二つあり、東に百足山を見、景色最もよくして、昔依藤太の故事を思い出しける。午後二時草津駅藤屋己之助方に着し午餉を喫す。此処より一丁行けば東海道と中仙道の追分なり。時に雨降り出しければ、此藤屋の主人一泊すべしと勧めけれども日未だ二時なり。殊に社員此処に泊る時は、東海道に帰るや中仙道に入るや心一決せず、如何なる変心起るやも計り難しと、中仙道に入るべしと決し、守山駅を指して雨中を厭はず出立せり。

夫より一里半、守山駅大和屋源次郎方に泊す。此駅は貧賤にして、殊に大和屋の下等なる事甚だし。座敷の畳、戸障子杯は破れざる処なし、至って構なく、是に加ふるに風呂場等は、壁の破れし穴より西風吹込み寒きこと堪へ兼たり。予は入浴せしが直ちに洗わずして出る。其他一も調へし物なし。此大和屋の如きは社員旅行中、曾て見ざる貧宿なり。将来中仙道を旅行する者、此宿必ず避くべし。

三月五日曇驟降る、北風吹きて尤も寒し。午前五時大和屋を發し、野洲川橋を渡り、又愛知川橋を渡り愛知川駅きくや忠左衛門方にて午食す。而して同所より鳥居本まで四里半人力車に乗る。此賃金八銭。四つ日屋吉兵衛方にて休む。此間高宮駅の道添に大鳥居あり、是を多賀神社といふ。夫より凡そ半里にして高宮、鳥居本の間、中仙道の西方遙かに旧井伊公の城跡、則ち江洲彦根の城を見る。湖水東岸にして、凡そ十丁余りの山上に高櫓依然とし

て存す。土人いわく「該所は方今実に衰微せり。然れども滋賀県の郡役所等設置ありて僅かに町家の活計を謀る」といふ。

夫より、すりはり峠に掛り、湖水を見渡し景色美なり。馬場村を経て醒ヶ井駅鶴屋定次郎方に泊す。是は中等の旅舎にして、至って深切なり。此醒ヶ井駅は片側町なり。前に川を通す、東西一直線の町にして、人家凡そ二百戸位と見ゆ。東に行く事二・三丁にして山麓に泉あり、中に腰掛け石といふあり。太古、日本武尊東夷征伐の帰途、伊吹山の毒蛇の為に御足を損せしに、此石に腰を掛け泉にて御足を洗い、熱度忽ちさめ即時治癒せしに依って、さめがいの名ありて其跡を存せりと。山の麓より清水湧き出して常に泉をなし、尤も清潔の地なり。

三月六日陰る 午前五時鶴屋を発し、かし原駅に至り此所より赤坂駅迄人力車に乗る。此間五里、賃金十五銭。夫より関ヶ原駅に至り、美濃国名産養老酒を呑み、夫より同所合戦の旧跡あり、左方には江洲伊吹山を見る。みつや駅より加納駅忠八方迄人力車に乗り、此里程五里、賃金十二銭。(此間みろく川橋代一銭二厘、ごうど川橋代一銭五厘)又美濃国大垣の城を見る。午後四時橋屋忠八方に泊す。此加納駅は岐阜駅を距る事凡そ八・九丁、田耕地を界す。且つ岐阜駅は尤も繁昌の小都会なり。

三月七日晴 午前六時橋屋を發し、沼まで人力車に乗る。此間二里二十丁、賃金七銭なり。是より大田川を渡り、今渡村みなとや武七方にて昼食す。夫より予は、岩井氏と共にみだけ駅まで人力車に乗る。此間二里半賃金九銭。然るに途中にして岩井氏の乗りたる車、道路の石に挽き掛け、為に転倒して路傍に投げ出せり。驚きて起上がらんとせしに、予も大いに驚き車を降りて岩井氏を

助け起したり。運の強かりけん、別に痛みし所なく直ちに該車に乗り、午後三時五十分御嵩駅川口屋仁七方に着す。

此夜、関根、角山の両氏町中を散歩し、今日彌せしと言ふ猪肉を買來り、社員一同是を食す、味極めてよし。又此旅舎は、別に丁寧にはあらざれども、夜着などは清潔にして一同心能く伏せり。

三月八日晴 午前五時川口屋を發し、志筑宿まで人力車に乗る。此間二里、賃金八銭。夫より四・五丁歩行しかまで駅まで人力車に乗る。此間三里、賃金十四銭。此かまで宿入口、鈴木紋左衛門方にて午食せんの心算なりしが、未だ九時なれば、尚凡そ一里を乗り、此宿はづれ清水屋所次郎方に着す。午食す。

又大井宿まで乗車す、此間二里半、賃金十銭。夫より歩行すること三里にして午後四時五十分、中津川旅舎橋利喜方へ着す。此中津川村は村名なれども商家軒を並べ、尤も繁昌の地なり。又此旅舎は四・五日以来、曾て見ざる上等の家屋にして酒食尤も味よし、価安く、且つ深切なり。又小生等四名は新道を通りしが、別行せし十名は十三峠と言ふを通りしに意外の難澁を極めたりと。因て後日此道を通行の旅人は、道少し遠けれども必ず新道を通行すべし。

三月九日雨 此日、終日雨降りてやまざるにより、一同協議の上、滞在して旅の疲れを休めんと決し、将棋などを楽しみ、酒を呑みて楽しめり。

三月十日曇 午前六時橋利喜を出立、直ちに馬籠峠にかゝり甚だ難波せり。夫より妻籠駅松代屋磯吉方にて午飯す。此駅は至って下等にして物価高し。夫より野尻迄人力車に乗る。此間四里、

金二十八銭と約す。時に小雪に雨を交り降り来り、道路極めて泥濘にして車なれども歩行者と、或いは先を、或いは後れ、尤も遺憾の至りなり。

然れども、車夫に種々名所を聞く。車夫曰く「妻籠駅の東七・八丁に樋口次郎兼光の社あり」と。是は、高さ六・七丁の山頂に、凡そ三百歩程の平坦の地ありて年々大祭あり、尤も賑わへりと言ふ。又道の右に金時の出生せし地ありて、今に至るまで金時山と言ふを通かに是を覬たり。野尻駅に到り車を下り、一里三十丁歩行し、午後五時須原駅住吉屋藤吉方へ泊す。此旅舎は昨年焼失せしとて家屋未だ建築中にて、掘風呂などは外の板囲いの内にあり。然れども、名物のとろろを出し、味善く低廉にして、且つ深切なり。

三月十一日晴 午前六時住吉屋を発し、立町まで一里三十丁人力車に乗る。賃金十二銭。久保屋伝兵衛方に休み、西風吹き寒さ強く、焚火にあたり暫く寒を助く。夫より少し行き小野の滝あり。又寝覚駅越前屋嘉平方にて信州名物蕎麦を食べ、味わいよろしからず。これより後に、三丁ばかり行き浦島寺といふ小寺あり。是は太古浦島太郎の古跡にして、又浦島太郎竜宮より戻り来りし釣棹あり。此地左右山にして、是に木曾川の流れを帯び、此寺の庭より川を眺むれば、目醒の社、組板岩、腰掛け岩、疊岩、その外名石あり。床の山はその上に位し、其景尤も美なり。又芭蕉翁の句あり。

ひるがおに昼寝せふもの床の山

夫より十二丁歩行し、木曾の棧橋あり。今は渡る人も知らずして通行する程の小橋にて、凡そ長さ一間位なり。此名所も、又驚

けり。然れ共、木曾川の激流は道に添うて川中に名石奇岩数多突出し、景色善き処なり。側に、芭蕉翁の碑あり。句に

棧はしや命をからむ驚かつら

又我が友角山氏、余り名橋の小さきに驚きて、

尋ね来て棧橋渡る三足かな

と詠じ、実に趣向面白し。

夫より二里半を経て、福島駅藤屋勘助にて午餉す。夫より宮の越に至り、此処木曾名物塗物屋軒を並ぶ。又藪原駅に箸、櫛の名物、宮の越に木曾物屋のあるが如し。

又直ちに鳥屋峠に懸り、此峠は登り二十丁、下り三十丁左右積雪道を覆ひ、道路尤も泥濘にして歩行に苦しみ、寒風の中に汗を流し、午後六時奈良井駅徳利屋兵衛門方に泊す。此家たる左右山間にして庭中凡そ積雪五尺位を見る。家悪くして調理尤も味わい悪し。

三月十二日晴 午前七時徳利屋を發し、にい川、もと山を経て午前十一時、洗馬駅吉丸敬次方にて昼食す。是より（善光寺道に此処より入る）午後一時信州松本迄一同馬車に乗り、此間四里半、賃金九銭。夫より三十丁歩行し浅間温泉湯場地本屋形三方へ着す。此浅間村は小山の西麓にて、温泉宿数多あり。家の構造は中仙道の内にては尤も繁昌の地なり。一同彼の温泉に入る事数回にして気色快然たりき。

三月十三日晴 午前七時浅間を發し、一里歩行し苅原峠に掛る。此峠は直立七・八丁なり。尚一里十丁行き会田駅に到る。尚立峠といふ二十丁ばかりの峠を越し乱橋駅鶴屋熊次郎方にて午食す。尚三里行き青柳駅に到り、おみ駅まで一里余の処人力車に乗

る。賃金十三銭。夫より猿が馬場峠に掛り、此峠は凡そ十五・六丁程の登りと見えたり。左右雪堆ゆきかたくして道大いに悪し、漸くにして頂に到り山下屋長次郎方にて休憩し、夫より一里半稻荷山駅一新講社平塚屋初太郎方へ、午後五時五十分社員一同無事到着す。且つ此旅舎は中等の家なり。

三月十四日晴北風寒し。稻荷山を出立、丹羽川橋を渡り、善光寺大門前、鶴賀町扇屋金四郎方へ午前十一時着す。却説かえりごと此追分より上杉謙信と武田信玄と川中島合戦の時、謙信の布陣せし妻女山を東に観る。此山、高山の麓にして小山なり。(此山に当時招魂社を祭りある由)東に海津城跡あり、川中島を経て犀川さいがわに架する仮橋を渡る。長さ三百間なりといふ。(橋代金一銭八厘)

善光寺は天台宗にして本堂の正面に善光公の像、右に阿弥陀仏、左に不動尊を安置す。前に不消の燈あり、僧侶多くして尤も大寺なり。天子御臨幸の座敷等あり、又境内に定芝居、諸商店並列し大いに賑わへり。

因て此町に一泊し町中を見物せんといふ者あれども、日未だ午前なれば出立の事に決し、午食して午後一時出立す。屋代駅まで馬車に乗り、此間四里、賃金十三銭。午後五時屋代駅柿崎源左衛門方に泊す。此宿は元本陣にて中等の宿なり。

三月十五日晴 午前七時柿崎を出立、大いに道を急ぎ上田駅に至り米屋彦兵衛方にて午食す。夫より小諸駅上田源次方へ午後三時三十分着す。元本陣にして上等の旅舎なり。又此小諸駅に汽車のトンネルトンネル開穿あき中にて、上田屋の邸内西脇を数十尺切下げたるを見る。且つ此処は西風の名物なりとて、極めて寒し。

三月十六日晴 西風大いに吹出し午前七時出立、追分駅に到る。

此間三里、左に浅間山ありて草木更になき岩山にして頂上より炎々として煙を出し、雪はその間にありて眺望極めてよし。

夫より一里八丁を歩行し、沓掛駅に到り牛店屋にて午食す。夫より僅か行き雲場村に至る。信濃国と上野国の境、又長野県と群馬県なり。且つ小諸駅より坂本駅まで間八里余にして、東京地方より信濃、上野の二ヶ国に送る物個を載する馬車陸続として絶へず、実に何万駄なるを知らず、その莫大なるに驚く。且つ其間に毎日出稼ぎする馬車六百台ありと聞けり。又沓掛、軽井沢に物個取扱所ありて、五・六反歩の庭に物個山をなせり。

雲場村より新道と旧道あり、新道は四里五丁、旧道は三里三十二丁、新道は道遠けれど通行によるしといふ。因て新道に入り、夫より碓氷峠つばきに掛る。此道路たる左右石山の間を造り、脚下は幾千仞の谷を見、幽かに其水音の間ゆる程にして、山腹を幾曲折なるか知らざるなり。然れども段々に下る道なれば安く歩行して、午後五時坂本駅中村屋仲右衛門方へ着す。浴して後、岩井、角山、関根の三氏と料理店に登樓し、酒宴をなし微酔して心能く帰れり。此坂本駅は中等の町なり。

三月十七日曇 午前六時中村屋を出立、七・八丁にして横川停車場に到る。発車の時間を待ち、八時横川を発し、松井田、磯部、安中、板鼻、高崎に到り、此処にて乗換へ倉賀野、新町、此駅と本庄との間に神流川あり、武蔵、上野の国境なり。

本庄、熊ヶ谷、吹上、鴻ノ巣、桶川、上尾各ステーションを経、正午大宮停車場に到り、栗原友右衛門方にて昼食す。時に雨降り来り急ぎて氷川神社に参詣す。此社は武蔵国の一の宮にして官幣大社なり。

又道を急ぎ、岩槻を経て粕壁駅に到り上野屋市五郎方に着す。直ちに特使を以て帰着の便を村中へ報じ、宴食して午後七時三十分出立す。

時に出迎への者多人數、新川にて来会す。暗夜に万燈を照し、尚追々馳加わり陸続群をなし、一同喜びて鎮守香取神社に到り、旅中安全の神恩を謝し、又郷里の無事を祝い神酒を供し一同微酔して、午後九時各我家に帰る。

附記

平成元年四月三十日第一六六回史跡めぐりは、西金野井香取神社に詣で、県指定文化財の本殿を拝観しましたが、氏子総代鈴木清次氏、新井正男氏、役員の方々の歓迎を頂きました。厚くお礼申し上げます。

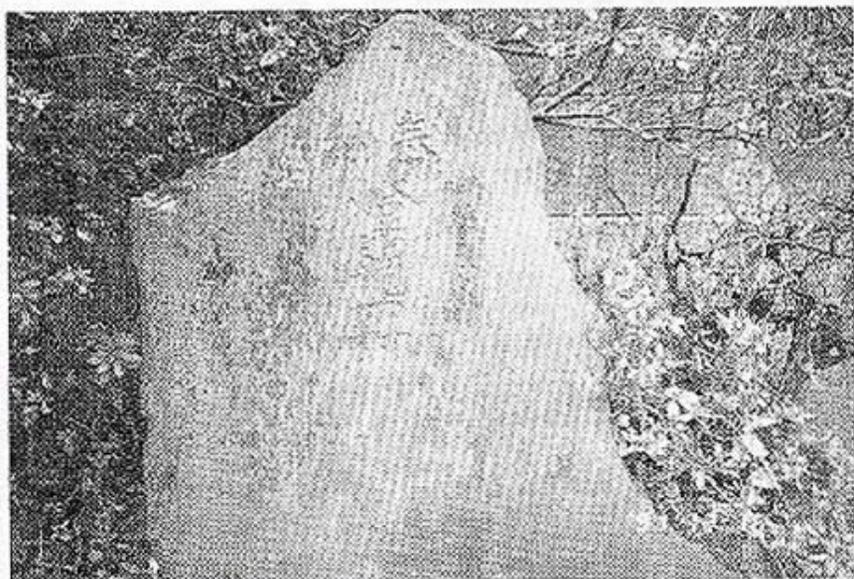
下段の写真

伊勢参宮記念碑 香取神社

伊勢太々講

奉納 燈籠 一對

下部に不怒講一行の氏名あり



関東大地震の話

高橋 清

一、はじめに

最近また地震があるのではないか、と埼玉県や越谷市としても「地震災害講演会」を毎年開いてきている。

大正十二年九月一日の関東大震災を知る人も年々と少くなっている。震災後六十八年が経過している。そこで

1. 関東地方特に埼玉県地方に昔からどんな地震があったのだろうか。

2. 関東大震災の様子はどんなようであったのか。

3. 文献・記録・古老の話などあつめてみた。

4. その時の被害はどれほどであったか。越谷近在で最も被害が多かったのは出羽村と武里村であった。

5. 被害地の共通点は。

なお本会の小島会長が平成三年市民文化祭の際雑談の中に語っておられた震災体験談(当時中学二年生十四才)が調べてみると全くその通りに記録されていた。

過去の地震体験を知ることにより将来に備えることができると思つたのであつめた資料を羅列してみる。

二、過去に於ける埼玉県のおもな地震

「埼玉県のおもな地震による被害」次頁の表は埼玉県環境部消防防災課発行の「埼玉県の震災対策」より写した。

この中で私の記憶している地震は昭和六年九月二十一日の午後

一時頃。私は小学校二年生で学校にいた。

三、関東大震災の様子はどんなようであったのか

「大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突然東京、神奈川、静岡、千葉、山梨、埼玉、茨城の一府六県にわたって大地震が襲来。まさに地球の終末を思わせるほど大地が震動、さらに数日間大小無数の余震が昼夜となく襲つてきて、市民を極度の恐怖と絶望のどん底にたたき込み、一瞬のうちに東京全市を焦土と化した。いわゆる関東大震災である。激震地東京神奈川などと比較すれば本県は被害が少なかったというものの、その犠牲は弱少県の埼玉にとつては余りにも大きかったといえよう。

特に被害の著しかった地域は古利根川、江戸川の流域にそつた北足立、南埼玉北葛飾の各郡で、なかでも川口、柏壁、幸手の各市街地がその被害地の中心となつた。

県下の被害は全壊半壊家屋あわせて一万三千七百十九棟、死者二百十七名、重軽傷者五百十七人、堤防の亀裂決壊は百九十九ヶ所におよんだ。

そしてこの大震災のどさくさの中で社会主義者と朝鮮人蜂起のデマが流されたため本県でもその犠牲となつた朝鮮人数百人が神保原、本庄で虐殺されるという不祥事を起したのである。「歴史と人と埼玉近史」所収

「大震災のおこつた九月一日から朝鮮人が震災に乗じて暴動をおこしたとか、井戸に毒をいれて日本人を殺そうとしているとのうわさがひろまつた。戒厳令が発せられ警察と軍隊とその指導下の民間自警団は朝鮮人を見つけしだい不法逮捕しほしまゝに虐

埼玉県のおもな地震による被害

年 月 日	マグニチュード エー (M)	地 域	被害の概要等
1042. 1. 21 (長久2.12.22)	-	武蔵	「…大地震、而依開堂宇転倒」とあるのみで疑わし。(豊島郡浅草地名考)
1649. 7. 30 (慶安2.6.21)	7.1	埼玉県東部	江戸城破損、人家倒壊死者多し、川越で町屋700軒大破
1697. 11. 25 (元禄10.10.12)	6.9	埼玉県南部	鎌倉箱岡八幡宮の鳥居倒れ、潰家あり、江戸城平川口梅林多門の石垣崩れる。
1859. 3. 9 (安政6.2.5)	5.9	岩槻市附近	武蔵岩槻城の本丸櫓、多門ほか大破
1898 明治31. 7. 12	6.5	埼玉県中部	—
1905 明治38.6~7月	群発	熊谷附近	—
1906 明治39. 4. 10	6.1	行田~羽生附近	—
1909 明治42. 7. 3	-	-	南埼玉郡越ヶ谷村で土蔵破損、川柳村で居宅破損、出羽村で石碑転倒。
1910 明治43. 9. 1	5.7	栗原附近の低湿地帯	2時17分ごろ強い地震が発生、武蔵南部で時計の振子がとまったりした。
1911 明治44. 12. 6	6.5 (7.4)	埼玉、茨城県境	—
1921 大正10. 12. 8	7.1	宝珠村附近	明治30年熊谷測候所開設以来の強い地震で踏査の結果、宝珠村で震動が最も強かった。
1922 大正11. 4. 26	-	-	熊谷で震度4、振子時計がとまった。
1923 大正12. 9. 1	7.9	小田原附近	(関東地震) 地震として古今東西に例を見ない大災害となった。本県でも熊谷では震央距離90km、発震時刻11時58分46秒、震度6で、被害は当時の粕壁町(現春日部市)付近を中心に古利根川、元荒川流域で大きく、同町川久保付近

次頁へつづく

年月日	マグニチュード	地域	被害の概要等
1923 大正12.9.1			は土地の隆起、陥没甚しく水平移動も数尺以上の場所が少なくなかった。地割れの最北端は北葛飾郡鷺宮町中島といわれている。地下では火災はほとんどなかったが死傷数百、家屋の全半壊1万数千におよんだ。熊谷では1~3日の間に震度1~5の余震109回、9月中に震度4以上のもの8回あった。
1925 大正14.3.10	5.5	本庄附近	—
1927 昭和2.12.31	5.3	武甲山東麓	—
1928 昭和3.3.23	5.7	埼玉県東武	—
1931 昭和6.9.21	6.9	小川町附近	〔西埼玉地震〕 死者16人、負傷者146人、住家全壊76戸、半壊124戸、非住家全壊131戸、同半壊161戸、煙突破損133、大地の亀裂などの被害が発生した。震度5。熊谷、前橋、筑波山、藤岡、水戸。
1931 昭和6.9.28	5.5	埼玉県北部	西埼玉地震の余震。
1931 昭和6.10.3	5.6	”	西埼玉地震の余震で死者1名、全壊5戸発生
1938 昭和13.2.7	6.2	本庄附近	—
1962 昭和37.2.6	5.8	埼玉県南部	—
1965 昭和40.1.27	5.6	埼玉茨城県境	—
1968 昭和43.7.1	6.1	東松山附近	〔東松山地震〕 負傷者7人、住家一部破損15、非住家破損1、東京都、栃木県でも軽微な被害が発生。震度4。熊谷、秩父、東京、水戸、甲府、横浜
1974 昭和49.8.4	5.8	茨城県南西部 (猿島町)	〔久喜地震〕 震央から20km以上離れた県東部の久喜市に被害が発生。屋根がわらの落下、墓石の転倒、商品の落下等の被害が集中。次頁へつづく

この中で私の記憶している地震は昭和六年九月二十一日の午後一時頃。私は小学校二年生で学校にいた。

年月日	マグニチュード	地域	被害の概要
1980 昭和55. 9. 24	5.4	埼玉、千葉県境	東京と川崎で負傷者4人、宇都宮で1人。 震度4は水戸
1980 昭和55. 9. 25	6.1	千葉県中部	(千葉県中部地震) 東京と川崎でショックのため、2人が死亡、 都内で38人、千葉県で12人、埼玉県で11人、 神奈川県で14人の計75人が負傷した。 震度4、東京、千葉、熊谷、横浜。
1983 昭和58. 2. 27	6.0	茨城県南西部	(茨城県南西部地震) 震央附近で壁や道路の亀裂、瓦や家具の上に 置いた物等が落下、家具やブロック塀の被害。 ガス管、水道管の砂漏等の被害が発生した。 県内では、川口市で窓ガラスの破損、大谷石 塚の倒壊、家具や本棚が倒れるなどの被害が 続出。震度4、東京、水戸、横浜。
1983 昭和58. 8. 8	6.0	神奈川県西部	丹沢山系で落石のため、登山者が死亡、埼玉 県では、入間市で屋根瓦が割れたり、棟が折 れるなどの被害が発生。 震度4、東京、横浜、甲府。
1985 昭和60. 10. 4	6.2	茨城、千葉県境	東京で56年ぶりに震度5を観測。埼玉県内では、 負傷者1、家屋被害1、その他2が発生。 熊谷、秩父、震度4。

埼玉県の震災対策

昭和61年8月発行

編集・埼玉県環境部消防防災課

殺した。

岩波新書 日本歴史(下) 所収

「九月一日に起った関東大震災で政府は戒厳令をしいたがこのとで三千人にのぼる朝鮮人が一般市民の組織する自警団などの手で虐殺された。これは警察から出たと見られる「不逞鮮人」襲撃のデマにのせられて不安におびえた市民が理性を失って排外主義的な感情にかられたからであった。」 岩波新書 昭和史 凶所収

当時現在の荒川放水掘削工事に多数の朝鮮人土工が従事していた。その中で大震災が発生したのでこの様な事件が起ったのも一因であつたと古老は謂う。

また大震災を具体的に記述されている文は次の様だ。

「おれは河原の枯すすき 同じお前も枯すゝき……」この哀愁にみちた野口雨情作詞中山晋平作曲の「船頭小唄」が当時一世を風靡していた。しかしこの流行歌があの大震災の予言歌になろうとは誰が想像しえたであらうか……。大正十二年九月一日初秋のよく晴れた残暑の日であつた。市民の生活は常日頃とほとんど変わりなく、この日も午前中の仕事を無事におえてやおら昼食のハシをとろうとした午前十一時五十八分突然「ゴッ」という突風に似た無気味な地鳴り。次の瞬間上下左右の激しい大地の振動が襲つてきた。家屋という家屋はキリ揉みにあつたようにガタガタきしみだし周囲の器物はうなりをあげて倒れ壁は煙をふいて崩れ落ちてきた。人々は自分の身体の重心を支えることが精一杯で無我夢中で外に転ろがり出た。激震さらに高まり街路も無気味な音をたて、亀裂、樹木をなぎ倒し家屋をつぎつぎに押し潰していった。

この突然の大地異変の恐怖に襲われた人々はいのちからが近く
の広場や竹藪たけくさに逃れ全く顔色を失つた」。

「歴史と人と 埼玉近史」所収

地震によい地盤は竹林が一番だといわれたいた。

越巻字丸ノ内(現新川町一丁目) 部落・備社べいしゃ年番帳に記載されてる記録

「九月一日午前十一時五十分頃突然大震動起り忽ち大震災となる。関東一帯を荒し家屋倒壊せるもの数知れず中にも東京の如きは火災となり市中大半焼失す。

実に死者十万人有余の多き出せり。

当字の如きは家屋の倒壊二十八戸(四十二戸のうち)半壊十二戸を出せり。幸いにして人畜の死傷は少く即死者一名傷者三名なり。出羽村内の即死者は八十八名傷者二十九名なり。実にその光景惨澹たり。幸いして当村神社は一分共全く被害なし(現一丁目稲荷神社のこと)

中新田の神社は倒壊せり(現二丁目稲荷神社のこと)

四、出羽村(現越谷市出羽地区)と武里村(現春日部市武里地区)

次の表は約十年前国土地理院が越谷市の下層地質調査をした。その時私は人足として一緒に作業をした。その際技師が持って来たものをコピーし保存してあつたものである。これを見ると出羽村も武里村も全半壊率はほぼ同じである。出羽村で倒壊率の高いのは越巻(現新川町)谷中(現谷中町)大間野(現大間野町)七左衛門(現七左町)である。ほゞ綾瀬川流域である。元荒川流域

表-2 出羽村の家屋倒壊状況

大字名	総戸数	全、半壊数	倒壊率	現在の行政区分(越谷市)
越 巻	45	37	82.1%	新川町1~2丁目、七左町7~8丁目
谷 中	51	41	80.3%	谷中町2~4丁目、宮本3・5丁目、神明町3丁目、内谷
大間野	76	51	67%	大間野1~5丁目、七左町1・4丁目
七左衛門	129	67	51.8%	七左町2・3・5丁目、谷中1丁目、宮本4丁目、赤山町3丁目、大間野町3丁目
神明下	66	11	16.5%	神明町1~3丁目、左敷田 戸井
四丁野	77	10	12.8%	宮本町1~2丁目、赤山町1~2丁目
(計)	444	217	48.8%	

武里村内の家屋倒壊状況

大字名	総戸数	全壊数	全壊率	半壊数	半壊率	全、半壊数	倒壊率
大 畑	53	20	37.7%	18	33.9%	38	71.6%
大 坂	59	23	38.9%	12	20.3%	35	59.2%
大 場	77	24	31.1%	21	27.2%	45	58.3%
一の割	83	32	38.5%	16	19.3%	48	57.8%
中 野	53	15	28.3%	13	24.5%	28	52.8%
薄 谷	27	10	37%	3	11.1%	13	48.1%
備 後	154	27	17.5%	17	11%	44	28.5%
増 田	8	1	12.5%	0	%	1	12.5%
(計)	514	152	29.5%	100	19.4%	252	48.9%

に位置する神明下(現神明町)・四丁野(現宮本町)は倒壊率が低い。これは下層土質の堅い所は地震につよく軟弱な所は地震によわいと謂うことがそのとき証明された。

五、古老の話 そのときの状況

(一)地震発生ときの様子

突然グォーッという突風に似た無気味な地鳴り、地面が上下左右に揺れるような大地の震動が起り、棚の物がバタ／＼落ちる。

周囲の器物はうなりをあげて倒れた。

家はキーコ／＼と音がしてかたむき倒れる。

川の水がドブ／＼と土堤まで上下する。

電柱が折れトランスが落ち、電線がたれさがる。

(二)地震後の様子

墓石は全部倒れた。余震がつづく。

川魚が道路面にぶちあがっていた。泥土も同様。

川の底泥がゆれて泥水となり落葉など浮き上る。

地割れし砂と水が噴出してる所ができた(液状化現象)。

井戸水が止ったもの、出がよくなったものもできた。

倒れた家は瓦庇の家が多かった。

掘立小屋・馬小屋・トタン屋根の家は倒れなかった。

瓦庇とは当時本屋は草根屋で庇が瓦屋根と云う家が流行した。そのため家の重心が前の方になって揺れるたびに傾いてゆき倒壊にいたった。

(三)朝鮮人襲来のデマ

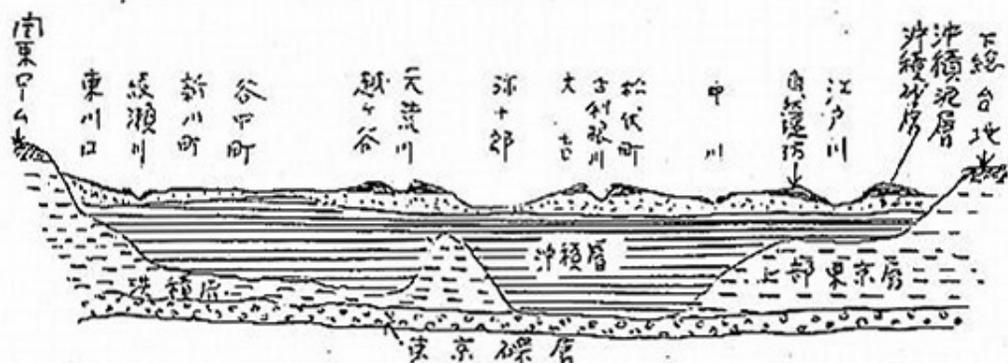
地震後東京市内に火災が発生してもすぐにわからなかった。午後三時頃より黒煙がものすごく空にたちこめるのは望見出来た。当時の老人は「地震雲が出た」と言ったそうだ。電話なし、ラジオなし、と云った時代なのでこの「火災情報」が人々の口伝えによって知ったのは二十四時間後だったそうだ。そして朝鮮人が襲って来ると云うわけで消防団は直に日本刀や槍、スキなどを持って小字境に詰めて警備の任務についたとされている。「東京では鮮人が井戸に毒を投げ入れて日本人皆殺しをはかっている」と云うデマは越谷各地にも飛んだとのことだ。

然し火災が発生しなかったことは不幸中の幸いだった。

六、地震被害が大きかった所の共通点は

次の記述は平成二年二月十七日越谷市主催「防災講演会」の際日本大学理工学部教授 守屋喜久夫先生の「米國サンフランシスコ地震に学ぶ」より抜粋したものである。

1. 沖積層 厚く堆積している所はあぶない。
2. 沖積層の深さと家屋の倒壊率は比例する。
3. 沖積層二〇米より倒壊多くなり三〇米より最大となる、旧利根川と荒川流域に広く分布している。私の住む新川町は四〇米と云われている。下部断面図参照



4. 自然堤防と自然堤防の間。後背地は沖積層が深い。

5. 埼玉県南部には旧湖沼、沼沢地、旧河川道が多くそこには腐植土が厚く堆積している。特に草泥層(スクモ)は非常に軟質で地震には弱い。綾瀬川流域には広く分布している。

6. 地震には噴砂、噴泥、噴水の記録が残っている。その様な所は水を含んだ泥砂層があり地震のゆれにより土と水が分離して液化現象を起し表土に噴出する。以上の様な現象が共通する。

七、むすび

大正十二年九月一日私は母の腹の中に居た。妊娠五ヶ月であった。世に云う

戦後日本に起きた大地震

1946.12.21 (昭和21)	M 8.1	南海地震	死者1,339人、全壊9,070、流失1,451、焼失2,598、大津波、紀伊南端6.6m、土地田畑15km ² 海没
1948.6.28 (昭和23)	M 7.2	額井地震	死者3,895人、傷者16,375人、全壊35,420、焼失3,960、断崖あり
1964.6.16 (昭和39)	M 7.5	新潟地震	家屋全壊1,960、地盤沈下、津波最高6m
1968.5.16 (昭和43)	M 7.9	十勝沖地震	死者49人、全壊家屋673、半壊家屋3,004、津波三陸沿岸4m
1974.5.9 (昭和49)	M 6.9	伊豆半島沖地震	死者不明29人、傷者78人、家屋全壊46、半壊125
1978.1.14 (昭和53)	M 7.0	伊豆六島近海地震	死者25人、傷者205人、家屋全壊96、半壊616
1978.6.12 (昭和53)	M 7.4	宮城県沖地震	死者28人、傷者11,028人、家屋全壊1,363、半壊6,067
1982.3.21 (昭和57)	M 7.3	蒲河沖地震	死者なし、負傷者168人、家屋全壊12、半壊19
1983.5.26 (昭和58)	M 7.7	日本海中部地震	死者行方不明102人、負傷者19人、家屋全壊834、半壊1,621

「地震子」である。地震子は胎教中「ショック」をうけたせいか「神経質」だと言われた。

私は翌大正十三年一月二日に生れた。だから震災のことは知らない。私が物心がつく頃、父や母は地震が来るとハダシで飛び出した。又震災の怖さをたびく語っていた。特に地震が来たら「火」を消せとうるさかった。

「棚の物が落ちるようでは地震は大きい」とか「立って居られない様な地震は大きい」とも言っていた。

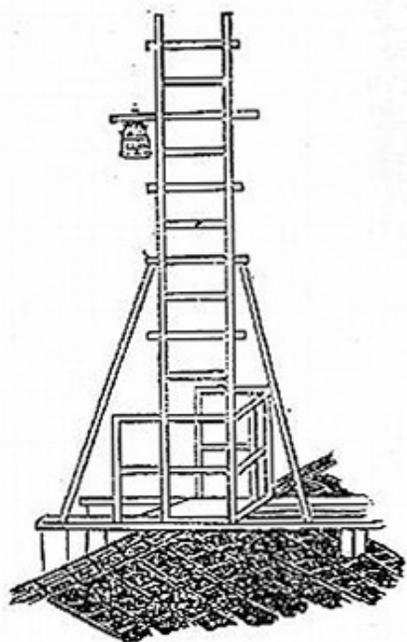
私は現在六十八才である。大地震七十年周期説という七十年となる。地震には予告がない。いつ不意におきるかも知れない。

尚最後に附記した表は戦後我が国で起きた大地震である。いまだ記憶に新しい地震名もある。

関東大震災をふり返って教訓とするのも意義深いことではなからうか。

先輩諸兄よりご叱正あらんことを乞う。

完



修験道場 武藤家の歴史

名倉 さわ

西平奥畑の武藤家（埼玉県比呂郡幾川村西平字奥畑一五一五）は、かつて慈眼坊と呼ばれた外秩父地方の修験道場だった。

今も修験者の用いた井戸に澄んだ水が湧いている。

細い道を車で登り、門前の道を左に曲がると昔を偲ぶ武藤家が見えてきた。

このほか西平奥畑の西河原バス停より新榑山の南東斜面を歩いて四十分ほど登ると、地元の人々により「トウノミネ」と親しまれている武藤家に着く。

武藤家のご当主は、六十四代目に当たる武藤昌蔵様。九十一歳。



第64代
武藤昌蔵さん

前もってお知らせしておいた私がお訪ねしたとき、ご当主はお休みになっておられた。奥様は九十歳とお聞きし、お二人とも元気なお姿に驚くばかり。

に私もお手伝いをした。

浴衣に角帯姿の正座で、姿勢は少しも崩されなかったご当主は、二時間余り午後の陽の射すお部屋で多武峯の歴史を小声ではある

が、正しい口調で説明して下さいました。

本山派修験慈眼坊の武藤家は明治二（一八六九）年までは、越生町山本坊の配下であり、外秩父の修験道の副先達を勤めていた。その後時代の変化により惜しくも修験道は廃止になった。

その時の慈眼坊は、六十二世にあたった寛慶法印により藤原姓を武藤姓に変えて、多武峯神社の神職についた。

武藤家の今の建物は十七世紀に建てられたものであり、江戸時代の修験道場の形態を残した貴重な建造物である。

「多武峯神社」

多武峯神社は明治の初めまでは、多武峯大権現とよばれていた。武藤家より南へ二百メートルほど行った山頂にある。



▶ 南西側からの武藤家全景



平歴史いろは骨牌

慶雲三（七〇六）年、大和国磯城郡多武峯（現在の奈良桜井市・談山神社）よりこの地へ藤原鎌足の遺髪を移して、祭神としたのがはじまりと伝えられている。

神社の名の由来は『多武峯』でなく、社殿のある山頂が塔の形をした独立の峯であったことから「塔の峯」と考えられる説がある。

江戸幕府から五石の朱印地を与えられた観音堂もある。

大正十三（一九二四）年、社殿裏から須恵質の瓦塔の破片や蔵什器が発見されている。これらは奈良時代末期から平安時代初期のものと推定されている。

この出土した遺跡が、現在埼玉県指定史跡となっている。村指定文化財もあり、当時を偲ぶものが数々ある。

その中に、役小角の修業二十年の生活を描いた役行者絵巻と天文五（一五三六）年に奉納された罽口。

修験者の装束一式、法螺貝、朱塗りの膳椀、密教の法具、行基作といわれる聖観音菩薩像。

鎌倉時代の中納言・藤原藤房（一二九五〜一三八〇？）の奉納と伝えられる太刀。十三佛板碑、二十六基の室町時代の板碑などの文化財がある。

お話のあとで「平歴史いろは骨牌」を戴いた。

武藤昌蔵様のおことば

此の骨牌（カルタ）は昭和八年、大野武男先生が平小学校に在職中、郷土史研究史料として作詞された貴重な遺稿と思われるので、今回（昭和五十三年三月）再版し、ご披露致す次第です。

い 家康公贈る白石朱印状
ろ 六面幢六枚合せて石佛
は 萩の宮『大山祇命』に七柱
に 仁王門朽ちて礎石を残すのみ
ほ 法華は宸筆鎌倉経
へ 平安のみ佛伝ふ都幾の本院
と 道忠の『白鳳』に開く慈光寺
ち 『乳児石』に悲しき童子の足の跡
り 『龍王』に雨乞して民集ひ
め 額づきて獅子舞ふ時は秋祭
る 留守居まで耳をそばだつ春里神楽
を 男鹿石に答ふる女鹿石大蛇みち
わ 我が里の歴史は古し千余年
か 寛元の占鐘は輝く因東一
よ 頼朝公寄進の青田千二百町
た 大般若年は貞観書寫小水磨
れ 靈験の蔵王権現金わらじ
そ 揃調子は天土の祭
つ 塚は比丘尼の血降り雨
ね 寝て覚めて歴史忘るな村の人
な 奈良朝の昔をしのぶ『塔』の峯
ら 楽翁の手記にも見ゆる慈光経
む 無縁塚エボ落す米岡子

う 打つ建具文化の頃のノミのあと
る 井は七井外に七木七ツ石
の 『法』守る七十五坊も杉林
お 『納猿』郷土美術の先を行く
く 組む五人倒すな生かせ江戸時代
や 流鎗馬の縁起は天福初の年
ま 『曲矢』は不思議の御矢の曲り場所
け 桂昌院御悩の癒えし阿伽の水
ふ 『藤原時代』の工芸品に流水鏡
こ 苔のむす五輪の塔に文亀文字
え 榮朝の建てし霊場霊山院
て 天文の五年を語る多武の鰐口
あ 東路に光る天台別院号
さ 三百五十これぞ徳川初期の住民
き 記念木慈覚大師のバイダラ樹
ゆ 弓立に悪魔を防ぐ経基公
め 『明和』年うゑても堪えし我が祖先
み 宮守の河内守は従五位の下
し 城山に強者どもの夢を追ふ
ゑ 恵方に在す千手観音坂東は九番
ひ 比企禪尼慈光のみ名を右府につぐ
も 文書の最古は多武の『文明』
せ 石塔婆弘安徳治元亭など
す 諏訪明神重忠公の武を守る

お訪ねした九月八日はちょうど残暑で、喉を潤した竹筒より溢

れている湧水の美味しさは忘れられない。

お二人の見送りを惜しみつつ帰路の車に乗った。

多武峯の山伏修験道場を訪ね、六十四代目武藤昌蔵様ご夫妻のお話によりその歴史を知り、郷土史の一端を学ぶことができた。

越谷市郷土研究会の皆様のご熱意にひかされ、研究の一つとして記す次第である。

「修験道」

(佐藤 行信の説)

高山秀峰に登り、修業し、密教的な修法によって呪力を体得しようとする法。またはそれを体得した山伏に対する信仰。日本の山岳信仰と密教的信仰が混合された宗教。役小角やくせうかくが開祖である。成立

役小角は伝記不明の山岳呪術者であるが、伝説によると奈良時代大和(奈良県)の葛城山かつらぎにこもり、蔵王権現を感得したという。平安時代になって、仏教修行場として山岳が選定されてから、密教本来のものと、日本古来の山岳信仰、儒教、道教、神道が結びつき、修験道は独自の一宗教として多くの信者を貴族社会・一般社会に獲得した。

吉野山、大峰山、和歌山県の熊野山、四国の石槌山いしづり、九州の英彦山へいげん、東北の出羽三山、長野県の戸隠山、石川県の白山などがあつた。

宗派

平安時代に、天台・真言の仏徒が山伏になったため、その所屬はすべて密教系寺院であつた。

室町時代に入ると、組織は固定化し、天台宗の系統である京都

の聖護院に本拠を置く本山派と、真言宗の系統である京都の醍醐寺の三寶院に本拠をおく当山派のいずれかに所属するようになった。本山派の道場は熊野山から大峰山にかけてである。羽黒山伏も本山派である。

当山派は古野山から大峰山にかけてが道場であった。今日では、真言宗醍醐派（三寶院）、金峰山修験本宗（金峰山寺）、修験宗（聖護院）の各派がある。



寛元三年銅鐘銘



◀ 役行者絵巻の一場面



▲ 天文5年に造られた鱈口



▲ 多武峯神社の瓦塔遺跡

研究史・海はどこまでできていたか

—縄文海進時の最高海水準について—

宮川 進

大昔、このあたりは海の底だったんだよ……埼玉県の東南部、元荒川、古利根川の流域でよく、聞かれる話です。

たしかに、この地域で、何メートル、何十メートル、土を掘ると、貝の層がでてくることがあります。

だから、この地域に人が住むようになったのは、ごく新しいことで、当然、古墳もないし、縄文とか弥生とかいった、いわゆる考古学が対象にするような「古代」は、ここにはなかったということになってきます。

東国を中心に花ひらいた縄文文化、耶馬台国の弥生時代、それにつづく古墳の時代、ヤマト朝廷の時代も、この地域には全く関係ないということです。

しかし、昭和46年には越谷市の見田^{みけ}方で、低湿地といわれる埼玉県東南部ではじめての古墳時代の遺跡が発見されました。昭和57年には草加市の西地^{にしち}総田^{そうでん}遺跡で祭祀遺跡などが発見されていますし、昭和59年には同市の蜻蛉^{せうりやう}遺跡で円墳の跡がみつかっています。

また、この間、草加市や越谷市などで縄文土器の破片がみつかったりもしています。徐々にではありますが、この東南部においても「古代はあったのだ」という証拠が発見されつつあるのです。

ということになると、「大昔は海だった」「掘れば貝が出る」という話と、どちらが正しいのでしょうか。

実は、どちらも正しいのです。「大昔は」というのには「大昔とは、いつ頃のころとする」という前提が必要なのです。恐竜が生きていた頃も「大昔」だし、江戸時代だって「大昔」なのかも知れません。

「大昔」を「今から一万年以上まえ」というように考えて、「海の底だったこともある」、そして、それ以後は「人の住める陸になった」とすれば、決して矛盾することはないので。海だったこともあるので貝の層もでてくるし、それ以後、人が住めるような土地になったので土器の破片がでてきたり、住居のあと、古墳のあとが見つかることもあるというわけです。

○東木氏の海岸線想定図

しかし、まだまだ、ご意見のある方もおられると思います。海だったのは、そんなに「遠い昔」ではなく、この近くの大宮台地などで縄文時代の貝塚ができていた頃に海だったのでは……と考えておられるのでしょうか。そして、その証拠にさし出されるのが、この地図（図1）です。

これは東北大学の教授であった東木竜七氏が大正15年に発表された「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線」という論文にある有名な地図です。この地図の斜線の部分が当時、海だったというのです。

いまから約六千年まえ、地球の温暖化から極地の氷山の氷がとけて、海水がふえるという現象がおこりました。

そのため、海水が陸へ侵入し、この関東地方では東京湾が大きくなり、いわゆる「奥東京湾」ができました。この時期は考古学的にいうと「縄文時代」で、この海水がふえ、陸へ侵入したことと縄文海進とよんでいます。（地質学上、有楽町海進ということもあります）

東木氏の地図は、縄文時代の貝塚の分布から、奥東京湾の海岸線を想定しようとしたものですが、たまたま、貝塚の所在をむすんだ線が現在の海没10メートルの等高線と一致するため、一般に「むかし、海だった線は、いまの海拔10メートルの線である」というように、そして、縄文海進で海が入ってきたのは海拔10メートルのところまでで、それ以下は海の底だったというように考えられてきたのです。

しかし、この地図は、いまでは致命的な欠陥があるものとされています。それは、東木氏の時代は、縄文時代について、「その土器が縄文時代のうちの、どの時期につくられたものか」を分類する「土器編年」ということが行なわれていなかったため、「縄文時代の貝塚」をすべて同じ時代のものとしてしまっていることです。

縄文時代は、今から約一万二千年くらい前から、二千三百年くらい前まで、約一万年の間、つづいたのです。

これをすべて、同じ時期とすることは絶対にできません。東木氏の図は、縄文時代の前期貝塚も後期のそれも全部を同じ時期のものとしているため、今や使えないものなのです。

（縄文海進の時期も諸説ありますが、縄文前期・紀元前五千年ころには終わっていると一般的にいわれています）

昭和にはいってからは、縄文時代の土器編年がすすみ、各時期の土器形式をふまえて、大山柏とか甲野勇とかの考古学者が海岸線の変化を発表されました。

それらの研究を総括し、海岸線の変化を東京湾だけでなく、関東地方を中心に広く全国的にとらえられたのが江坂輝弥氏（慶大教授）です。

特に関東平野では利根川と鬼怒川沿いの海岸線が、どういうふうに変わってきたかについて、縄文時代の各段階にわたって詳細にあらわされています。奥東京湾の海岸線の地図も、縄文時代の前期とか後期とかの別に、つくられました。

江坂氏の研究とほぼ同時期に、酒詰伸男氏（同志社大教授）も貝塚の貝の組成、どこでどういう種類の貝が、どのような割合で出るかということとを詳しくしらべ、その地理的分布や縄文時代の内湾の環境をまとめておられます。

考古学からする「貝塚と海岸線の関連」を遡及する研究が頂点にいたったのです。

東木氏の時よりは、よりくわしく、精緻になってきたわけですが、これらの研究も大きな限界をふくんでいます。つまり、考古学は「遺物」を扱う学問であり、遺物の出ない地域においては手も足もでないのです。遺物が出て、はじめて研究ができるわけが出てきていないところについて推論するなら、「今後、将来もでてこないとすれば……」という条件つきでしかできないのです。この奥東京湾においても、貝塚をむすんだ線より外側は海だったとはいえないはずで、「今後、遺物が見つかからないとすれば海だったといえる」とすべきだったのです。

海岸線を示す遺物がでないかぎり、考古学で海岸線の推測はできません。

貝塚と海岸の位置関係についても、最近の研究では数キロはなれているところもあるようで、その距離もまちまちですから、東木氏の推測海岸線は大きなマチガイだったのです。

しかし、一般には東木氏の海拔10メートル説が、いぜんとして信じられていました。

たとえば、多田文男氏（東大名誉教授）なども一九五六（昭和31）年にかかれた「低湿地の地理学—古利根川・元荒川乱流地域（中川流域）の例—」にも、「当時の海岸線は今日の海拔10メートル線とほぼ一致しているといわれている」としておられます。

○最初の異論

海拔10メートル説に対する最初の異論は、実は、その多田論文の前年・一九五五（昭和30）年に出された杉村新氏と成瀬洋氏（当時、東大理学部地質学教室）が、「南関東地方における海面変化、地震による隆起、海岸段丘」という論文で、わが国で初めて発表された「海面変化曲線」に関連して、「縄文海進時の最高海水準は現在の海面の高さを上回る6メートルの高さと推定する」としたものでないかと思われまます。

この推定は、都内におけるビルの基礎工事の現場の研究にもとづいたものです。地質学からのアプローチとして、考古学からのそのの行きづまりを打開するものという意義も深い論文です。

しかし、「最高海水準についての通説は10メートルで、6メートルという値は、それと基本的なことになっていない」としたこと

もあってか、一般的にはあまり注目をひくことはなかったようです。

○強力な反論

10メートル説についての実質的、かつ強力な反論は一九六三（昭和38）年の阪口豊氏（東大理学部地質学教室）によるものです。

同氏は「日本の後水期海面変動に対する疑問—縄文文化の絶対編年に寄せて—」で、「日本各地の海岸地帯にみられる海拔5m付近の汀線は、日本における後水期海進の高頂期の海面の高さである」とされ、東京湾周辺では見沼谷における地層の分析から「当時の海面は2.5mより若干高かった」と主張されました。

通説である10メートルに対し、まさに衝撃的な5メートルとか25メートルとかの数字が、ここでとび出してきたのです。

そして、それは地層の分析や縄文海進時の日本の他の地方の最高海水準の検討によってでてきたデータでした。

○動き出した学説

ようやく、海水準について、貝塚の位置からの推論ではなく、地質の研究からのものがつづぎだしたのです。海水準について、考古学の方からしか学説がでていなかったことは考えてみれば不思議なことでした。

そして、自然科学の分野からの海水準の数値は、これまでのものと全く異なったものでした。25メートルなど、10メートル説より海は浅かったという説です。

ついで、翌年の一九六四（昭和39）年には、前述の多田文男氏も、海進について、東木竜七氏の論とともに、山川才登氏のボーリング結果にもとづき、「海進が6メートルぐらいのところにあった」という説をも述べておられます。

（この山川才登氏は東京の下町の地下に分布している海成層の貝化石について最初に研究された方で、現在の丸の内に三菱銀行が建てられたときのボーリング調査で、地下4メートルの深さで貝化石層を発見、のちに、この海成層は大塚弥之助氏により有楽町層と命名されました。しかし、山川氏はこのボーリング地点1カ所の貝化石の研究のみにとどまり、海進・海辺についての考察はされませんでした）

○いよいよ驚くべき説が

この頃、文部省の科学研究費による総合研究の一環として「関東地方における海進海退」をとりあげていた財団法人資源科学研究所は、一九六五（昭和40）年に、その中間報告を出しています。

タイプ印刷の報告の中には、阪口豊氏の「埼玉県東部低地の地下構造と有楽町海進について」という論文もあり、海進期の海水準は一般に海拔4メートル土（プラスマイナス）に達したとみなされることを述べておられますが、さらに注目をひくのが、「関東地方における後氷期の海進海退について」という和島誠一氏、岡本勇氏、塚本光氏の共同論文です。その中には実に「海成層すなわち奥東京湾の海底―は現在の東京湾の海面と余り違わぬという集通しをえたのである」との、これまでの常識とは全くかけはなれた驚くべき説がふくまれていました。

この一九六五（昭和40）年、埼玉県内では埼玉研究・第12号において金井忠夫氏（県立不動岡高教諭）は「氷河性海面変化と五霞村の貝塚」という論文の中で、「有楽町海進による奥東京湾の海面に、海拔10メートルまで上昇したという説が一般的に信じられていたが、江川貝塚（注・五霞村）の発掘と土壌調査の結果では海進10メートル説と矛盾する答が出たので付記しておく」とかかれていました。

県内、県外、呼応したように、この年は海進海拔10メートル説をゆるがす論文があらわれました。何となく「常識」となっていた説に対して、いよいよ、科学のメスが加えられる時代がやってきたのです。

同年にかかれた三友国五郎氏（埼玉大教授）の「荒川低地の開発に関する先史地理的研究」―埼玉大学紀要社会科学編第13巻―は、あいかわらず、貝塚所在地の分布による海水面の想定を荒川で9メートル、綾瀬川、元荒川で10メートル、古利根川の東岸の杉戸町目沼で8メートル、南下するにつれて6メートルと低下している」と述べられています。

概して、歴史学者の「縄文海水準に関するアプローチ」は、いつまでも東木10メートル説の影を引きづっているようですが、それでも、この論文以後、主要な学説には10メートル説はありません。この論文は東木10メートル説の最後の記念碑となりました。

そして、翌・一九六六（昭和41）年には、和島誠一氏のグループの一人で化石珪藻の専門家である長谷川康雄氏（新潟県立高田盲学校）が関東地方の前期縄文時代の沖積上の中の化石珪藻の分析研究から、海成層の上限は現在の海拔高度2.5メートルに相当す

るところにあるとし、縄文前期海進のピーク時の海水準は通説に反し、意外に低かったと推定されるという説を出しておられます。

○ついに決定的論文

一九六八（昭和43）年には、六四〜六六年における前述の資源研の「関東地方における自然環境の変遷に関する総合的研究」のまとめとして、和島誠一氏ほか（松井健、長谷川康雄、岡本勇、塚山光、田中義昭、中村嘉男、小宮恒雄、黒部隆、高橋健一、佐藤孜の各氏）が「関東平野における縄文海進の最高海水準について」という論文が発表されています。

この論文は、研究そのものが「いわゆる縄文海進の最高海水準が現在の海面より10メートル高かったという通説を、その様式地である関東平野で再検討する必要を認めたため」のものとしており、結論として「珪藻化石により確認した海成層頂面高度は通説に反し0〜35メートルのあいだにあり、これは同時期の関東以外の地域の値に近いことがわかった」とむすんでいます。

貝塚の発掘による土器の編年、貝の種類による鹹度の調査、貝塚周辺の旧海域にあたる沖積平野上の簡易試掘による珪藻化石分析などにより検討されたデータが、この事実を示しているということなのです。

貝塚から出てくる土器からだけの推論から考古学・地質学・古生物学など、関係するすべての学問を通して、「縄文海進」を考える方向へ、ようやく、時代は動きはじめたのです。

また、この年、阪口豊氏は、「沖積世における関東平野中央部の陸化の年代」という論文において、大利根村における地層分析により、当時の汀線高度は1メートル+ α （ α は0〜3メートル）、

幸手の河畔砂丘において同じく、マイナス0.7メートル+ α （ α は0〜5メートル）というデータをえたとされています。

○研究・熟成の年代へ

一九七〇年代は、「縄文海進の最高海水準」について、これまでの常識をやぶる説が次々に発表された「激動の」六〇年代後半にくらべ、「縄文海進」研究史においては、「熟成の」年代といえましよう。

一九七二（昭和47）年には、六八年の和島氏ほかの論文において、東木氏と同じく、海進10メートル説の依って立つところと反論された江坂輝弥氏が「自然環境の変貌―縄文土器文化期における―」という論文において、「関東平野における奥東京湾と古鬼怒湾のごとく奥深い海進現象が認められた平野は他地域にはほとんど例がなく、関東平野の場合は海面上昇以外に造盆地運動に伴う沖積平野の地殻運動の現象も加わっているのではなからうか」とされ、海面上昇については1メートルないし3メートル未満とされました。あいかわらず、その推論の根拠は土器の形式と貝殻の分析のみですが、同氏も他の地方における海進が、これまでいわれてきたように深くはないことが明らかになってきたことに対して、自己の学説の発展をめざして、この論文をおかきになったようにうかがわれます。

翌、一九七三（昭和48）年には町田洋氏（東京都立大・理学部地理学教室）が、「南関東における第四紀中・後期の編年と海成地形面の変動」と題する論文を出され、これには「阪口・一九六三、和島ほか・一九六八、米倉ほか・一九六八、松島・一九七一、

千葉県開発局・一九六九など、ほか筆者の現地調査を参考として
：関東平野の海成沖積面（注・海進のおよんだ高さ）は4〜0メ
ートルの高さを保つ範囲が広いことがわかる」とのべておられま
す。

しかし、これらの学説の伝播は、当の現地へは、なかなか、お
よばなかったようで、一九七五（昭和50）年に刊行された越谷市
史は通史編上において、次のようにかいています。

縄文前期（五、〇〇〇年前）の海岸線は現在ほぼ一〇メートル
の等高線を連ねたところに相当している。

縄文中期になると、海岸線は春日部市の権現堂川筋のあたりま
で前進していたことが考えられている。

その後も海退は続き、縄文後期（約三、〇〇〇年前）の初頭に
は現在の侵食基準面上（海拔）5メートルくらいのところまで
海岸線は前進していたという。

海拔5メートル線とは越谷から松伏の北方にかけてほぼ引かれ
ているものである。

したがって、縄文後期初頭の越谷市域はまさに当時の海岸線で
あったことが推定される。

同年に出された川口市史調査概報第2集（川口市史編さん室）
も「縄文海進が最も進んだのは、縄文時代前期とされている。こ
の縄文時代前期の最高水準時には海拔10メートル付近まで海底で
あったと考えられていた」とかいていますが、ただ、ここでは、
それにつづいて「これに対して、最近では貝塚付近の沖積層のポ
ーリング調査、花粉分析等により最高水準6メートルという説も
だされている」としています。

これまでの伝統的な説に立ちながらも、最新の学説にも目くば
りをした点は、今後の全体の流れを推測させるものがありました。

〇ふたたび、激変の時代へ

そして、一九八〇年代、これはまた、「縄文海進の最高水準」
の研究において「激変の」時代となりました。この時期、埼玉県
の地元において、地方公共団体があいついで、市史・町史を刊行
したことにともない、地質学者がそれぞれ、自分の研究成果を発
表したのです。それは最高海水準が1〜2メートルとか、2〜3
メートルとか、まさに「10メートル説」からすると、大胆なもの
ばかりです。

これに対し、遅れているというか、先入感からなかなか脱却し
きれないのが歴史学者の方のようです。土器、貝殻などにしか頼
れない考古学者は「土地そのもの」を徹底的に分析して学説を出
す自然科学者にくらべて、今や「独自の学説」を出すこともでき
ず、どうしても、これまでの学説に引づられるのでしょうか。

この時期において、まず口火を切ったのは、一九八〇（昭和55）
年の新編埼玉県史・資料編Ⅰです。その中の宮代町身代神社遺跡
の項には「遺物、遺跡の発見された地点の標高は約7メートルの
関東ローム層上である。縄文時代の海進は標高10メートルであっ
たという見解が広く信じられているが、これは誤りであること
が実証された。海進の最高海水準は3メートルぐらゐとみられる」
とされています。

そして、この八十年代に、歴史学者の方はどのように「縄文海
進の最高海水準」についてかかれたかは、次のとおりです。

◇岩槻市史・通史編Ⅱ一九八五（昭和60）年刊

一七千年前には海水面が最も高くなり、現在の東京湾より3、5メートルは上昇したといわれ、綾瀬川の谷では県道大宮栗橋線の少し北、元荒川の谷では国鉄東北線附近まで海が侵入したと考えられる。6,500年ぐらい前になると深かった海も川の上流から押し出されてくる砂と波の打ち寄せる砂で市内の台地の縁辺にも遠浅の海辺ができ、貝を採取する集落が出現した――

最高海水準としては3、5メートルという新しい、かつ具体的な数字をあげておきながら、どこまで海がきていたかについては、綾瀬川の谷では大宮栗橋線、元荒川では東北線までとしています。

大宮栗橋線は8.3メートル以上の高さ、元荒川の東北線（現宇都宮線）とクロスする地点は9メートル以上の高さがあります。

結局、地質学上の新しい知識はやむをえず受け入れつつも、同市の北の蓮田市に存在する有名な関山貝塚や黒浜貝塚などから推測される例の10メートル説の影をまだまだ引きづっている書き方になってしまっています。

たしかに、これらの貝塚は標高10メートル以上の台地の上にあります。しかし、それをもって、その地点が当時の汀の線だと決めずに、海はもっと先の、貝をとるのに最も適して干潟をひかえたところにあり、しかも、海岸線というものは入りこんでいて、満潮や干潮によって、ゆれうごく状態であったと考えてはどうでしょう。

今でこそ、海と陸との「境界」は地図の上では、はっきりしていますし、現実にも防波堤などで明確に区分されているところも多いわけです。しかし、浅瀬になっていて葦や芦などが生えているところだと、満潮時と干潮時では、海陸の「境界」は、はっきり

きりしていないといえるのではないのでしょうか。

何千年もむかしは、海は好きなように陸に入ってきており、また陸も上流からの土砂で海に侵入し、両者をわけるラインなんて非常にあいまいだったはずですよ。

干潟なんて、海なのか、陸なのか、わからない場所が多くあって、当時の人々は、わずかな陸の高まりを伝えて、海の方へくり出して貝を拾い、魚をとっては今の貝塚のところへもってきて処理したと考えてよいと思うのです。

◇新編埼玉県史・通史編Ⅰ・原始・古代編 Ⅱ一九八七（昭和62）年刊

一縄文時代前期の中ごろには現海水面よりも5メートル前後高い最高潮位に達したといわれている――

一「大宮市寿能泥炭層遺跡の研究により、最高海水面は標高4、5メートル前後と推定されている――

寿能泥炭層遺跡については、埼玉大学の堀口万吉氏が埼玉県教委発行の「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書――人工遺物・総括編――（分析調査・考察・総括）」において、「縄文海進最高頂期の海面高度は約3メートル」とかいておられるのに、いったい、この5メートル説は、どこから出てきたのでしょうか。

◇川口市史 Ⅱ一九八八（昭和63）年刊 宮崎朝雄氏
（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）執筆

一川口市赤山陣屋遺跡では約七、〇〇〇年前、縄文時代早期後半、貝殻痕文期の海成層が確認され、当時の海水面が現在の標高3メートルにあり、赤山陣屋遺跡に入りこむ谷が浅い海であったことがわかったのである。

大宮市寿能泥炭層遺跡では約六、〇〇〇年前、（縄文）前期中頃、黒浜期の海成層が標高3〜5メートルで検出された。

海の深さは1〜2メートル前後であったから、当時の海水面の最高値は現在の標高7メートルくらいにまで達したものと考えられる。

寿能泥炭層遺跡から推定される最高海面については、公式報告書において堀口万吉氏が前述のとおり「約3メートル」と、はっきりかいておられるのですが、それがどうして「3〜5メートル」となるのでしょうか。

そして、「最高海水準」が3メートルというのに、「それは海底のことだ」と、2メートルをプラスして、7メートルとしなければならぬのは、なぜでしょうか。

ここにも、なかなか抜けきれない「10メートル説」の影をみるような気がします。

◇朝霞市史 Ⅱ一九八九（平成1）年刊

この市史では縄文海進の最高海水準については、別々の個所に二つの見解がのべられています。

—大宮市寿能泥炭層遺跡の研究により、縄文時代全時期を通じて最高潮位は標高4〜5メートル程度と考えられる。（第2編・原始古代、第2章三、谷井彪氏（埼玉県立さきたま資料館学芸課長）執筆—

—縄文時代に上昇した海は現海面より少なくとも3メートルは高くなったであろう。（第1編・自然、第4章一、加藤定男氏（都立武蔵丘高教諭）執筆—

同じ市史で、このように意見が異なるのは如何かと思いますが、

これも要するに考古学者の方が、いつまでも無意識のうちに「最高海水準10メートル説」を背負っていて抜け出せないのに原因があるように思われます。

それでは、この一九八〇年代に地質学者の方は、どんな説をだされたのか、これも年代順にあげてみましょう。

〇一九八一（昭和56）年

菊地隆男氏（東京都立大・理学部）

—約六、〇〇〇年前には、海拔5メートルの高度まで海面が上昇してきたのである。—

〇一九八三（昭和58）年

井関弘太郎氏（名大教授）

1 縄文海進高頂期の海面

1. 関東平野において隆起傾向の地区

関東平野の周縁部 五、四七〇±一〇年前

海面4メートル以上高位（九十九里浜など）

2. 比較的変動量が小さいと考えられる中間の地区

東京下町低地など 三、八九〇±一二〇年前

海面1メートルより若干上昇

3. 沈降傾向の地区

利根川中流部

2〜3メートル高かった

遠藤邦彦氏（口大助教授）ほか

—関東平野の縄文海進は六千年前を最盛期として気候の温暖化による海水準の現海面上2〜3メートルへの上昇があった。

—目塚の分布は必ずしも海進・海退そのものを現わすものでは

ない。海は八千九千年前には平野内へ深く侵入していたにもかかわらず、貝塚分布は海がまだ平野へ侵入していないことを示す。縄文海進の推移を復元するには、この期間に形成された地層や地形、そこに含まれる化石（貝、有孔虫、珪藻、花粉）などについての地質層序に基づいた研究が必要とされる。

堀口万吉氏（埼玉大教授）

— 寿能遺跡では、縄文海進最高頂期の海面高度を3メートルより若干上まわる高さと考えるところに、その時期は諸磯の期（約5,300年前）と推定することができる。—

△なお、参考として、坂口氏の2.5メートル説（一九六三）、

江坂氏の1.3メートル説、Hasegawa氏の2.5〜3.5メートル説を挙げておられます。

○一九八五（昭和60）年

遠藤邦彦氏（日大助教）、ほか、岡本勝久、高野司、鈴木正章、平井幸弘の各氏

— 6,500年〜5,500年前、縄文海進最盛期のころの草加市域は潮可帯下部あるいはその沖側付近の極めて浅い海底であったこと、海が退く過程で潮間帯—海性湿地—後浜の更に浅い環境へ変化していったことがよみとれる。四、一〇〇±一〇〇の時代、幸手付近においては海水の影響は全く失なわれ、安定した淡水環境が成立したことを意味する。一方、その頃、草加付近には、マガキが生息するような内湾環境が残存していたことが明らかとなった。縄文海進最盛期には古典東京湾に広大な干潟の環境が成立していたことを意味する。—

△潮干帯—高潮時と低潮時の平均海面の間にはさまれる海

陸の境界部をいう。高潮時には海面下に没するが、低潮時には日にさらされる。潮流のよわい「低エネルギー環境」の潮間帯には、細砂や砂質泥からなる干潟が発達する。また、アシなどの「好塩性植物」が繁茂する泥深い湿地であることもある。

○一九八六（昭和61）年

和田信氏（戸田市史・通史編上において。戸田市立郷土資料館調査員）

— 戸田市周辺では現海面下2メートルのところに、地層中に海面を示すリップルマークが残されている。このことから海面の上限を推定すると現海面とほぼ同じであったことになる。しかしながら、地域一帯の地盤沈下の量と沖積盆の沈降運動を考慮に入れると当時の海面は現在より2〜3メートルは高かったものと考えられる方が妥当であろう。—

山本良知氏（鷺宮町史・通史上において。久喜高教諭）

— 約六、〇〇〇年前には気候はもっとも温暖化し、海面が現海面より2〜3メートル上昇した。

○一九八七（昭和62）年

荒川—自然—荒川総合調査報告書I（埼玉県刊）より

— 立川期以後上昇しつづけた海面は、今から約五千年前頃の縄文時代前期後半には最も高くなり、その海面高度は現在の海面よりも約3メートル以上も高くなったと推定されている。

○一九八八（昭和63）年

小杉正人氏（草加市史・自然・考古編において。日大大学院）

— 最高水準はプラス15メートルであるが、その年代については明らかにできなかった。ただし（略）、七、五〇〇〜三、

〇〇〇年前の間に入ることは明らかである。

ここで、「縄文の海と森」という本をお書きになっておられる前田保夫氏のご意見を披露しておきましょう。

—日本で縄文前期高海面説を支持する人たちには、先入観念として海面は数メートル高いのだという意識が最初からあるのではないか。そのもととはといえば、昭和初期に関東地方の貝塚分布から旧海岸線の変遷を論じた東木論文を過信したことに起因しているように思う。貝塚の分布高度のみに基づいて縄文海進の海面高度を論ずることは無理で、現在ではそのような粗い資料は情報たりに得ない。もっと従来の説から大胆に脱皮すべきではないか。これは地質学の側から提示されている高海面説に対しても同様である—

○縄文海進時の原風景

海は、いまの海拔数メートルのところまでしかきていなくて、貝塚は海拔10メートルぐらいのところにあるということとなると、その頃、埼玉の東南部の低地は一体どのような風景だったのでしょうか。

いま、仮に縄文海進3メートル説をとるにしても、現在の3メートル以上の場所は全部、陸で、未満のところは全部、海だったということではありません。当時の地形は海と陸とははっきり区別されているという状態ではなく、河川の氾濫と、その上流から運んでくる土砂の堆積などで非常に複雑に入りこんでいたことが推測されます。

福井県の敦賀と小浜の間、日本海のそばに三方五湖がありま

す。そして観光コースに三方五湖めぐりというのがあります。塩水の湖、淡水の湖を、芦原の間をぬって走る小さな遊覧船でのコースです。この風景が縄文海進のころの埼玉県東南部低地の風景ではないかと思えます。そして、ちがうところは、海の深さが、もっともっと浅かったのではないかということですが。

気候があたかくなった影響で、海水は関東の奥地へ入ってきました。しかし、一方、奥の山岳地帯から流れる河川は豊かな土砂を下流へ押しながします。そして、あちこちに砂洲をつくりまします。満潮のときにも水面下へ没しない砂丘ができます。土砂で水の流れが分断されて、沼ができます。潮の満ち引きに応じて出入りしていた海水が入ってこなくなると、海からとり残された沼もできてきます。

山から運ばれた砂は高くつまれて砂丘をつくり、横へひろがって砂浜をつくりまします。

その砂浜は、満潮のときは遠浅の海、干潮のときには砂浜という「干潟」となります。埼玉県東南部の低地は、この頃、海と河川の影響をうけて揺れ動く、干潟、砂洲、砂丘、沼、入江、島など、小さな地形の入りこんだ大変複雑な地域だったのです。

その頃の人達—縄文人は丸木舟にのったり、浅瀬をつたわたりして、このような場所へやってきました。

自分たちの住んでいるところから日帰りできたこともあるでしょうし、日常用具をもって近くの砂丘で、キャンプをはりながらやってきたこともあったでしょう。

「さあ、ここが、きのういっていたところだよ。たくさん、貝があるだろ—」

「へーえ、お父さん、すごいね。ここ、お父さん、ひとりですつめたの？ やったね」

「沢山とってかえって、お母さんをびっくりさせようよ」

親子二人は砂の中から貝を掘りだしては集めます。たちまち、

貝の山ができます。ほかのところでは集めたのと一緒に、待っているお母さんのところへ持ってかえるのです。

そして、お母さんが貝の身をほじくり出して殻をすてると貝塚ができます。貝をとった海とは結構はなれたところにも貝塚はできたのです。

○低地における縄文前期進海の可能性

私は、次のような事実をもとに、「縄文海進時にも結構、縄文人はこの低地へ進出してきている。今後、調査発掘により、この低地で縄文前期遺跡がみつかる可能性は非常に高い」と考えています。

1. 低地においても、破片ではあるが縄文土器（前期）が発見されつつある。表面採集であり、さらに発掘が行なわれれば、地下に眠っていた遺跡の発見は十分考えられる。

低地における縄文土器（前期）発見の実例

①越谷市増森下前、縄文・諸磯式土器（前期）

②足立区花畑町 縄文土器（前期）

2. この低地から縄文土器の破片は右のような前期のものをはじめ、中期、後期のものもみつまっている。しかし、数少ないのが弥生土器である。みつまっているのは春日部市谷原新田と岩槻市笹久保新田である。そしてこの二つは土器がいずれも完形でできてきている。弥生時代の遺跡が地下深く眠っていることが推測さ

れる。

弥生時代より、もっと前の縄文時代の遺跡、あるいは貝塚も低地においては地下の深いところにある可能性が大きいと思われる。

参考図書

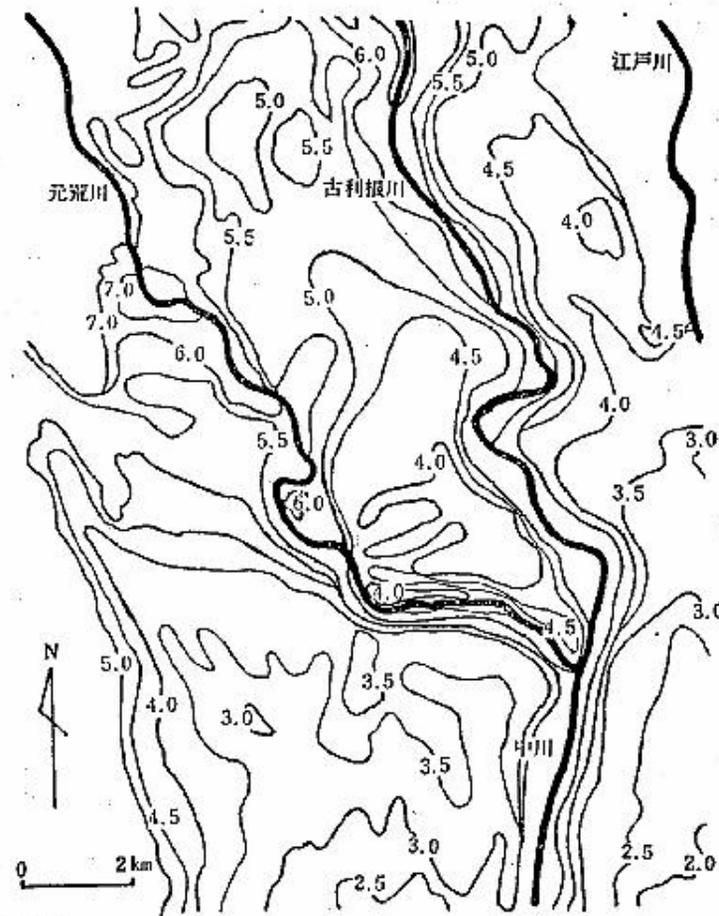
1. 東木竜七 「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線」 地理学評論第2巻7・8・9号（一九二六）
2. 江波輝弥 「南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進、海退」 古代文化第14巻4号（一九四三） 「海岸線の進退からみた日本の新石器時代」 科学朝日第14巻3号（一九五四） 「自然環境の変貌—縄文土器文化期における—」 第四期研究第11巻3号（一九七二）
3. 酒詰伸男 「南関東石器時代貝塚の貝類相と土器形式との関係に就いて」 人類学雑誌第57巻6号（一九四二）
4. 多田文男 「低湿地の地理学—古利根川・元荒川乱流地域（中川流域）の例—」 地理第1巻2号（一九五六） 「自然環境の変貌」（東京大学出版会刊）（一九六四）
5. 杉村新・成瀬洋 「南関東における海面変化、地震による隆起、海岸段丘」 JAPANESE JOURNAL OF GEOLOGY AND GEOGRAPHY 第26巻4号（一九五五）
6. 阪口豊 「日本の後氷期海面変動に対する疑問—縄文文化の絶対編年に寄せて—」 第四紀研究第2巻6号（一九六三） 「埼玉県東部低地の地下構造と有楽町海進について」 関東地

- 方における自然環境の変遷に関する総合的研究—文部省科学研究費(総合)による一九六四年度中間報告—(一九六五)「沖積世における関東平野中央部の陸化期の年代」第四紀研究第7巻2号(一九六八)
7. 和島誠・岡本勇・塚田光 「関東地方における後氷期の海進海退について」関東地方における自然環境の変遷に関する総合的研究—文部省科学研究費(総合)による一九六四年度中間報告—(一九六五)
8. 金井忠夫 「水河性海面変化と五霞村の貝塚」埼玉研究第12号(一九六五)
9. 三友国五郎 「荒川低地の開発に関する先史地理的研究」埼玉大学紀要社会科学編第13巻(一九六五)
10. 長谷川康雄 「関東平野の前期縄文時代における沖積上の微古生物学的研究—化石珪藻について—」資源科学研究所彙報第67号(一九六六)
11. 和島誠一・松井健・長谷川康雄・岡本勇・塚田光・田中義昭・中村嘉男・小宮恒雄・黒部隆・高橋健一・佐藤孜 「関東地方における縄文海進の最高海水準について」資源科学研究所彙報第10号(一九六八)
12. 町田洋 「南関東における第四紀中、後期の編年と海成地形面の変動」地学雑誌第82巻2号(一九七三)
13. 越谷市史第1巻(通史上)(一九七五)
14. 川口市史調査概報第2集(一九七五)
15. 新編埼玉県史・資料編I(一九八〇)
16. 岩槻市史・通史編(一九八五)

17. 新編埼玉県史・通史編I・原始古代編(一九八七)
18. 堀口万吉 「寿能泥炭層遺跡の自然環境」寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—(分析調査、考察、総括)(一九八四)「埼玉県寿能泥炭層遺跡の概況と自然環境に関する2・3の問題」第四紀研究第22巻3号(一九八二)
19. 川口市史(一九八八)
20. 朝霞市史(一九八九)
21. 菊地隆男 「先史時代の利根川水系とその変遷」アーバンクボタ第19号(一九八一)
22. 井関弘太郎 「沖積平野」(東京大学出版会刊)(一九八三)
23. 遠藤邦彦・岡本勝久・高野司・鈴木正章・平井幸弘 「関東平野の「沖積層」—アーバンクボタ第21号(一九八三)
24. 遠藤邦彦・小山修司・長田敏明 「縄文海進期の草加—下瀉の時代—」草加市史研究第4号(一九八五)
25. 戸田市史(一九八六)
26. 鷲宮町史・通史上(一九八六)
27. 荒川—自然—荒川総合調査報告書(一九八七)
28. 草加市史・自然・考古編(一九八八)
29. 前田保夫 「細文の海と森」(蒼樹書房刊)(一九八〇)
- 遺跡・遺物についての参考書
1. 見田方遺跡(一九七一・三 越谷市教委)
2. 草加の遺跡(2)—西地総田遺跡の調査—高橋一夫(草加市史研究第3号 一九八三・一 草加市)

3. 西地総田遺跡 高橋一夫 (草加の文化財(10) 一九八五・二 草加市教委)
4. 蜻蛉遺跡 (一九八五・九 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
5. 中川低地遺跡確認調査報告書 (一九八一・九 草加市・八潮市史編さん室) : 越谷市増林における縄文土器について記載

6. 新編埼玉県史・資料編2 (一九八四・三) 埼玉県土器集成4 (一九七六 埼玉考古学会) : 春日部市谷原新田における弥生土器について記載:
7. 岩槻市史・考古資料編 (一九八三・三) : 岩槻市笹久保新田における弥生土器について記載:
8. 武蔵伊興遺跡 (一九七五・三 伊興遺跡調査団) : 足立区花畑町における縄文土器について記載:



(参考) 越谷地方の等高線図(中川水系農業水利調査事務所資料より作成)

越谷市史、通史上より

縄文海進時の最高海水準・学説のうつりかわり

	歴史学者の意見		地質学者の意見	
1926 (大15)			東木竜七 (地形と目塚分布より見たる)	10
1955 (昭30)			杉村 新・成瀬 洋 (南関東における)	6
1956 (昭31)			多田文男 (低湿地の地理学)	10
1963 (昭38)			阪口 豊 (日本の後氷期海面変化)	5
1964 (昭39)			多田文男 (自然環境の変貌)	6~11
1965 (昭40)	三友国五郎 (荒川低地の開発に関する一)	10	阪口 豊 (埼玉県東部低地)	1+ α ($0 < \alpha < 5$)
	金井忠夫 (氷河性海面変化一)	10 ×		-0.7+ α ($0 < \alpha < 5$)
	和島誠一ほか (関東地方一)	0 ?	長谷川康雄 (関東地方の一)	2.5
1968 (昭43)	和島誠一ほか (関東平野一)	0~3.5		
1972 (昭47)	江坂輝弥 (自然環境の変貌)	1~3		
1973 (昭48)			町田 洋 (南関東における第四紀一)	0~4
1975 (昭50)	越谷市史 川口市史調査概報	10 10又は6		
1980 (昭55)	新編埼玉県史資料編 I	3		
1981 (昭56)			菊地隆男 (先史時代の利根川一)	5
1983 (昭58)			井関弘太郎 (沖積平野)	2~3
			遠藤邦彦ほか (関東平野の一)	2~3
			堀口万吉 (寿能遺跡一)	3
1985 (昭60)	岩槻市史	3~5		
1986 (昭61)			和田 信 (戸田市史)	2~3
			遠藤邦彦 (日本の地質3)	1~2
			山本良知 (鷲宮町史)	2~3
1987 (昭62)	新編埼玉県史・通史編 I	4~5	荒川総合調査報告書	3
1988 (昭63)	宮崎朝雄 (川口市史)	7	小杉正人 (草加市史)	1.5
1989 (平元)	谷井 彪 (朝霞市史)	4~5	加藤定男 (朝霞市史)	3

埼玉県東部低地における遺跡調査報告

宮川 進

1. 調査の目的

この地域については、昭和56年9月発行の「中川低地遺跡確認調査報告書」（草加・八潮遺跡確認調査団編集）が、ほぼ、越谷市以南の元荒川から古利根川にわたる遺跡の分布調査の結果を発表しています。

これは、昭和41、42年の越谷市見田方遺跡の発掘調査以来とだえていた埼玉県東部低地の「古代史」解明への動きを再始動させる、まさに画期的といってもよいものでした。

そして、「東部低地古代史」のなかで「孤立」していたともいえる見田方遺跡のまわりの「時間的」「位置的」空白をうめる事実が確認されたことでもありました。

特に、越谷市増林字下前での縄文前期の、松伏町大川戸字本田組での縄文中期の土器の発見は、根強くのこっている「縄文海進・海拔10メートル説や「東部低地は海だった」説に対する反証として、「東部低地古代史」のスペンをひろげる大きな成果でした。その後、春日部市における浜川戸遺跡の発掘調査、草加市の東・西地総田遺跡、蜻蛉遺跡の発掘調査などで、「東部低地古代史」の解明は着実にすすみつつあるようです。

しかし、越谷市の人口が、見田方遺跡発掘の昭和41年の9万から、現在の26万になったことにも象徴されるように、地域開発のスピードは足ばやで、いま、この時期に調査しておかねば、後世

の人々の眼にふれられないまま消滅する古代遺跡が数多くでてくる可能性が十分に考えられるのです。

前述の草加・八潮遺跡確認調査団の調査も元荒川、古利根川、毛長堀の現自然堤防を中心に行なわれたもので、この「低地」全域を悉皆調査したものではなく、未調査の空間を埋める作業は残されており、かつ、それはいそがねばならないことなのです。

そこで、とりあえず、東部低地の未調査部分について考古資料の表面採集を行ない、新しい遺跡の発見につとめることとしたものです。

2. 調査の方法・範囲

東部低地のうち、越谷市以北の現・旧自然堤防で畑として利用されているところのほとんどについて表面採集を行ないました。

しかし、未調査のところもあり、調査した箇所についても見落としもあるかと思われれますので、この地域において、これ以外の遺跡の発見される可能性は多いとお考えください。

3. 調査結果

(1) 元荒川水系

No.1 遺跡

元荒川が、地形的には大宮台地岩槻支台と慈恩寺支台との間をくぐりぬげようという、両支台のすき間、行政的には蓮田市から岩槻市へ入ろうとする入口に位置する。その左岸、道路のある自然堤防のすぐ下の畑地にある。

縄文中期の土器片を採集した。下流にむかって右方は大宮台地

岩槻支台であり、掛貝塚がある。掛貝塚は縄文前期を中心に、弥生時代中期住居址までを含んでいる。

この遺跡については、掛貝塚との関連を考えねばならないと思われる。

No 2 遺跡

植木の栽培地付近と畑で須恵器片を採集。現在の元荒川の流れとは直線距離で350メートルほど離れているが自然堤防上に位置していると思われる。

No 3 遺跡

「中川低地遺跡確認調査報告書」における元荒川右岸No 4 遺跡（所在地・岩槻市末田、久伊豆神社西側）の北につながる場所にある。畑において、土師器片、須恵器片を採集した。

この場所も、かなり大きな自然堤防上にある。この堤防は、本遺跡をはじめ、右記遺跡、右記報告書の元荒川右岸No 3 遺跡（所在地・越谷市小曾川²³⁵附近）およびこの報告書の後記No 4 遺跡をのせていると思われる。

No 4 遺跡

これも右記の「中川低地遺跡確認調査報告書」の元荒川右岸No 4 遺跡の西に位置する。

畑において、土師器片、須恵器片を採集している。

この畑に近い野島山浄山寺は慈覚大師による貞観2年（860年—平安時代）創建の伝説をもっている。

この付近が古くからひらかれた土地であるとのことだが、このよ

No 5 遺跡

元荒川が江戸時代まで、急に反転して北流する曲り角ともい

べき個所の自然堤防上に存在する。

土師器片、須恵器片を採集した。

かなり濃厚に散在している。土地所有者の話では、耕作中、灰らしいものがでてきたこともあるとのことである。

No 6 遺跡

No 5 遺跡の南側に位置する。

土師器片、須恵器片を採集している。

No 7 遺跡

現在の元荒川の流れとは非常に離れているが、実は江戸時代まで、川は袋山地域をとりかこむように直角的に北進したあと南流していた。この場所は、その北流の中間点に近い旧自然堤防である。

畑に、かなり濃厚に土師器片、須恵器片が散布されている。

時代的にも、古墳時代前期から、奈良・平安時代までの遺物をふくんでいる。

No 8 遺跡

この附近も元荒川が江戸時代まで東流して、また西流してかえってくるという曲流の部分にあたっている。

現在の越谷市立図書館南側の客土の畑地の南である。

土師器片、須恵器片を採集。

「中川低地遺跡確認調査報告書」の元荒川左岸No 1 遺跡では、土地所有者の話によると、以前、土師器のつぼが完形で掘り出されたことがあるとのことである。

No 9 遺跡

県道・越谷流山線と元荒川との間、自然堤防上に位置。県道からの日枝神社参道右側の畑で、土師器片を採集した。

この自然堤防は、見田方遺跡の北部にあたり、南北にかなり幅を有し、この報告書の後記No.10、No.11遺跡、「中川低地遺跡確認調査報告書」元荒川右岸No.1、2遺跡をのせている。

この遺跡から西へ約400メートルにある大相模不動・大聖寺は良弁による天平勝宝2年（750年—奈良時代）創建の伝承をもっており、その真疑はともかく、これも、この地域が古くからひらかれた土地であることをしめすものといえよう。

No.10 遺跡

前記のNo.9 遺跡の東部に位置し、久伊豆神社参道の神社にむかって右側の畑である。

土師器片を採集。

No.11 遺跡

No.10 遺跡のさらに東に位置、あやの幼稚園の南側の畑。土師器片を採集している。

(2) 古隅田川水系

No.12 遺跡

古利根川から古隅田川が分流する（現状では、古隅田川に合流する）地点の北側に位置する。

畑地にて、土師器片を採集した。かなり濃厚に散布されている。

No.13 遺跡

県立春日部高校北側の住宅地内の畑である。

須恵器片を採集。

春日部八幡神社をはさんで東側に存在する浜川戸遺跡の西の限界部分かとも思われる。

No.14 遺跡

西へ向っていた古隅田川が北流し、内牧の南で大宮台地慈恩寺支台とがぶつつかって東南流する曲流の部分である。

高い旧自然堤防の畑から縄文中期の土器片を採集した。

この自然堤防が縄文中期には存在したことの証拠となるため、河川流路史上の参考資料となると考えられる。

No.15 遺跡

春日部市の岩槻市との境界に近い増戸、国道16号線北側の古隅田川旧自然堤防上にある。

畑で土師器片、須恵器片を採集している。

濃密に遺物の散布がみとめられる。

No.16 遺跡

国道16号線をはさんで、No.15 遺跡の南側、行政区域は岩槻市長宮となるところにある。

大光寺の西側および東南の畑にて土師器片、須恵器片を採集、これも遺物は濃厚に散布されている。

(3) 古利根川水系

No.17 遺跡

春日部市南3丁目のマンション南側の畑に所在。東武線から約300メートルほどの住宅地のなかに、わずかに残された畑地である。

古墳時代前期、五領式の土師器片を採集した。

現在の古利根川とは、1,300メートルほど離れているが、古

い自然堤防がこのあたりまでのびており、その上に存在したと思われる。

No 18 遺跡

古利根川は以前、越谷市平方において、現在の流路より、一たん南流し、次に東流して現在の流路へ戻る流れをとっていたようであるが、その現流路への復帰地点近くに存在する。

旧自然堤防の畑より須恵器片を採集。

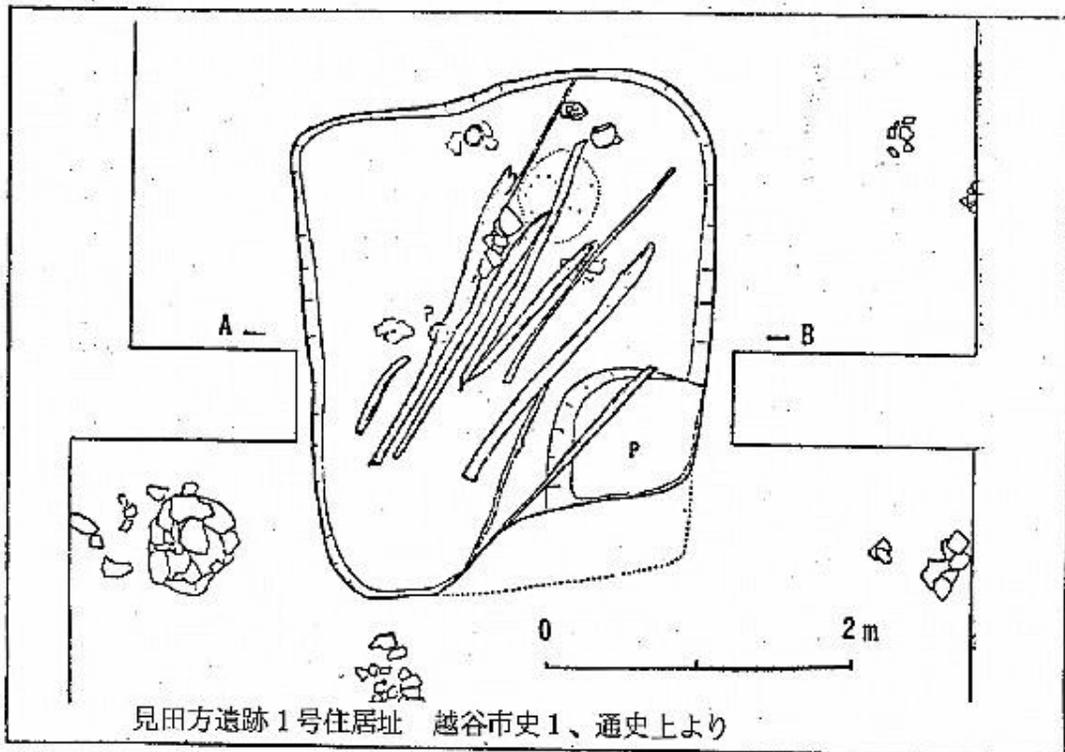
No 19 遺跡

No 18 遺跡と同じく自然堤防上、約800メートル東側にあり、現自然堤防に近い。

畑より土師器片を採集した。

〈参考文献〉

1. 草加・八潮遺跡確認調査団編集 昭和56・9 中川低地遺跡確認調査報告書 草加市史編さん室・八潮市史編さん室
2. 昭和46・3 見田方遺跡発掘調査報告書 越谷市教育委員会
3. 昭和60・3 岩槻市史通史編 岩槻市役所
4. 昭和58・3 岩槻市史考古資料編 岩槻市役所
5. 昭和63・3 春日部市史考古資料編 春日部市



埼玉県東部低地遺跡分布図



●=当報告書にて報告の遺跡 ▲=中川低地遺跡確認調査報告書などにて、すでに周知の遺跡 (当該地には、他に春日部市谷原新田遺跡=弥生中期=があるが、土器出土の正確な場所不明のため、本地図に記入は省略した)
 —=現河川 - - - =過去の河川流路 (一部は推定) 〰=台地 〰=自然堤防
 土地分類基本調査 大宮 埼玉県開発部調整課 73. 3発行 野田 (埼玉県内) 埼玉県企画開発部土地対策課 80. 3発行の地形分類図を参考とした。

1. 元荒川水系

番号	右左岸	採集遺物	時代	所在地	備考
1	右	縄文土器 土師器	縄文時代中期 奈良・平安	岩槻市金重飛地字里477他	
2	右	須恵器	奈良・平安	岩槻市飯塚字古川	針状物質
3	右	土師器 須恵器	平安 奈良・平安	岩槻市末田字宿1494他	針状物質
4	右	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市野島278他	
5	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市大道字上手85他	針状物質
6	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市大道字上手187他	
7	左	土師器 須恵器	古墳・奈良・平安 奈良・平安	越谷市大竹字西浦	
8	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市東越谷3丁目15他	針状物質
9	右	土師器	平安	越谷市相模町6丁目487付近	
10	右	土師器	奈良・平安	越谷市大成町1丁目2180	
11	右	土師器	奈良・平安	越谷市大成町1丁目2268-1他	

2. 古隅田川水系

12	右	土師器	古墳・奈良・平安	春日部市梅田1丁目468他	五領式を含む
13	左	須恵器	奈良・平安	春日部市浜川戸2丁目2-14	浜川戸遺跡西隈か
14	左	縄文土器	縄文時代中期	春日部市新方袋宮川耕地	
15	左	土師器	古墳・奈良・平安	春日部市増戸字天神原229他	針状物質
		須恵器	奈良・平安	真菰原16他	
16	左	土師器 須恵器	古墳・奈良・平安 平安	岩槻市長宮字前田1199他	針状物質

3. 古利根川水系

17	左	土師器	古墳時代前期	春日部市南3丁目14-4付近	五領式
18	左	須恵器	平安	越谷市船渡2101	
19	左	土師器	平安	越谷市船渡字下川原2322他	

針状物質と注のあるものは須恵器のなかに針状物質を含んでいるもので、埼玉県内南比企窯跡群でつくられたと推定される。

関東大震災

一九二三（大正十二）年九月一日

村田留吉

震源地は相模湾北西部。東京・神奈川・千葉・埼玉・静岡・山梨・茨城の各府県に大きな被害をもたらした。特に東京・横浜の大都会では火災をとめない、その被害は家屋の倒壊と死傷者の続出、交通通信の途絶、さらに流言蜚語が飛び交い、人心を不安に陥れた。

東京付近における地震は江戸時代にもあった。一六四九（慶安二）年、一七〇三（元禄十六）年、一八五五（安政二）年、六八年後の大正地震。震度七・九、死者九万人。平成三年で六八年目になる。

埼玉県における被害は南部・東部に甚だしく、西部・北部にしたがい減少している。県内の被害罹災世帯総数八七〇〇戸、罹災人口四万八〇〇〇人。県内では北足立郡に最大の被害が集中した。川口工場の倒壊や死傷者の多数出た浦和刑務所工作所の全壊。東北本線赤羽〜川口間の荒川鉄橋の破損。桶川信号所構内の列車転覆。県は罹災救助基金で一週間の炊き出しを郡市長に委任し、その後も食品救助として白米・副食品の配給を行い、炊き出しと合わせて前後二〇日間の救助をおこなった。また総額六万五〇〇〇円の御下賜金の配布があった。避難者は各停車場に人の波のように集まった。強者は先を争って列車をめがけて室内に飛び込み、さらに屋根にかけ登り立錐の余席もなかった。恰も明治十五年北

海道に蝗が襲来し、地上の草木を埋めたように列車を包み、その危険な光景は言語に絶するものがあった。県では市町村その他の団体に対して、土地の状況に応じた救護所を設置し避難民の救済を指示した。

社会不安がただよい、戒厳令が発令された。震災によって家を失い、妻や子に離れ、あるいは一家をあげて全滅の悲劇にあうものも少なくなかった。飢えて食もなく、渴して水もない状態であった。

また一方震災に乗じた朝鮮人が襲来するという噂がながれた。県警察では県内居住や避難してきた朝鮮人を保護収容して、県外の安全な場所にトラックで護送したが、本庄では興奮した群衆がこれを襲うという不祥事がおこった。（参考 足立郡震災誌）

大震災の時、私は東京・浅草に住んでいました。電車通りを歩いていましたが、二〇〇米ほど先の道路が上下に揺れていました。お寺の門の下で遊んでいた二人の幼女が、地震と同時に落ちてきた屋根瓦の下敷きになりました。とんで来た親が手で瓦をはねのけ「助けてくれ」と叫びました。三〜四人が反対側にいましたが、呆然自失でみていただけで手をかす者はありませんでした。

あれから丁度六十八年目になります。

四丁野

会田太郎兵衛家の先祖について

山崎善司

四丁野

△会田山出羽介正之の家

新編武蔵風土記稿 南後谷

南後谷会田富右衛門家の、家譜中に出て来る、「会田三郎左衛門正重、当国鉢形城主北条氏邦が麾下に属し、越谷の地に住す」、「その子若狭正方は、太田十郎氏房に従いて討死す」、その子長子は若狭正忠・二子出羽正之と云う、「正之越ヶ谷に住す」とある。

之の、会田出羽正之が越ヶ谷の何処に住したかに付いての考察を進める事とする。

会田出羽介正之は何処に住したか？

会田出羽正之の家数は、何処に在ったのだろうか、と云う事に付いては、今日迄、論議されていない。

越谷市史には、「会田出羽資清の子、出羽資久は、徳

川家康の命にて、「増林林泉寺にあったお茶屋御殿を会田出羽の屋敷地に移築し、即御殿を建て差出した」。

之の、「会田出羽資久」の父資清は、小田原北条氏に仕えた。小田原衆所領役帳に記載されている、「会田中務丞信清の弟」としている。

之の、「会田出羽資清家」（越ヶ谷会田出羽家）と『会田出羽介』が「出羽」が同じ為に、出羽村を開発したのは、「越ヶ谷会田家」と云う事になっている。

然し乍ら、新編武蔵風土記に、記されている、「越ヶ谷に住した、会田出羽介正之」とは、別家の如くであり、又、「越ヶ谷宿」内には、正之の屋敷と思われる地は見当たらない。

「越ヶ谷会田出羽家」・「会田出羽資清」・「資久」・「旗本会田家」・「会田小左衛門資信」・「神明会田家」・「会田七左衛門政重」・「南後谷会田富右衛門家」・「葛飾飯塚会田家」・「関宿会田久兵衛家」・「大門会田家」等、それぞれに研究が進められて居る。

越ヶ谷郷と越ヶ谷宿

越ヶ谷市は嘗て、昭和33年に、越ヶ谷町・大沢町・出羽村・萩島村・蒲生村・大相模村・川柳村の北部・増林村・新方領村・桜井村・大袋村の二町九ヶ村合併して、市制が施行され、今日の越ヶ谷市となる。

越ヶ谷市では、今も旧村名を用いて、越ヶ谷・大沢・出羽・萩島・蒲生・大相模・川柳・増林・新方・桜井・大袋地区と呼んでいる。

この内、出羽地区の中に、四丁野と云う地がある。

此所は、現在「越ヶ谷市宮本町」と云われている地域であるが、嘗ては、「越ヶ谷宿」分であったが、慶安（一六四八〜五一）之頃分村する。

江戸時代初期、日光街道が出来る以前の時代には、四丁野と云うは、現久伊豆神社（宮前町）を含む地域を指し奥州街道が、四丁野を岩槻に向かって通っていた。

日光街道が出来、宿場に制定されるに及び、四丁野村の中程を日光街道が通り、承応三年（一六五四）大沢と越ヶ谷を合わせて越ヶ谷宿となり、現四丁野は、岩槻への横道となり、地域が以前の半分となり、久伊豆神社を含む東半分が越ヶ谷宿地区となる。

今日でも、久伊豆神社の祭礼には、元村の四丁野地区の人達が御輿を担ぐ習わしと成っている。

会田出羽介正之の屋敷は、「越ヶ谷」の何処にあったかに付いては、先ず「越ヶ谷郷」と「越ヶ谷宿」の区分けを考えて見る必要がある。

越ヶ谷郷と云われた時代は詳では無いが、北条氏康文書の中に、「舎人・越ヶ谷は大郷也」と云う文書が見え、その時代既に、「越ヶ谷郷」が使用されていた事が解る。

越ヶ谷瓜の蔓に、

「御入国以前は、至而之大郷にて今云近在村々は枝郷と相見申候」。

「元和御検地之頃、大郷故、今云、登戸・瓦曾根・花田・四丁野・谷中・神明下・萩島・隅之山（今云袋山・恩間村也）・槐戸耕地等一村に而四千石程之場所也」。

夫より追々枝郷分村に相成申候、寛永中萩島村・袋山・恩間等相分、其後槐戸村七左衛門開発大間野・越ヶ谷付之村々に相分、其後登戸組・瓦曾根組等八条領に属し、慶安之頃花田組・神明組・四丁野組等別村に相分、寛文之頃四丁野道下組・谷中村と又之枝郷に相分れ申候」。

新編武蔵風土記稿に、「越ヶ谷に住す」とある区域は、江戸時代の「越ヶ谷宿」ではなく、天正之頃、太田十郎氏房の時代で、「越ヶ谷郷は大郷也」と云はれた「越ヶ谷」と解すべきであり、又、「出羽介が開発した「出羽村」があるので、正之の屋敷地は、出羽地区内と見る可きが至当であろう。

四丁野

△云田太郎兵衛家

の先代について

四丁野会田太郎兵衛家の先代の解明に付いての、手掛りとなる文書が有るので記す。

此処に、越谷市荻島地区西新井に、斎藤若狭守藤原光郷を初代とする「斎藤家来由」と云う文書がある。

この書を、熟読すると、不思議な事が記されているのに気が付くであろう。

斎藤家来由 (抄)

初代 斎藤若狭守藤原光郷

天正十八年 卒

華岳院殿桃林道見大居士

六月 十日 卒

内室 太田道灌持祐入道後裔妹

天正十四年 卒

玉蓮院殿香誓松林清安大姉

六月 十日 卒

二代 斎藤加左衛門尉氏貞 岩月丸

寛永十四年 卒

悟真院清誓浄空不昧居士

正月廿八日 卒

内室 初代若狭守光郷季女 くら

承応二巳年 卒

崇徳院念誓法春慈愍大姉

十二月十日 卒

三代 斎藤治左衛門尉宗圓

寛文十戌年

一乗院頓誓宗圓即生居士

六月十二日 卒

内室 二世氏貞の息女 きよ

貞享四卯年 卒

厚源院松誓蓮貞持信大姉

八月十日 卒

D 三代宗圓、実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男、此の仁自り、会田両姓を用う、

一男、幼名分からず、甚吾兵衛基親、四世を相続

二男、幼名平蔵崎玉高曾根頓吏を以て分株し会田両姓を用う、(以下略)

斎藤家来由の家譜中に、斎藤家当主で在り乍ら、「斎藤姓と会田姓の両姓を用う」と云う記載が所々に見える事である。

★「三代宗圓、実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男、此の仁自り、会田両姓を用う」、

★「二男、幼名平蔵崎玉高曾根頓吏を以て分株し、会田両姓を用う」、

何故、「三代宗圓」以来斎藤家では、会田両姓を用いたのだろうか、「不思議な事が記されている」と記したのは、之の事である。

★ 三代宗圓、「実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男」

この記述は、三代目を相続した「宗圓」は、斎藤家の婿、「越谷駅郷士会田出羽守の男」で、会田家より婿養子に來た者である。

所が、三代宗圓が斎藤家に婿養子に来て後、実家の会田家の兄が死亡した。

会田家には嫡子無く相続人絶えるので、斎藤家に婿養子に行った、弟の「宗圓」に、帰って来て会田家を継いで欲しい所である。

今更、出来ないので、斎藤家の家譜に見る如くに、『宗圓、実は越谷駅郷士会田出羽守男、此の仁より会田両姓を用』と云う事に成った事と思われる。

実家が絶家と成る為に取りられた、苦肉の策の処置では無いだろうか。

之の、斎藤家譜に見る「越谷駅郷士会田出羽守家」とは、何所の会田家で有ろうか、斎藤家譜からは、詳に出来無いが、「新編武蔵風土記稿」・「四丁野の会田太郎兵衛家日拝帳」・「越ヶ谷瓜の蔓」・「東路の都登」・「小田原所領役帳」等に記載されている断片的記述を、照合して推考すると、次の如くとなる。

新編武蔵風土記稿 南後谷

旧家者富右衛門家

『「会田三郎左衛門正重は、出羽介正兼が孫、源太正富が子なり、当国鉢形城北条氏邦が麾下に属し、越谷の地に住す。」

その子若狭正方は、太田十郎氏房に従いて討死すその子若狭正忠二男出羽正之と云う。正之越谷に住す」とあり、

「今越ヶ谷に会田氏の子孫無し、衰微して江戸に移れりと云う」と記載され、

「之の富衛門の家は、彼の越谷に住せし会田氏の一枝族也哉、系図は、所持せされ共、詳なる事を知らず」

新編武蔵風土記稿 越ヶ谷宿

出羽井掘

『「相伝う、会田出羽介正之、当所に住し、掘開しを以て斯く唱う」

「会田氏の事は、後谷村旧家者富衛門の条見る可し」』

越ヶ谷瓜の蔓

出羽井掘之儀は、会田出羽願立、新規掘筋当り取立申候所。

東路の都登 永正六年（一五〇九）作

小田原北条家臣会田中務丞の所領した葛西の地に、会田弾正忠祐と名乗る武士が見える。

「東路の都登」の著者は、連歌師「宗祇」の門人で「紫屋軒宗長」と名乗る連歌師である。

「宗長」は、今川義忠の臣で、祖は、刀匠島田義助の五代の孫、島田治家の子、寛正五年（一四六三）宗祇の門に入り連歌を学ぶ、武蔵方面を遊歴したのは、永正六年（一五〇九）彼の六九才の時の作とされている。

東路の都登（抄）

「市川と云う渡りの（中略）葦の枯葉の雪うちほらい、善養寺て云うに落付きぬ。（中略）ここは炭薪などまれにて芦を折り炊き、豆腐をやきて一盃をすすめしは（中略）今日の暮ほど会田彈正忠定祐の宿所にして夕食の後も色々の事にて夜更けぬ。（中略）市川、隅田川ふたつの中の庄なり、大堤四方にめぐりて、折しも雪ふりて山路を行く心地しはべるなり、江戸に帰りつき、（下略）」

小田原旧記（抄） 天文末期成る
御馬廻衆 一手 百二十騎中に 会田中務丞

小田原衆所領役帳（抄） 永祿二年記
一、会田中務丞
三拾貫文 江戸、下平川 内年貫内に
て下さる

百貳貫貳百五拾文 半役葛西小岩

九拾三貫四百文 同 飯塚
五拾貳貫貳百五拾文 同 奥戸

以上百七拾六貫九百文
此内百五拾三貫五百文
改めて地行役、可被仰付

以上の事柄より

◎ 永正六年（一五〇九）作、「東路の都登」中の、「葛西小岩善養寺付近に居住した会田彈正忠定祐」

◎ 天文末記（一五五〇頃）「小田原旧記」中の「御馬廻衆の会田中務丞」

◎ 永祿二年（一五五九）記、「小田原衆所領役帳」
「江戸衆、二十二番目 会田中務丞」に記載

※ 「会田彈正と、会田中務丞とは、同一地域で、大永四年（一五二九）、小田原北条氏が葛西城・鴻之台城攻落しているのです、この時代に北条氏の家臣となったものか。

◎ 永祿二年（一五五九）記、

「小田原衆所領役帳」中 「九拾三貫四百文 同飯塚」この飯塚の会田家よりの分枝が、「南後谷会田富右衛門家」である。

◎ 天正六、十八年（一五七八、九〇）「会田三郎左衛門正重、北条安房守氏邦に属し、越谷に住」

○ 天正六く十八年（一五七八く九〇）「会田若狭守正方、太田十郎氏房に従い討死」

以上考案すると、四丁野会田太郎兵衛家の、先代である、「八郎左衛門 道蓮禪定門」は、「会田出羽正之」と、同人と云う事になる。

○ 天正末頃（一五九〇以前）「会田若狭守正方二男出羽正之、越谷に住し、出羽井掘を開く」

南後谷会田富右衛門家譜

（南後谷は現八潮市南後谷）

○ 旧家者富右衛門

新編武蔵風土記稿

南後谷の項

（前略）

出羽介

源太

○ 三郎左衛門

若狭

若狭

正 兼

正 富

正 重

正 方

正 忠

当国鉢形城主北条安房守 岩槻城主太田十郎
氏邦二属ス、越谷二住ス 氏房二従イ討死ス
（永禄十三年以後か？） （天正十年以後か？）

「今越ヶ谷に会田氏ノ子孫無、衰微シテ江戸ニ移レリト云」 「之ノ富右衛門ガ家ハ、彼ノ越ヶ谷ニ住セシ会田氏一枝族ナリ也、系図ハ所持セザレ共、詳ナル事ヲ知ラ不」

A ○
出羽 正之
越谷二住ス
出羽井掘ヲ開

註 1、AとBとを対比して見ると、A II 出羽正之が出羽掘を開くのは、天正末年頃で、B II 会田八郎左衛門の没年は寛永六年二月二十日没とある。

AとBガ、同人とすれば、A II 仮に、天正十年に十五才とすれば、永禄十年（一五六七）生れとなり、天正八年に二十三才、B II 会田八郎左衛門が寛永六年二月二十日没で、六二才となる。

註 2、四丁野会田太郎兵衛家の家譜に、「小田原北条家に仕え」「会田出羽守と云」「当代で会田三十七目」を数えたと記され。又、一次開発者、会田出羽正之が出羽掘を開くので、出羽村の地名が残る。

四丁野

会田太郎兵衛家系譜

太郎兵衛家日拝帳より

(現川口市元郷居住)

会田出羽守家

◎ B 会田八郎左衛門 先代

会田七郎兵衛 先代

善心 禪 定 門 先代

道 蓮 禪 定 門 先代

正保二年十一月二十四日卒

● C 夏 月 浮 散 清 信 士 先代

寛永六年二月二十日卒

(二六四五) 父八八郎左衛門也

寛文九年五月二十八日卒

先代妻

慶 秋 禪 定 尼

花 屋 妙 香 尼

妙 蓮 清 信 女

万治三年九月十日 卒

寛文三(一六六三)年五月廿二日卒

明曆三(一六五七)年六月十四日 卒

(一六六〇)

桜 讚 妙 喜 清 信 女 先代

元禄十三(一七〇〇)年一月十七日卒

初代会田太郎兵衛

二代伝次郎

太郎兵衛嫡男

徹 通 円 翁 清 信 士

三代太郎兵衛嫡男 俗名太吉郎

明和八年正月十八日卒

寛保三年七月廿七日 廿五才

(一七七二)

芳 林 智 盛 清 信 女

法 林 惠 光 清 信 女

松 寿 高 栄 清 信 女

寛保四(一七四四)年正月十一日卒

寛政元(一七九五)年七月九日卒

当屋舖初代妻当家御取立之元祖也

享保九年四月二十日 早世

北谷村田中左平太娘

二代太郎兵衛後妻

三代目太郎兵衛妻

秋光栄繁清信女

寛保二(一七四二)年三月四日

草加在立野より来る。

四丁野

△会田山山羽守家 (現越谷市宮本町二)

△会田太郎兵衛家 (現川口市元郷住)

の山山白

四丁野会田出羽守家の後胤と云われる会田家は、現在は、川口市元郷に住んでいる。

嘗て、越谷市宮本町二丁目(出羽村四丁野)に在り、現在は川口市元郷に移り住む、会田太郎兵衛家十代の現当主会田春子氏談、

「当家の伝承」に依れば、

「先祖は、会田出羽守と云い、小田原北条氏に仕えて居た」

「私の亡夫義盛の代で、十代太郎兵衛だが、実は会田三十七代に当たる」と云う。

南後谷会田家々系図の内に、「出羽正之越谷二住ス」「出羽井掘開ク」と記されている「会田正之家」は、当家であろうか、会田太郎兵衛家(川口市元郷住)の日拝帳には「先代八郎左衛門」と記してある。

新編武蔵風土記稿 「南後谷の項 旧家者 会富右衛門家」家譜中の「出羽正之越谷二住ス」と有る人物と「会田太郎兵衛家先代 会田八郎左衛門 法名 道運禪定門」と同一人物では無かるうかか。

南後谷会田家系図に有る、「会田出羽正之」は、四丁野会田太郎兵衛家の先代、「会田八郎左衛門」であろうか？

「新編武蔵風土記稿」や「越ヶ谷瓜の蔓」の記述によれば、

新編武蔵風土記稿 越ヶ谷宿 出羽井掘

宿ノ坤ノ方ヲ流レル悪水掘ヲ云。相伝フ会田出羽介正之当所ニ住シ掘開キシヲ以テ斯唱フト。

会田氏ノ事ハ、後谷村旧家者富右衛門ノ条見ルベシ。

越ヶ谷瓜の蔓

出羽井掘の儀、会田出羽願立、新規掘当り申侯所。

因に、神明町住の初代 会田七左衛門正重が開いたと云う、「七左衛門村」に入殖した旧家と、「出羽村根通り」に住む旧家と比較すると、「出羽村根通り」の方が一・二代古い事が確認出来るので、第一次開拓者は、「出羽会田正之」で、第二次開拓者が、「会田七左衛門」と云う事になる。

「出羽村」「出羽掘り」等の「出羽」の名称は、之の「出羽会田正之」の出羽を以て、名付けられたものと、首肯する事が出来る。

以下、「新編武蔵風土記稿」「越ヶ谷瓜の蔓」を合せて、南後谷会田家と四丁野会田家との関係に仮説を立てる見ると次の、如くなる。

関係系図(仮説) 参照

南後谷公△△田家と四丁野△△田山出羽守家 との関係

(現八潮市南後谷)

(現会田太郎兵衛家)

南後谷会田富右衛門家 (前略)

若狭

正 方 正 忠

岩槻城主太田氏房

二従イ討死ス

天正九年以後ノ事

(一五八一)

A ○ 出羽 正 之

越谷ニ住ス
出羽并掘ヲ開ク

(同一人物か?)

B ○ 四丁野会田出羽守家
会田八郎左衛門 先代
四丁野会田出羽守家
会田八郎左衛門 先代
道 蓮 禅 定 門
寛永六(一六二九)年二月廿四日卒

*仮に、天正九(一五八一)年の時
十一才とすると元龜元(一五七〇)
年生れとなる

*仮に、寛永六年五十七才卒とすれば
元龜元(一五七〇)年生れとなり、
A || B に符合する

先代妻

慶 秋 禅 定 尼

万治三年(一六六〇)九月十日 卒

*仮に、七才年下として万治三年(一
六六〇)八十三才卒とすれば、天正
五(一五七七)年生れとなる

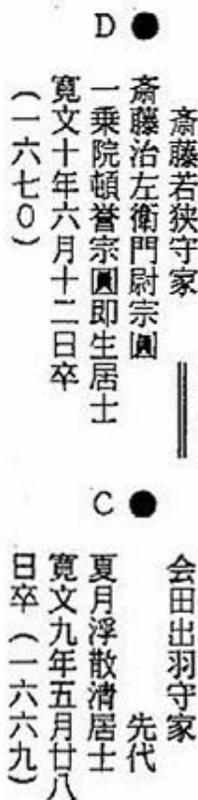
文淵齋宗家と△△田田家との關係

四丁野会田家の家譜には、初代太郎兵衛の項に、「松寿高栄清信女、寛保四（一七四四）年正月十一日卒、当屋舖初代妻当家御取立之元祖也」とある。

初代太郎兵衛は、先代会田氏（夏月浮散清信士、の後妻 桜讀妙喜清信女元禄十三年二月十七日卒）より、四十四年後となり、没年です。確とは言えぬが、一度絶家となり、「当屋舖初代妻当家御取立之元祖也」と有り、御取立て、会田出羽守家を復活したものだと思われる。

其の間の繋ぎとして、西新井の齋藤家が会田両姓を名乗ったのでは無いだろうか？

因みに、齋藤家と会田出羽守家との、年代的關係を推測すると、下記図の如くなる。



齋藤宗圓の実家の兄（養子に來たので実家は会田出羽家で夏月浮散居士は兄）が、居た筈で、之の兄が相続人無く死亡した、やがては絶家と成るので、其の繋ぎとして齋藤姓の弟が、両姓を継いだと見るべきである。

二代宗圓も又、不運にも其の翌年卒し、宗圓の二男平藏が分株して会田姓を用い、五代徳実会田齋藤両姓を用い、六・七代は会田姓を、八代真武（宝曆十二年（一七六三）生れ、天保七（一八三六）年卒）の時、再び齋藤姓に改める。

一方四丁野会田家では、御取立之祖といつて初代会田太郎兵衛を立て、同屋敷等を相続させて、初代会田太郎兵衛家と交り、創設されている。

会田出羽守家の血筋は、齋藤家に継がれ、家屋敷・財産は、四丁野会田太郎兵衛家が相続した事になる。

今、会田出羽守家は、四丁野会田太郎兵衛家が継ぎ、四丁野より川口市元郷二丁目に移り、元屋敷跡は、建売住宅地となり、構え掘と愛宕神社が、往時の面影を残している。

西新井齋藤家も又、栄枯盛衰の習いの如くとなる。

嗚呼、惜しい哉、名門、会田出羽守家、齋藤家は、哀れ屋敷跡地を残して、時代の趨勢に抗し切れず、我が郷土の希少な名家も遂に絶家とは成りぬ。

回 想

高山はつ

史跡めぐりに参加することによって、今昔の感を深くすることが度々ありました。何故かと申しますと、戦前訪ねた所が目的地の中にあつたり、以前訪ねた場所だとか、昔の思い出話として明治の人に聞いた場所へ行き合せたこと、等々其の時々胸の内を熱くし、思いを新たにしました。

平成二年度に参加した場所を思い起して、印象深く残ったこと等を記して見たいと、月順に巡った場所を辿ってゆきますと、記憶がなかく、甦がえてこない所もあり、印象に残らないで、何となく参加していたこともあつたのかと、我れながら恥かしい思いです。深く反省します。現在を忘却することは、老化現象でしょうか。

ともあれ、四月に新宿方面に参加した時の記憶を引き出して見ますと、新宿区立歴史博物館から全勝寺へ、幕末の勤王思想家山県大士の墓を訪ね、昼食場所の新宿御苑に到着。大木戸口より入った時、昭和天皇のご大葬の後一般に公開された式場を拝観に来たときのこと、頭の中を駆け巡ってきたことです。荷物を持っている人は預けさせられ、不審のある人は調べられるような雰囲気を感じさせ、緊張感を高くし、思わず嫌悪感を覚え、異様な空気でした。

幄舎に近づいて驚いたことは、床暖房を入れてあるとはいえ、腰の辺までしか囲いが無く、上体は風通しの良い仮設の建物でし

た。当日は寒い日でした。その中で参加された貴顕諸氏の思いが、どのような事だったかと、意地の悪い連想をして、今考えると不謹慎なことでした。

祭殿を前方に見て両側の幄舎は幾棟もあり、儀式の模様を知るには困難であつたろうと想像をし祭殿に向うと、桧皮葺の白木で造られた祭殿は、立派で神々しく感じました。其の後移築されて保存されていると聞いてます。

葱花筆（御霊代の御車）は黒塗の何の飾りも無い質素な御輦と拝したこと等。

庭園を歩きながら、このようなことを想い出して居りますと、奥の広場の方から「カラオケ」の音が聞えて来たので、注意を払って見ると、身体障害者の集いが開かれ舞台上では、のど自慢大会のようすに見受けられました。

御世話していただけるボランティアの方々には頭を下げ、思わず熱いものを感じます（私はどうもこの方達に弱いのです。）

又、当日昼食を取った中央休憩所では、旧満州より引き揚げて来られた方々の全国大会に参加された方達が、食事をして旧交を温めている様子を拝見して、普段はあまり訪れることの無い所ですが、この日の出合いで御苑は、訪れた人達の、個々の想いを深く残す所としてみじみ感じました。

御苑を後にして、太宗寺へ。この広い敷地に、思わず息をのみました。たまたま本堂で葬儀があつて、広い寺内は車と参列者で混雑していましたので、ゆっくりと拝観することは出来ませんでした。閻魔堂の格子に目をあて、暗がりの中の閻魔像を見ると、あまりにも大きいのに驚愕、隣の脱衣婆像と共に、市中に名

声を馳せていたようですが、大きすぎてユーモラスな感じを受けました。江戸周囲の街道筋に建てられた、江戸六地藏の一つが甲州街道を見守って安置されており、情のあるお顔で微笑まれているように見え、安堵感を覚えました。

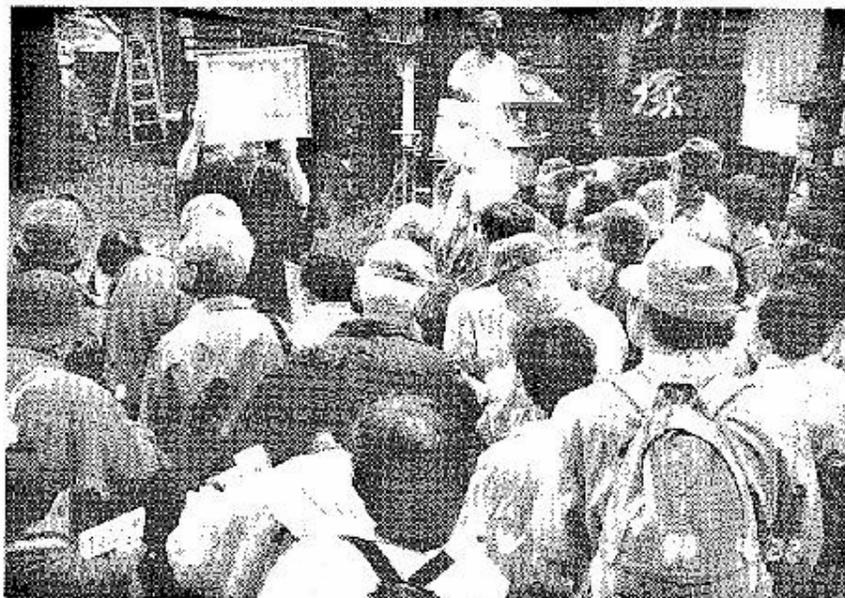
戦災を逃れられたことを思うと、ご利益を深く感じて有りがたいと再度拝して、後に致しました。

明了山正受院、ここで印象に残ったことは、境内を拝観している私達に、ご住職がお気がつかれてか、栞を銘々にお渡し下さいました。袋の表には門より入って右側の脱衣婆堂、和裁の無形文化財、小見外次郎翁の胸像と針塚、本堂、平和の鐘の鐘楼、これらが墨絵で描かれ、裏面に昭和五十九年一月十七日明了山正受院と書名してあります。この年に何かあったのかなと想像しながら、改めて順を追って拝観。

脱衣婆像は、元禄十四年（一七〇一）作の像で、線香の煙で真黒に燻されています。往時はその煙りが四谷見付迄たなびいた流行神であったと、案内書にあります。

三途の川の渡し守りで亡者の着衣を剥いで地獄へ落す役の此の婆が、何の祈願で建てられたのか、不可解ですが、「せき止め」のご利益と信者が集り、そのうち諸願に靈驗あらたかと流行神になった」とのことです。又当時の百度石も残されており、盛況だった当時が偲べれます。

また隣の針塚は、下記写真参照——脱衣婆に「せき止め」を祈願する人が真綿を奉納（脱衣婆は頭から身体を真綿で包まれている）したことから裁縫の神様になり、その祈願の為に針を供え、そして針塚が出来、毎年二月に針供養が盛大に行われるようにな



第174回史跡めぐり（H2. 4. 22）

新宿 針塚

写真は谷岡幹事長提供

りました。小見外次郎の胸像があるのも当然と頷けます。

本堂に安置されている、御本尊は阿弥陀如来で、秘仏とのこと
です。現在のご本尊は、昭和五十四年作の如来様であると、葉に
描かれております。

その奥に鐘楼があります。「平和の鐘」此の鐘が数奇な運命を
辿って来ているのです。他にも似た様な話を聞いたことがありま
すが、物が大きいだけに驚きです。

一種の戦争の犠牲でもあると思います。葉によりますと、「当
寺の梵鐘は、宝永八年（一七一）第八世仰譽上人代の作なり、
大東亜戦争勃発するや、昭和十七年十一月お国の為めに供出、そ
の後、米国アイオア州立大学内、海軍特別訓練隊にありしも、米
海軍当局の好意により口米友好のため、昭和三十七年十二月、当
寺二十二世順譽上人代に返還せられたるものなり。」とあります。

元の場所に還って来たことは、鐘にとっても、勿論、正受院に
も幸せなことです。当時は有名、無名を問はず供出の対象になり、
涙をのんで供出されました。ところが、金銀、宝石は大蔵省の金庫
の中で眠って、銅像、梵鐘など海外へ持出された物もあったよう
です。「平和の鐘」素晴らしい命名です。世界平和の為打ち続けて
ほしいです。

ほど近くの成覚寺へ、其の昔、内藤新宿遊廓として華やかだっ
た頃、遊女の屍骸を投げ込んだといわれる「投げ込み寺」であっ
たそうです。他にもそのような話を聞いたことがあります。哀
しい運命を背負った女性の無惨な最期です。救われることは、境
内に遊女達の無縁塔があり、それを地蔵尊が取り囲んで、彼女達
の生涯薄倖であったことを慰め成仏を願っていることです。

その無縁塔を建てた人が、内藤新宿の三河屋大助という侠客で、
そして地蔵尊は彼女達の親や、同じ仲間達であるとは、店の主じ
はさぞかし地獄で苦しんで居ることでしょう。

右の話で思い出したのですが、昭和十三年頃のことでもまだ太
平洋戦争に入らない時期でした。

深川の洲崎遊廓が盛んで、門前仲町の三業地も木場の旦那衆で
華やかに繁盛して居た頃の話です。

門前仲町の深川不動尊、富岡八幡宮のご縁日が、一口・十五日・
二十八日、露天商や植木屋・易者などが出店して賑いました。
中でも廿八日は、不動尊ご縁日の日で、遠方からの参詣人で一段
と賑い、花街の人達も多く詣でて、参詣人の目を集めていました。
其の中に際出て異様に写る一団が居り、その一団とは洲崎遊廓
の遊女達なのです。

彼女達は、遊廓の中より外へ自由に出ることが出来なく、月に
一度この不動尊の縁日の日に外出したと聞いています。勿論一人で
外出することは、禁止されて居り、遣り手婆と言う監督者に引率
されて外出します。何故人目を引くかと申しますと、髪型が異様
で、結綿と言う髪型を、髻の部分を潰して結みます。それが「チ
ズレ毛の髻」を使って結上げているので、私達は「シヤム毛」と
言って居りました。現在ではパーマネットが常識となって別に目
立ちませんが、当時は異様に見えて不思議な物を見る感じで見ま
した。姉様人形の髪を想像するようでした。そして友禅模様の中
振袖の着物を長めに着て裾を取って、大きく抜いた衿は「ぬいと
り」のある、部厚い半衿を出して、気だるそうな顔をして、立っ
ている姿は、参詣人の目を引くのに充分な要素がありました。

今でも私は富岡八幡の鳥居の脇で露店商を眺めて、迎えを待っていた、彼女達の姿が目には浮びます。

深川に縁のあった私は、洲崎の中の話を聞いて、彼女達の哀れなる境遇も知らされていたので、心に深く残っており、内藤新宿の遊女のことから、懐しく思い出して、書留めてしまいました。

深川は昭和二十年三月十日の東京大空襲で、門前仲町を中心に富岡八幡から木場、洲崎方面。永代橋方面。と全域に亘って戦災に会いました。恐らく逃げることも出来なく、遊廓を囲んでいた運河に、飛び込んだり、防空壕の中で、儂い命を落したのではないかと、哀れに思います。

深川不動尊の参道に大師堂があり、境内に戦災犠牲者の供養の為、観世音像が建てられています。私も不動尊の日には立ち寄って、線香を上げ、冥福を祈って、犠牲者を偲んで、お参りをします。洲崎の中へ入る西洲崎橋の袂にも無縁仏を祭る石碑が建てられ盆には供え物、線香が上げられます。誰が建てたのか分りませんが、彼女達、その他当日の、犠牲者を供養する為だと思います。戦後、赤線とか、青線などと名称は変わりましたが新宿にも、洲崎にも同様の遊廓が、一時期繁盛して居り、いつの世にも、哀れな身の上の女性が居て、そのおかげで、繁栄があったと、考えられます。

成覚寺には此の他、玉川上水で情死した人達の供養の旭地蔵尊。黄表紙の創始者で戯作者の「恋川春町」の墓。内藤新宿の女性を偲ぶ「子供合埋碑」。鈴木主水と内藤新宿橋本屋の飯盛女白糸、との悲恋物語の「白糸塚」など十八・十九世紀時代の悲しい記録が残されておりま。

最後に訪れた天龍寺、此処の山門は、昭和十二年から六年かけて完成した、高く聳える如き立派な山門です。将来オリンピックが開かれたら、外国の人に見てもらおうと、昭和の始めから計画され、建てられた、この山門は幸い戦災を免れ、東京オリンピックに、その願いは果され、第三十八世慈恩賢孝師は思いが叶い、満足のことと思います。

牛込にあった時代は、江戸城の裏鬼門を護る寺として、上野寛永寺の表鬼門を護る寺と同様に格式のある寺で、江戸城内の祈願行事に招かれたそうです。

此処の鐘楼は、時刻を知らせる鐘として、上野寛永寺、市谷八幡と共に、江戸の三名鐘の一つであったそうです。ところが、新宿は江戸城より遠いため、武士が登城に間に合うよう、明けの鐘は四半時（三十分）早く打つようにしていたので、この為、新宿遊廓に遊ぶ客は、ほかより三十分早く追い出されるため「追い出しの鐘」と呼ばれていました。

新宿駅南口迄歩き、帰路につきました。改札口は狭く感じたのですが、ホールは広く、各線の乗降客で、そのホールも混雑して、埼京線に向うのに一苦勞でした。

東京生れの東京知らず。此のように名所が数あるとは「新宿」を再び訪ねて見たいと思います。ご案内下さった山田先生、他お世話下さった役員の方々に、厚くお礼申上ると共に、拙い文をお目通し下さった方々にお礼申上ります。尚記憶違いの箇所がございましたら御叱り下さい。

「感謝」

越谷に五年

古田 美雄

アノ そうか、越谷、千住の先よ。

東京に生れ東京で育った私は、このように口傳えでしか知らなかった。又、昔家に数多くあった、文庫本を中学生の頃、片端から読んだ中で、岡本綺堂だったかの半七捕物帳に出て来る根岸の寮とか、草加の在の……、越谷宿の……程の知識しかなかった越谷に、終の栖を決めるについては、昭和五七年頃より東京を中心に三十キロ以内を休みのたびに、女房と二人で、駅から十五分位でガス、水道、本下水完備しておれば最高と土地をさがして歩いたものでした。だんだん年を取るから山坂はない方がよいとか、仲々気に入った土地がなく、あきらめていたところ、電車をつるし広告で千間台のことがのっていた。始めに女房が現地を下見して気に入り、私も出かけて大層気に入った。駅からの道は平坦で高低差がないが、そこで気になったのは、河川がかなりあるので釣は出来るが水害はどうか、昭和二十年代に、足立葛飾まで出出したキャサリン台風のことを頭に浮んで来た。そこで国土地理院の二万五千分一と昭文社の越谷の地図を購入して調べて見た。結果としては葛飾、草加よりは水準点は高いことが判かり、又現地の農家のお年寄りにも昔のことを話してもらったり、台風のあった翌日に、現地に足を運んだりしたものでした。

その時に知ったことは、越谷市で一番高いところは、袋山の久伊豆神社附近で八・三米、その他は平均三〇五米前後あることが

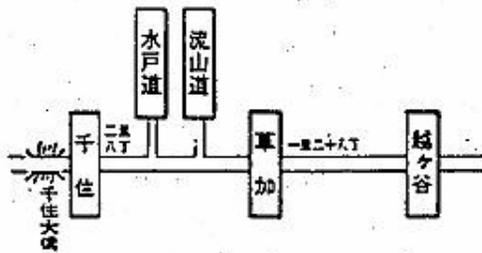
判った。やがて家も建ち引越して来たのが六一三年三月、やれ／＼第二とか、第三の人生の出発点と言われる定年後の毎日サンデーを楽しむかと、のんびり地図を拡げてながめていて、気付いたことは、元荒川をはさんで久伊豆神社と香取神社が向き合っていること。それなのに大袋と花田の久伊豆神社は、香取神社側にあることの不思議。調べて見ると、大袋と花田附近は、元荒川が大きく曲って、キンチャク型になっており、水害などが起りやすく、キンチャクの口の附近を直線につないだことによるらしい。しかも、宝永年間（一七〇四～一七一〇）と寛永年間（一六二四～一六四四）とかで二〇〇～二七〇年前のこと、か。そこで越谷に住むからには、昔のことを知ることが大切と考えて、自転車で我家の廻りから、本と地図をたよりに散歩を始めて、少しずつ理解を深めている時に、たま／＼広報に史跡めぐりの記事があり、岩槻城についての発表会に出席したのが始まりで、機会が有るごとに、史跡めぐりに参加して、日光街道、御成街道などを中心にした越谷を見て来て、昔の行政の変化・変遷を知り、一枚の絵、一基の塔婆から、いろ／＼のことを引出して行く、忘れ去られた小さなことも、どうしてと問いかける、小旅行を楽しませてもらった五年間であった。

毎日サンデーも、昔の話だけでは、顎が干上って来るので仕事を始めた或日、電車の中で、小学一年位の子をつれた母親と、就学前の子をつれた母親が、おしゃべりをしながら入口附近にいた。突然就学前の子が母親に向かってノンノさんがいる／＼と叫んで母親を引っぱった。そこは北千住を出て地下にもぐる手前の延命地藏尊のところであった。母親はうん／＼と理解を示した。ところ

が、大きい方の子が母親に向って、ノンノさんで何にかと問いかけているが、母親は意味がわからないらしい。再三の質問に、その母親はもう一人の母親に意味を聞いていた。なる程、家に佛壇や、神棚があるかないか、おじいさん、おばあさんがいるかいないか、何んとなく二人の母親の家庭がおぼろげに見えた気がして考えさせられた。

越して来た頃は駅附近にもヒバリのさえずりも聞えたものでしたが、今は駐車場になり、小川の雰囲気もあつた用水路も護岸が整備され、唯の排水溝に近づき、本当の悪水落しの風景に、一入の感慨をおぼえる今日この頃、女房が電車の中でこんな話を聞いてきた。

曰く、草加、越谷、千住の手前。



平成二年二月の千間台駅

第一五八回「史跡めぐり」に参加して

若松素心

越谷市郷土研究会に入れていただき、おかげで、すばらしい地方史の歴史を訪ねさせていただき、とても嬉しく存じている者でございます。最近、小生の日程との調整が出来ず、研究会の行事に参加出来ず、とても残念に存じております。この度、郷土研究会会報の原稿募集のお知らせがございましたので、厚かましくも、過去の日記をもとに投稿させていただきました。紀行文をまとめさせていただきました。以下、日記の形で記させていただきます。

「日光御成道を訪ねて」 昭和63年3月27日 晴

六時二〇分、五分間体操をやって起床。顔を洗い、着替えをして、朝食をとる。外出の仕度をし、七時頃家を出る。そして七時十七分のバスに乗る。

春日部より東武線で新越谷にゆき、電車を降り武蔵野線の南越谷駅前にゆく。今日は、越谷市郷土研究会の史跡めぐりの日である。集合場所の南越谷駅前にゆくと、既に幹部の皆さんがいらしていた。集合時間は八時四十分。幹事の方が参加者の皆さんを確認し、八時四十分 出発。武蔵野線に乗り、南浦和に出る。そこで京浜東北線に乗りかえ赤羽にゆく。今日の行事は「日光御成道」を訪ねることを目的としている。駅を出ると幹事さんの誘導で、駅前を左に歩き、すぐそばの日光御成道を少し進む。そこは旧赤

羽駅のあった場所である。案内の山田理事が、簡単に歴史的経過を説明して下さる。

このあたりは現在、ビルがびっしり建っていて、昔のおもかげはもうない。

少しして再び山田理事の案内で、次の目的地、宝幢院を訪ねる。

この寺は真言宗のお寺で、正式には医王山東光寺と号す。東光というのは、西方彼岸の阿弥陀様に対する東方をまもる薬師如来を意味している。したがって、本尊は薬師如来である。薬師さまは、東方に想像される極楽世界である浄瑠璃世界の救世主の仏さまである。梵語で薬師瑠璃光と言ひ、万病を治癒し、人の寿命を延ばすことを本願とする仏さまである。これは薬師瑠璃光如来本願功德経などに、この仏が、仏となる以前に、人の生存をまっとうし、衣食住の生活を安穩たらしめ、病苦、不具などを除こうとして立てた「十二の誓い」の記述のあるのにもとづくもので、中国では五世紀以後、日本では八世紀（奈良時代）以後、ことにこの信仰が盛んであった。インドにおけるこの仏の起源と発達は明らかでないが、この仏の原型とみられる薬王菩薩が《出曜経》に出てくるから、その起源は、仏教のかなり初期にあったといえる。のちの密教時代に入り、《薬師七仏本願経》のような經典ができ、この仏の徳を機能的、段階的に七個の仏格をもってあらわす思想がおこり、中国、日本でもこの思想がうけいれられた。日本の薬師信仰における七仏薬師法はこれにもとづくものである。また、日光、月光の二菩薩、観音、勢至以下の八菩薩、またクピラ、ヴァッサラ以下の十二神将などを脇侍とする信仰は、中国及び日本を通じて普及し、造仏のさいには、必ずこれらのうちの

いづれかを脇侍とすることが行なわれた。

薬師の信仰はティベツト、蒙古、朝鮮などにもひろく行われ、日本でも法隆寺、法輪寺、薬師寺などの古寺は、いづれもその信仰にもとづいて造立された。なかでも法隆寺金堂の薬師像は、聖徳太子が父用明天皇の病氣平癒のために六〇七年（推古十五年）造ったもので、日本最古の薬師像である。また法輪寺は聖徳太子の、薬師寺は持統天皇の、それぞれ病氣平癒祈願のために建てられたもので、その後も同種の事例がしばしば見られるほか、奈良時代を通じて薬師経を書写、誦誦し、また薬師悔過法を修した事例も数多く認められる。最澄が延暦寺を創建したときにも、その根本本尊は薬師如来であった。

また『日本霊異記』などの記載によれば、その信仰が早くから地方民間にも普及していたことが知られるが、その傾向は中世仏教民衆化の一般的傾向に伴なって、いっそう促進され、各地にたくに靈驗あらたかな薬師がまつられるようになった。日本での薬師信仰は現在にいたるまで、特定の宗派に関係なくなお強く民間に生きつづけており、諸病の平癒、ことに眼病への治療に効驗があると思われ、祈願がかなうと、絵馬を納める風習が残っている。宝幢院もまさに医王山東光寺の号の示す如く諸人達の諸病平癒を祈願しつづけてきた民衆に根づいた薬師のお寺である。資料にある「江戸名所図会」をみて、今昔隔世の感がある。都市化が進んでいるあたりをみながら、この絵の風景をこの目でみただかたなあと思わず子供じみた考えがふとよぎり、独り苦笑する。然し、お寺の境内は塵に染まることもなく、清境寂たる中で私達を迎えてくれる。入口のところにあつた古い道しるべ石の正面に、

「南 江戸道」、東側（向って右側）に「東 川口善光寺道、日光岩付道」、西側に「西 西国富士道、板橋道」、裏面に「元文五庚申天十二月吉月、願主了運」と彫られてあつた。

板橋街道は、この西側少し先の踏切を越え、うつり坂を登り、赤羽台団地内を抜け善徳寺、大恩寺前を通っていく道である。文化年間のこの道筋について、十方庵敬順の「遊歴雜記」に「宝幢院の前より南へ入りて、小坂を登り……縁切榎の北方へ出けり、此路すがら上人は一里といえど行程一里半もやあらん。されど左右只 茫たる高みの耕地にして、折しも夕陽西にかたがきねば、金形の芙蓉を程近く見る。此景望又いふべき様なし。左はいく赤羽根村より中山道の往来へ出抜るまで凡そ一里余の間人家なければ……」とある。

賽宝幢院

素心

春風来賽梵宮林 春風来り賽す梵宮の林
清境寺庭塵外心 清境の寺庭塵外の心
読史残碑還一興 残碑に史を読む還た一興
星移物換古猶今 星移り物換れど古猶今のごとし

次の目標は大満寺。

このお寺は新義真言宗で、このお寺も薬王山瑠璃光院というが、ご本尊は大日如来である。

真言密教はインド仏教の最後の時期に現れ出た仏教である。そこには、ヒンズー教の民間信仰が大規模に取り入れられている。四世紀頃から陀羅尼（咒句）だけを説く独立の經典が作成されるようになる。この 句を真言（マントラ）というのです。マントラとは、もとはバラモン教の方で、ヴェーダの祭儀に用いられた

句のことである。真言陀羅尼を誦持し、それによって心を統一し、諸尊を供養することが強調されるとともに儀式も発展して行く。密教においては根本の仏を大日如来（大毘盧遮那仏）と呼ぶ。毘盧遮那とはサンスクリット語のヴァイローチャナの音写で、輝くもの、太陽を意味している。仏教の従来の諸の教えは歴史的人物としての釈尊の説いたものであるが、密教は万有の根本原理である大日如来が直接に説いたものである。真言宗の名の由来もその経典、主として大日経と金剛頂経であるが、何れにも大日如来自ら所説の法門を真言宗と名付けられ説かれている。即ち、大日経には「衆生に随順して其の種類の如く真言法教を開示す」と説かれ、金剛頂経には「真言陀羅尼宗とは是れ一切如来秘奥の教」と名をお決めになっている。これが真言の名の本拠である。その真言の教主の仏、大日如来の名には三つの因由がある。

一に除暗遍明と云って智慧の徳

二に能成衆務と云って慈悲の徳

三に光無生滅と云って常住普遍の徳

この三種の本尊として尊信しているのが真言宗なのである。そしてその教法をわが國に伝えられたのが弘法大師である。真言の教法は古く印度から各地に広がるが、教団として成立したのは弘法大師により我が國に伝わってからである。

偕て、この住職さんは、佐々木信綱と親交があり、歌をよくする方という。あいにく法事が二件ほど入っていて手がぬけられず、奥様がいらして私達を応待して下さる。そして不動堂を開けて下さり、堂内に皆さんと一緒に上がらせていただく。

不動明王像は鎌倉時代初期の作という。仏教修行の道程には、

さまざまな誘惑や困難が横たわっている。それらのものを乗りこえてゆく力を得る為の仏として忿怒を現わした姿が即ち不動明王である。不動明王は仏、菩薩などのように仏教自体が求め出した仏とは違う部類のもので、明王部という名称のなかの一尊である。明王という名の意味は明（陀羅尼）を唱えて祈った場合に、もっともその効験が大きい仏ということを意味する。いわば陀羅尼の王様という意味である。不動明王はその明王の中心的尊像とされている。不動明王は梵名をアチャラ（阿遮羅）というが、その名はヒンズー教の最高神であるシバ神の別名の一つであるといわれている。

不動明王は密教においては大日如来の使いと考えられている。密教の根本経典の一つである大日経では不動如来使という名で説かれている。

右手に劍、左手に索をもち、頭髮を美しくげずり、その束ねた髪の毛の先端を左肩に垂れている姿は、不動明王の基本的な形姿である。そして真言宗の不動明王は、この像のように両眼ともに大きく開き、儀軌（密教での儀式の法則）は無視した形になっている。また口許はひきしまっているが、上歯で下唇を噛む形となっている。

偕て、大満寺境内の敷石供養碑に「御仏に誓を立てる人飛との幾代まう須る法の満以し」の歌が彫られてある。その作者、この住職の永信沙門は明治時代「岩淵会」という歌の会をつくり、歌会を行っていたという。

岩淵会同人の短冊や色紙が今も保管されているそうである。永信沙門の歌稿にある一首「わが庵は蓮田続き千町田に飛鳥の山を

築庭とみる」が詠まれているが、当時のこのあたりの様子を物語っている。もっとも信綱は「築庭」に「築山」と朱筆の添削をしている。

賽大都寺

素心

寺域深閑断俗縁 寺域深閑として俗縁を断つ
浄因未了度迷川 浄因未了せず迷川を度る
毫光法悦心方寂 毫光法悦心方に寂たり
礼拝如来思独玄 如来を礼拝し思い独り玄なり

三番目を訪ねたのは正光寺。浄土宗のお寺である。門前に石橋供養塔があった。土二ヶ所石橋供養の文字がみえる。説明によると、大塚屋善兵衛という人が十二ヶ所の石橋を供養したその一つという。境内も広く門も大きく、全体をみて、なかなか大きな寺だなあ」と思いつつ見ていたら、驚いたことに本堂が無い。山田さんが低い声で、言いくそうに話されたことによると、この寺が戦後火事で焼けた時、住職が檀家に相談せず、さっさと庫裡を建ててしまったという。それが当時二十万円もかけたそうで、住職は「自分の金で建てたのだ」と弁解したものの、檀家との対立が生じ、結局、本堂の再建は成らず、そのままになっているという。境内の大観音の銅像がひとり空しくお立ちになっているのを拝し、何とも言えぬ物悲しさを感じ、私自身もやりきれない気持ちになる。その昔「新編武蔵風土記稿」によると、淵富山天土寺と号し、浄土宗増上寺末寺であった事が記され、又その更に昔は岩淵山西光寺と称し、荒川岸にあったが、小田切将監重好等によって慶長七年に、今の地に移され、名も正光寺と改めたものとい

う。

この観音さまは頼朝子育観音と言ひ、行基の作と伝えられる。ここで行基菩薩について記しておく。

行基は奈良時代の僧である。俗姓は高志氏。和泉国大鳥郡の人である。父の名は才智と言つて百済王の子孫で、母は蜂田の首（おびと）虎身の長女で、名は古爾比売。十五歳で出家し、法相の宗義を学び、道昭、義淵、智鳳らに教えを受けた。つねに母に孝養をつくしたが、七一〇年母の死にあつてから、既に早くから諸処を歴遊して自行化他につくしてきた彼の浄業はさらに盛んになったとみられる。彼は徳をしたつて集まった道俗の人たちをひきいて、池を築き、溝を掘り、橋をわたし、樋を通じ、堂を建造した。したがつてその行動は目をみはらすものであつたため、かえつて政府要路者の注意するところとなり、誤解をうけ、ついに七一七年（靈龜三年）に勅をもつて大室の僧尼令に違反するものとしてその行動は禁止されるに至つた。しかしこの禁令にもかかわらず、彼の行動はやむことなく続けられ、しかも七二五年（神龜二年）には、行基は山崎橋を架したことによつて聖武天皇の尊信をえ、七三一年（天平三年）には勅によつてとくに行基に従う在俗信者のうち、老齢でしかも規律正しく修行するものが出家することをゆるされることとなつた。さらに七三三年には輦車をたまわり、七四一年には行基が建造した泉橋院に天皇の行幸を仰いでさえている。こうして七四三年、聖武天皇発願の東大寺毘盧遮那仏造立のため、行基は朝廷より請われて勸進の行に出ている。七四五年大僧正の位を授けられ、四〇〇人の得度者が行基の下で修行することをゆるされた。七四九年（天平勝宝元年）には勅によ

り、天皇、皇后、皇太子に菩薩戒を授け、大菩薩の号をたまわつた。行基の生涯にわたつた社会福祉事業のあとを《行基年譜》によつてみると、架橋六、直道一、池十五、堀四、溝七、樋三、船息（船つき場）二、布施屋（無料宿泊所）九、その他僧尼院四九がある。世に行基菩薩とあがめるいわれである。

またはじめて日本全図を作つたと伝えられている。
この境内に立つておわします大観音銅像は信者達の「かんざし」等で鑄造されたものといふ。

正光寺

素心

長空漠々転荒涼 長空漠々転た荒涼
極目肅々在眼前 極目肅々として眼前に在り
蘭若御堂焦土下 蘭若の御堂焦土の下
観音只立見興亡 観音只立ち興亡を見る

正光寺の探訪を終え、日光御成道を歩いて荒川の土堤にゆく。そこで山田さんより、川口の渡跡の説明を拝聴する。「義経記」によると、「御勢八十五騎をしたがえて、武蔵国足立郡こかわ口から板橋の方へ」行つたらしい。然し、今はその渡し場所が厳密に何処であるかは、知るよしもない。唯、私達が今、堤の上に立つて一望しているその視野の中を渡つて来た事は間違ひ無いのである。古街道は川口善光寺の前から東南に向い、其処に昔、渡場があったという。その善光寺が左手の方に見える。そこから八雲神社への道を頭の中に描いてみる。

「江戸名所図会」川口の渡の条下に「渡場より一丁程南の方の左に、府中道と称せる名標あり、是れ往古の奥州街道なり。此よ

り板橋へかかり、府中の六所より玉川を渡りて相模の平塚へは出しなり」とある。其の所は即ち、権十郎又はゴンジの下とも云つて八雲神社の北あたりのことである。徳川時代になって、江戸が開けると、街道が今の地点に移り、従つて渡場も今の荒川新大橋の稍上流に変わったという。將軍の日光社参りは、板橋を架したというが、平常は全部渡し舟であつたといふ。

川口渡跡 其一

素心

歩驟俊遊心亦閑 歩驟俊遊心亦た閑なり
眼前烟景畫図閑 眼前の烟景畫図の閑
往事古渡空如夢 往事の古渡空しく夢の如し
逝水滔々去不還 逝水滔々として去つて還らず

川口渡跡 其二

一路東風天放晴 一路東風天晴を放つ
春波江色碧盈々 春波江色碧盈々たり
眺望対岸善光寺 眺望す対岸の善光寺
古渡今無懐古情 古渡今は無し懐古の情

荒川を後にして、屋敷の予定地である八雲神社にゆく。八雲神社はすぐ近くで、資料をみると、昔の水路は今と違つて居り、折れ曲つていて、その河岸に八雲神社があつたようだ。八雲神社の祭神は須佐之男命である。当地の地名は岩淵町という。さつき荒川でみた水門は岩淵水門と呼ばれていた。何か関連があるのかなと思ひながら、神社の境内に入つてゆく。境内では、地元の幹事の方が私達を迎えて下さり、早速、神殿に案内して下さる。その部屋の上に、祭礼の際に神社でよくみかける大職が敷かれてあつ

た。古いものようだが、修復がほどこされている。説明によると、この幟に書かれた驚動とも云うべき大字は、勝海舟の筆になるという。

海舟は当時、赤坂に住んでいたが、地元の方達が一生懸命、ここ岩淵で墨をすり、それをバケツのようなものに入れて、大急ぎで赤坂迄運んだという。そうして海舟先生に書いていただいたのが、この大幟なのだという。

拝観を終えると、私達は母屋の方に案内される。お部屋には、テーブルがおかれ、私達を迎える用意がととのえられてあった。部屋の座敷にあがらせていただき、皆さんそれぞれ、自由の席につき、各自、持参のお弁当を開いていただく。食事をいただきながら、さっきご案内して下さった地方の幹事の方が、海舟に幟を書いていただいた当時のいきさつの言い伝えや、岩淵町の名前を残すことが出来た苦心談などを語って下さった。

食事の後、小休止をし、十三時頃、又支度をして、神主さんや地元の幹事の方達にお礼を申し上げ、外に出る。

賽八雲神社拝観海舟筆幟

素心

待客祠官社稷前 祠官客を待つ社稷の前

古堂春色景依然 古堂の春色景依然たり

拝観大幟海舟筆 拝観の大幟海舟の筆

妙蹟龍蛇舞鳳鮮 妙蹟龍蛇鳳舞って鮮かなり

午後は八雲神社を出ると赤羽駅の方にもどり、静勝院を目ざす。途中、山田さんが番外のお寺に案内して下さる。そこは真頂院と

いう。真頂院は一寸拝観し、あまり時間をとらずに寺院を辞す。そして赤羽駅の東口の方に出て、旧御成道を通って静勝寺にゆく。この道は、戦災にあわなかったので昔のままの姿を残している。

静勝寺に寄る前に、その道を通りこして、先に稲付一里塚跡を見る。「徳川実記」によると、家康が、東海、東山、中山等の諸街道を修理し、一里塚を築かせたという。稲付一里塚は塚自体は現存してなかったが、ここに一里塚があったという史跡塚が建てられてあった。稲村一里塚跡をみて岩槻街道そのものと言える旧街道の面影のある中を歩いて静勝寺にゆく。一間程の石の階段を登り、境内に入る。高丘の蘭若の境内は、樹陰の中にひっそりと静まりかえっていた。山田さんが庫裡にゆき、奥さんらしい方を連れてこられる。そして突きあたりにある方九尺の祠堂の鍵を開けられる。そして奥さんは、申訳けなさそうだ「太田道灌の像は修理に出して、唯今厨子の中にありませんので」と言う。そこへ、奥から若い僧が黒衣で出て来られ、私達に挨拶される。私達は、その若い僧を囲み、彼が述べる寺のいわれ等について拝聴する。

(次頁写真参照)

私は、僧の話を書き終えた時「寺史がありますか」と彼にたづねる。彼の僧は小生の質問をきいて、すぐ寺内にとんで帰えり、寺史の本を持ってくる。立派な本である。値段は四、三〇〇円也。結局、買ったのは言い出しっぺの小生だけ。

この静勝寺は道灌山と言ひ、太田道灌の築いた砦の跡という。その名は稲付城。然し、この地は、道灌の死後荒廃していた。そこへ、彼の師である静勝軒雲綱が雲水姿で訪れ、庵をむすび、道灌寺と号したのである。しかし、その後は衰微してゆく。寺の領

地なども近在の百姓にとられ、彼は生活に困る有様であったとい
う。

それから後、道灌六世の孫で太田資宗という人が居て、この人
は浜松城主になった方で、その力によって売られた土地も買いま
どし、復興することが出来たという。今ある道灌像は、この人の
いた頃、即ち元禄八年（一六九五）に造られたという。それ以来、
明治に至る迄、太田家の援助をうけて静勝寺は成り立ってきたと
いうが、それが明治維新となり、太田家の関係がなくなっていま
う。そして、土地はすべて官有地となった。その為、経済的には
窮乏してゆく。そして漸く昭和の半ばになり、赤羽に大日本製麻
の工場や社宅が出来たおかげで檀家がふえ、墓地も拡張され、現
在に至ることが出来たという。途中、戦災にもあったが、復興整
備し、このような完成をみる事が出来たものという。

静勝寺

素心

半日追晴環梵宮 半日晴を追うて梵宮を環る

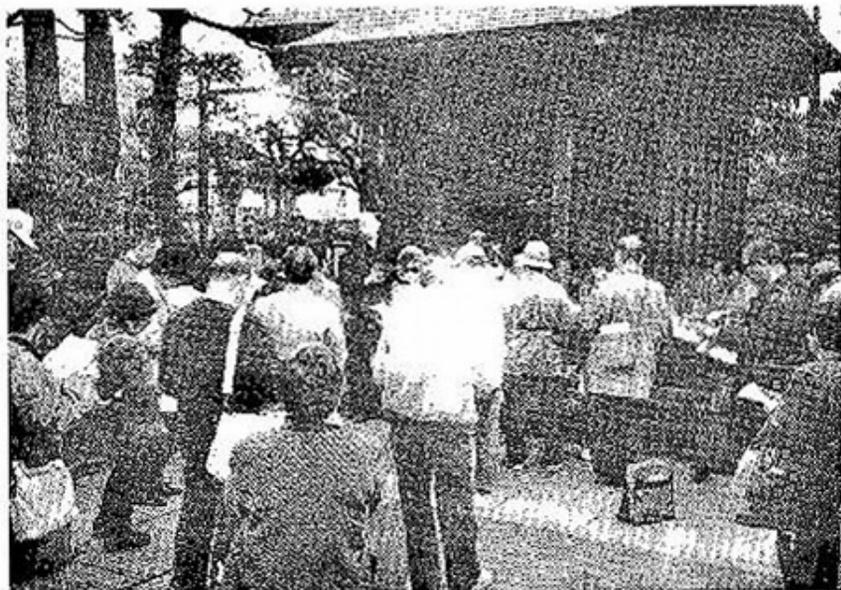
莊嚴仏閣樹陰中 莊嚴の仏閣樹陰の中

英雄道灌開基処 英雄道灌開基の処

回顧當年情不窮 当年を回顧して情窮らず

静勝寺を出て西側の道を行くと亀ヶ池弁財天がある。ここは亀
ヶ池の跡で、この池は稲付城西側の天然の防禦になっていたとい
う。その後、稲付城砦が亡び、開拓が進んで水田となり、用水池
として用いられるようになったという。今、目の前にみる弁財天の
祠は、その当時の池の一角に祀られてあったものという。

これで今日の史跡巡りは終る。皆さんと一緒に、再び赤羽に出



第158回史跡めぐり S63. 3. 27

赤羽 静勝寺

写真 谷岡幹事長提供

て、京浜線で南浦和にゆき、武蔵野線に乗りかえて南越谷で降りる。ここで解散となる。とても楽しい史跡巡りの一日であった。

最後に弁才天の詩を賦し、稿を閉じる。

弁才天

素心

一字祠堂天女神 一字の祠堂天女の神

琵琶奏楽妙音親 琵琶の奏楽妙音親し

弁才無礙尤資福 弁才の無礙福を資うて尤なり

娼集東西信仰新 娼集の東西信仰新なり

注

無礙—自由自在でさまたげるものがない。

娼集—多くのもの事が一時に集まる。



川口のわたし善光寺

会員アンケート

会員同志がお互いをより深く知り合って、更に親睦をふかめて
ゆくためのアンケートです。

(アンケートは史跡めぐりの途上などでおかきいただきました
ので、ご回答いただいていない方、アンケートをお渡し洩れてい
る方もございます。お許しください)

①あなたのご出身都道府県は？

②あなたが一番お好きな(よかった)作品は？

映画

文学作品

テレビ

音楽

③あなたのお好きな一言は？



井上 すす

①東京都

②文学作品 夏目・司馬作品

テレビ 歴史もの

③よろしく

有難うございます

岩沢 明

①東京都

②映画 二十四の瞳

スバルタカス(カーク・ダグラス)

ジャン・ダーク(E・バーグマン)

文学作品 出家とその弟子

代表的日本人

③誠実

虚心坦懐

小原勘三郎

①東京都

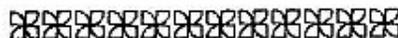
②映画 大いなる遺産

小島 誠

①埼玉県

②映画 題名失念

テレビ 時事放談・世相を斬る



後藤千代子

①群馬県

②映画 コクーン

文学作品 赤川次郎の作品

音楽 童謡

③努力ノ

鈴木定夫

②映画

文学作品 歴史もの

テレビ

鈴木種雄

②映画 風とともに去りぬ

文学作品 徳川家康

テレビ チャンバラ

音楽 カラオケ

鈴木秀俊

①埼玉県

②文学作品 平家物語

音楽 謡

③温故知新



高山はつ

①東京都

③感謝

高橋 清

①地元

②テレビ 1月2日放送の「水戸光圀」

③人間万事塞翁の馬

武井福三郎

①茨城県

③努力

田所義朗

①茨城県

②文学作品 推理小説

谷岡隆夫

①大阪府

②テレビ 「小さな旅」等の旅もの

③誠実

堤竹宏吉

①栃木県

②映画 人間の条件



文学作品

上杉鷹山

下天は夢か

テレビ

歴史番組

中村建生

①埼玉県

②文学作品 人物伝記物、宗教書

テレビ 旅関係

音楽 ボレロ 民謡 カラオケ

③平常心是道場

西田 茂

①埼玉県

②映画 母の瞳(ドイツ)

十二人の怒れる男

文学作品 藤沢周平の作品

テレビ 日曜日午前7時〜8時 TBS

音楽 愛の夢

③「程」人間万事此一字

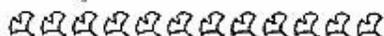
野村勝八

①東京都

②映画 二〇〇一年宇宙の旅

文学作品 井上靖のものなら何でも

テレビ 新世界紀行



林 和江

①東京都

②映画 千利休

文学作品 源氏物語

テレビ 小さな旅

音楽 プレスリー

原田熊蔵

①埼玉県

②映画 二十四の瞳

文学作品 大地

テレビ おしん

音楽 百万本のぼら

③有難う

長谷川鉄太郎

①秋川県

②テレビ 時代劇

音楽 歌謡曲 民謡

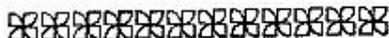
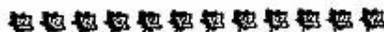
③気楽にノ ……日常のモットーです。

古田美雄

①東京都

②映画 最近は何と見ていません

文学作品 歴史小説系を好みます

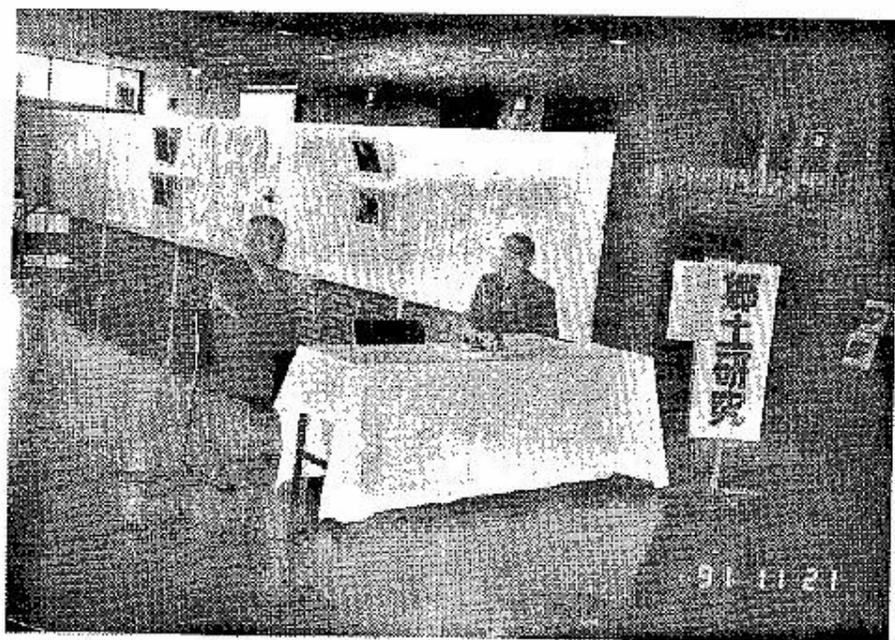


市民まつり展示出品リスト

〔62年以前は会報6号に記載済につき省略〕

展示場所は各回共 市役所ロビー

回数	出品年月	出品作品名	出品者
第14回	63年10月	都合により開催が中止	
第15回	元年10月	1) 越ヶ谷停車場開設記念写真 2) 81年まえの埼玉県の交通規則 スピード制限は16キロ	小島 誠 宮川 進
第16回	2年10月	1) 建長元年板碑 2) 良弁塚	山崎善司 加藤幸一
第17回	3年10月	1) 大聖寺の天保十年の庚申塔 2) 赤山街道と陸羽街道の道しるべ	加藤幸一 山崎善司



文化祭展示出品リスト



[62年以前は会報6号に記載済につき省略]

展示場所は各回共 越谷コミュニティーセンター

回数	出品年月	出品作品名	出品者
第23回	3年11月	1) 鳥文齋細田栄之の瓦曾根溜井図 2) 綾瀬川の船鑑札 3) 綾瀬川今昔 4) 南百の水神社 5) 国家神道時代に於ける神社境内 立木伐採許可願と許可証について 6) 妙観照の由来 7) 明治大正期・東京からの行楽地 越谷桃林 8) 赤山街道と陸羽街道の道標 9) 相定め申す一季奉公人請状の事 (古文書)	加藤幸一 木原徹也 小島 誠 鈴木秀俊 高橋 清 名倉さわ 宮川 進 山崎善司 吉田敏子



文化祭展示出品リスト

[62年以前は会報6号に記載済につき省略]

展示場所は各回共 越谷ミエティセンター

回数	出品年月	出品作品名	出品者
第20回	63年11月	1) 天下泰平御百姓の掛軸	石塚吉男
		2) 西方大聖寺保管の板碑	加藤幸一
		3) 迅速図に見る明治初期の越谷	木原徹也
		4) 大宮氷川神社に奉納された 越谷ゆかりの額	鈴木秀俊
		5) 堂面渡しの架橋	高崎 力
		6) 別府金剛寺蔵の聖徳太子像	丸田富夫
		7) 寛政5年3月諸国廻国供養塔など	宮川 進
		8) 越ヶ谷八景の今昔 越谷全図1～8所在明示	山田政信 木原徹也
第21回	元年11月	1) 元荒川出土の板碑群	加藤幸一
		2) 江戸時代の上まくり村の茶屋	小島 誠
		3) 林泉寺の三田崎氏五輪塔	鈴木秀俊
		4) 神仏混淆時代の祭祀体	高橋 清
		5) 七左町観照院の山門	名倉さわ
		6) 十九夜塔	丸田富夫
		7) 越ヶ谷名所絵葉書	宮川 進
		8) 建長元年板碑 越谷全図1～8所在明示	山崎善司 木原徹也
第22回	2年11月	1) 武州大相模不動明王瑞像記	加藤幸一
		2) 綾瀬川通り藤助河岸	木原徹也
		3) 学校草創期の卒業証書	小島 誠
		4) 引越しされた五智如来	鈴木秀俊
		5) 明治23年大洪水における 新川町の水防活動状況	高橋 清
		6) 永光山満蔵院地藏尊の由来	名倉さわ
		7) 明治時代の地図における越谷	宮川 進
		8) 椿割塚 越谷全図1～8所在明示	山崎善司 木原徹也

回数	年月日	発表者	テーマ
85	昭和61年 8月24日	木原徹也	草も木も若しくは我をしりたるや 一水野家と春日部市備後一
86	昭和62年 1月25日	本間清利	埼玉の街道
87	2月22日	小島 誠	日光街道を中心として 草創期の鉄道あれこれ
88	6月28日	山部直喜	国鉄・私鉄・幻の鉄道 越谷で見られる野鳥について 越谷で見られる植物キタミソウについて (スライド&テープ併用)
89	8月23日	飯山 実	岩槻について
90	昭和63年 1月24日	山崎善司	越ヶ谷言葉、方言と訛集について
91	2月28日	丸田富夫	日本の細部手法、藝股について スライド併用
92	6月26日	高崎 力	越谷における中世の城館跡
93	8月28日	山崎善司	古志賀谷氏館跡思考(ビデオ併用)
94	平成 元年 1月22日	林 貴史	岩槻宿について
95	6月25日	山崎善司	御殿番小杉藤左衛門尉景房の墓
96	8月27日	高橋一夫 (県教育局)	ヤマト政権と古墳時代の東国
97	平成 2年 1月28日	本間清利	瓦曾根溜井について
98	6月24日	加藤幸一	絵馬について
99	8月26日	宮川 進	縄文海進時における最高海水準に ついて [海はどこまできていたか]
100	平成 3年 1月27日	柳田俊司	埼玉の歴史より
101	2月24日	本間清利	日光道中について
102	6月30日	山崎善司	野与党諸氏拠点の考察
103	8月25日	加藤幸一	鳥文斎細田栄之の瓦曾根溜井図
104	平成 4年 1月26日	高崎 力	検証・新方領耕地整理

回数	年月日	発表者	テーマ
56	昭和53年 1月22日	石塚吉男	会田氏こぼれ話
57	5月28日	石塚吉男	新方庄及び向畑の伝説(新方陣屋)
58	8月27日	星野昌治	埼玉県東部付近の民間信仰板碑
59	昭和54年 1月28日	木原徹也	日光街道脇往還について
60	5月27日	本間清利	地方自治の変遷と越谷
61	8月26日	三原善太郎	サキタマヒメと越ヶ谷 一久伊豆神社について一
62	昭和55年 1月27日	星野昌治	山王21仏庚申板碑
63	2月24日	三原善太郎	入門のための古文書の読み方 一書道との関連一
64	5月25日	本間清利	関東郡代
65	8月24日	石塚吉男	越谷御殿地始末記
66	昭和56年 1月25日	木原徹也	一宿場町よりみた天保の貨幣改鑄
67	5月24日	中村忠夫	二郷半領駕籠訴事件について
68	8月23日	本間清利	東部低湿地における交通
69	昭和57年 1月24日	星野昌治	二十一仏板碑入門 新発見の恩間等覚院跡板碑に関して
70	5月23日	丸田富夫	仏像の見方(スライド併用) ふるさと越谷(16ミリ映画)
71	8月22日	蜂谷敬啓	鎌倉街道を歩いて
72	11月 3日	丸田富夫	日光の建築
73	昭和58年 1月23日	木原徹也	二、三の実例より見た明治初期の 越ヶ谷
74	5月22日	本間清利	武蔵田園簿と江戸初期の代官
75	8月28日	山田政信	境の神から道祖神
76	昭和59年 1月22日	木原徹也	日光街道沿いの一里塚・藤助河岸
77	5月27日	山崎善司	徳川家康と越谷
78	6月24日	本間清利	河川流路の沿革
79	9月30日	花房健次郎	梵鐘を訪ねて
80	昭和60年 1月27日	矢島 実	正月の民俗行事と信仰について
81	5月26日	蜂谷敬啓	坂東における豪族層の交替と 武蔵七党の出現について
82	8月25日	山崎善司	越谷会田氏のルーツを探る
83	昭和61年 1月26日	山崎善司	同上ビデオにて
84	5月25日	矢島 実	武蔵における農工社会の民俗行事

回数	年月日	発表者	テーマ
26	昭和45年 5月23日	会員	スライド鑑賞 北川崎のオビシヤ
27	8月23日	会員	郷土についての放談会
28	昭和46年 1月24日	三原善太郎	文化史観に立つ神話の見方
29	5月23日	本間清利理事	江戸時代の越谷の村方騒動
30	8月29日	会員	ビデオ及び8ミリ鑑賞 久伊豆神社 の例大祭・下間久里の獅子舞
31	9月26日	高崎 力	越谷市の古代を探る 見田方遺跡について
32	昭和47年 1月23日	岩井 茂	岩槻城主太田氏代々について
33	5月28日	大村 進	大岡忠光と山県大弐
34	8月27日	三原石塚山崎	越谷御殿はどこにあったか
35	昭和48年 1月28日	岩井 茂	金沢称名寺と越谷近郷の関係
36	5月27日	会員	記録映画 下間久里の獅子舞 と久伊豆神社の例大祭
37	8月19日	岩井 茂	野与党と私市党
38	昭和49年 1月27日	本間清利	会田七左衛門家
39	2月24日	大村 進	岩槻藩主大岡忠正
40	5月26日	岩井 茂	中世東武における河川道路の推移
41	8月25日	山崎善司	越谷氏について
42	昭和50年 1月26日	岩井 茂	野与党について
43	2月23日	山崎善司	白岡町周辺
44	5月25日	石塚吉男	会田氏と越谷御殿
45	8月31日	小島 誠	桜井地区における関東大震災の記録
46	11月23日	本間清利	日光道中の通行者
47	昭和51年 1月25日	竹内 誠	江戸と越谷
48	3月28日	峰岸都立大助教授	古銭と中世社会(浄光寺)
49	5月23日	大村 進	豪族武蔵氏の活躍について
50	6月27日	島田 資料館副館長	絵馬について
51	8月29日	三原善太郎	我々の周辺にある古代史
52	昭和52年 1月23日	山崎善司	会田家について
53	3月27日	林 博物館学芸員	越谷市の仏像について
54	5月22日	本間清利	関東郡代伊奈氏について
55	8月28日	大村 進	岩槻城主太田氏資の支配について

回数	年月日	発表者	テーマ
1	昭和40年 4月24日	大野伊右衛門	方言について
2	5月14日	大野伊右衛門	越谷御殿について
3	6月27日	新井英彦	埼玉県東南部地区の古代人の住居
4	7月25日	本間清利	助郷の諸問題 新井家文書
5	9月11日	八島理事	鈴久について
6	10月30日	大野伊右衛門	越谷よもやま話
	〃	木村信次	しらこぼとについて
7	11月28日	本間清利	会田出羽と越谷
	〃	大野伊右衛門	芭蕉と越谷
8	昭和41年 1月 8日	高崎 力	大相模の古代住居跡について
9	7月 5日	大野伊右衛門	こしがや由来 浄山寺縁起
10	昭和42年 1月 8日	高崎・金井先生	見田方古代住居跡について
11	2月26日	大野伊右衛門	久伊豆神社
	〃	本間清利	村明細帳 七左衛門村
12	5月28日	会員	1) 産社祭礼帳
	〃		2) スライド鑑賞見田方遺跡
13	7月 9日	北島正元	徳川家康と関東農村について
14	8月20日	会員	郷土研究会のあり方
15	10月 8日	三原善太郎	下間久里の獅子舞
16	12月17日	本間清利	会田家備忘録
17	昭和43年 1月14日	小沢先生	近世資料の整理と分類について
	〃	本間清利	越谷御殿
18	2月25日	本間清利	産社祭礼帳近世編
	〃	岩井 茂	金沢称名寺文庫を主体として越谷 周辺の歴史を語る
19	5月28日	本間清利	越谷宿について
20	8月25日	三原善太郎	下間久里獅子舞の現地からみた 発祥地考 8ミリ映写
21	12月22日	座談会	郷土越谷について
22	昭和44年 5月25日	会員	テープ鑑賞・下間久里の獅子舞
23	10月10日	是沢恭三	越谷御獵場について
24	昭和45年 1月25日	会員	テープ及び8ミリ鑑賞
			久伊豆神社の例大祭
25	2月21日	本間清利	越谷市を中心とした河川沿革史

回数	実施年月日	行先	案内者
176	平成 2年 7月22日	関宿 光岳寺 貫太郎記念館 城跡他	鈴木秀俊
177	9月30日	栗橋 静御前墓 宝治戸沼 本陣跡他	山崎善司
178	10月28日	栃木出流山満願寺 本堂 奥の院他	山田政信
179	12月 2日	大宮方面 盆栽村 漫画会館 博物館	鈴木秀俊
180	平成 3年 1月 3日	谷中七福神めぐり	山田政信
181	3月24日	春日部 梅若塚 八幡神社 最勝院他	鈴木秀俊
182	4月28日	古河 古河公方館跡 歴史博物館他	山崎善司
183	5月26日	鎌倉 極楽寺 長谷寺 大仏他	宮川進
184	7月24日	古利根水郷と虫追いの川崎神社	鈴木秀俊
185	9月22日	騎西町 龍興寺 大福寺 私市城址他	山崎善司
186	10月27日	東海道品川宿を訪ねて(Ⅰ) 東海寺他	山田政信
187	12月 1日	足利学校 鑿阿寺 館林茂林寺	鈴木秀俊
188	平成 4年 1月 3日	下谷七福神めぐり	山田政信
189	2月23日	東松山 黒岩横穴群 吉見観音他	宮川進
190	3月29日	玉川上水	加藤幸一

回数	実施年月日	行先	案内者
141	昭和60年 9月22日	銀座・日本橋方面 十軒店 放灯碑他	加藤幸一
142	10月6~7日	信州四賀村 (会田家のルーツ)	山崎善司
143	昭和61年 2月23日	川越街道 上板橋宿 安養院他	丸田富夫
144	4月29日	都内谷中方面 大名時計博物館他	加藤幸一
145	6月22日	練馬石神井地区豊島氏の遺跡を訪ねて	山田政信
146	7月27日	四谷方面 見附門跡 お岩稲荷他	加藤幸一
147	9月27日	都内志村城跡 小豆沢神社 一里塚他	丸田富夫
148	10月26日	三郷方面 石川氏宅 市立資料館他	中村舜朔
149	11月30日	草加 浅間神社 東福寺 札幌河岸他	須賀源蔵
150	昭和62年 1月 3日	隅田川七福神めぐり	山田政信
151	3月29日	吉川方面 定勝寺 密蔵院 延命寺他	中村忠夫
152	4月26日	都下小金井方面 金蔵院 野川公園他	加藤幸一
153	5月24日	八幡山古墳 小見真観寺古墳他	宮川進
154	7月26日	日光御成道を訪ねて(1)本郷地区	山田政信
155	9月23日	早稲田 目白台方面 高田馬場跡他	加藤幸一
156	10月25日	日光御成道を訪ねて(2)駒込 王子	山田政信
157	11月29日	都畿川村慈光寺を訪ねて	宮川進
158	昭和63年 3月27日	日光御成道を訪ねて(3)赤羽 岩淵	山田政信
159	4月24日	竹の塚伊興方面 東岳寺 氷川神社他	加藤幸一
160	5月22日	多摩川台古墳に古代武蔵の盟主を想う	宮川進
161	7月24日	日光御成道を訪ねて(4)川口鳩ヶ谷	山田政信鈴木秀俊
162	10月30日	鉢形城跡 善導寺 正龍寺	丸田富夫
163	12月 4日	高麗方面 聖天院 高麗神社他	宮川進
164	平成元年 2月26日	古志賞谷館跡 太郎館跡 四郎館跡他	山崎善司
165	3月26日	日光御成道を訪ねて(5)大門 浦和	山田政信
166	4月30日	庄和町の文化財と牛島の藤	丸田富夫
167	5月28日	日光御成道を訪ねて(6)岩槻加倉	鈴木秀俊
168	7月23日	日光御成道を訪ねて(7)本郷	山田政信
169	9月24日	日光御成道を訪ねて(8)岩槻北部	鈴木秀俊
170	10月22日	江の島 西鎌倉方面	宮川進
171	12月 3日	日光御成道を訪ねて(9)和戸と鷺宮	鈴木秀俊
172	平成2年 2月25日	妻沼聖天 太田天神山古墳 朝子塚	宮川進
173	3月25日	日光御成道を訪ねて(10)幸手宿	鈴木秀俊
174	4月22日	都内新宿方面 歴史博物館 御苑他	山田政信
175	5月27日	日光方面 含満ヶ淵 東照宮 輪王寺	山田政信

回数	年月日	行先	案内者
106	昭和55年11月16日	下妻方面 大宝八幡宮 多賀谷氏墓他	
107	昭和56年 2月23日	杉戸宿 河原稲荷 本陣跡 来迎院他	
108	3月22日	目黒方面 正覚寺 祐天寺 大鳥神社	
109	4月29日	三浦半島 衣笠城跡 大善寺 油壺他	
110	6月28日	栗橋 静御前の墓 宝治沼 光了寺他	
111	7月26日	岩槻 文化センター 遷喬館 時の鐘他	
112	9月27日	幸手方面 幸手城跡 宝持寺 浅間社	
113	11月29日	大袋方面 薬師堂 遠藤家 荒陽の墓	
114	昭和57年 2月28日	荻島地区 浄山寺 沓利橋 玉泉院他	
115	3月28日	板橋地区 大塚地蔵 庚申塚 縁切榎	
116	4月29日	板橋地区 松月院 資料館 赤塚城跡	
117	6月27日	松戸 本土寺 東漸寺 一月寺跡他	
118	7月25日	新方地区 台風の為中止	
119	9月26日	日光今市地区 杉並木 東照宮他	
120	10月17日	新方 川崎神社 聖徳寺 清浄院他	
121	昭和58年 2月27日	深川方面 八幡宮 不動尊 清澄園他	
122	3月27日	市川里見公園 矢切の渡 帝釈天他	
123	4月29日	佐倉城跡 白井城跡 民俗博物館	山崎善司
124	6月26日	文京地区 湯島天神 小石川後楽園他	中村忠夫
125	7月24日	新座三芳地区 平林寺 多福寺他	丸田富夫山田政信
126	9月25日	栃木大平山 塚田記念館 町並見物他	石塚吉男
127	10月23日	北鎌倉 円覚寺 東慶寺 建長寺他	山崎善司
128	11月27日	隅田川の辺り 浅草神社 待乳山聖天	山田政信
129	昭和59年 2月26日	目黒 不動尊 大鳥神社 祐天寺他	鈴木種雄
130	3月25日	川越 常楽寺 喜多院 東明寺他	丸田富夫
131	4月29日	東松山菅谷館跡 箭弓神社 吉見百穴	山崎善司
132	6月24日	草加松原松並木 一里塚 藤助河岸	木原徹也
133	7月22日	千葉市内 千葉寺 猪鼻城跡 来迎寺	中村忠夫
134	9月30日	大聖寺 天嶽寺	石塚吉男
135	11月11日	王子豊嶋氏の遺跡を訪ねて 飛鳥山他	山田政信
136	昭和60年 2月24日	野田愛宕神社 至徳泉 郷土博物館他	木原徹也
137	3月24日	上野東照宮 弁天堂 六義園他	丸田富夫
138	4月29日	鎌倉Ⅲ 宝戒寺 和田塚 北条政子墓	山崎善司
139	6月23日	千葉氏Ⅲ 勝胤寺 博物館 佐倉城跡	丸田富夫中村忠夫
140	7月28日	都電荒川線沿線 回向院 鬼子母神他	山田政信

回数	年月日	行先	案内者
71	昭和50年10月27日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	中村忠夫
72	昭和51年 2月22日	行田 埼玉古墳群 前玉神社	
73	4月25日	将門を訪ねて 国王神社 安念寺他	
74	7月25日	川崎聖徳寺 大松清浄院 開山塚	
75	10月24日	取手方面 染野家 長禅寺 三仏堂他	
76	11月28日	朝霞方面 東円寺 本仙寺	
77	昭和52年 2月27日	竹の塚方面 炎天寺 桂昌院の墓他	
78	4月24日	野田博物館 金乗院 岩名洞窟	
79	6月26日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	
80	7月24日	神明七左衛門の墓 迎拱院 浄光寺他	
81	9月18日	出羽観照院 大沼大明神 安行戸塚城	
82	10月23日	増林 林泉寺 勝林寺 増森21仏	
83	11月27日	岩槻城跡 浄安寺 竜門寺 時の鐘他	
84	昭和53年 2月19日	県立埼玉会館 県立文書館	
85	3月19日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	
86	4月30日	国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天	
87	6月18日	川越方面 喜多院 川越城跡他	
88	7月23日	流山方面 東福寺 近藤勇陣屋跡他	
89	9月24日	行田 埼玉古墳 資料館 前玉神社	
90	10月22日	関宿 実相寺 宗英寺 貫太郎記念館	
91	11月26日	結城方面 称名寺 弘経寺 慈眼院	
92	昭和54年 2月25日	国分寺方面 薬師堂 武蔵国分寺跡他	
93	3月25日	大相模不動尊 飯島八塚 観音寺他	
94	4月22日	鎌倉 頼朝の墓 八幡宮 銭洗弁天他	
95	6月17日	新方 聖徳寺 清浄院 向畑陣屋他	
96	7月22日	東京 将門首塚 皇居東御苑	
97	9月23日	栗橋古河方面 静御前墓碑 公方館他	
98	10月28日	吉川 千脉庚申塚 密厳院 戸張家墓	
99	11月25日	西新井大師 中曾根城跡 関原不動院	
100	昭和55年 3月23日	日光街道千住宿 橋戸町 河原町他	
101	4月29日	国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天	
102	6月29日	草加宿 大和屋跡 大川家 松並木他	
103	7月27日	天嶽寺 御殿跡 市神社 香取社他	
104	9月28日	春日部宿 山中観音 浅間山 梅若塚	
105	10月19日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	

回数	年月日	行先	案内者
36	昭和45年10月11日	大泊 安国寺	
37	11月29日	行田 埼玉古墳群 資料館 前玉神社	
38	昭和46年 2月28日	蒲生 清蔵院 地藏院 照蓮院	
39	3月28日	吉川 道庭の百庚申塔 密蔵院他	
40	4月25日	大門 会田本陣 脇本陣 大門神社他	
41	6月27日	天嶽寺 久伊豆神社 有滝7-私タム	
42	7月25日	武里 東福寺 円福寺	
43	10月17日	久喜 戸賀錬武場跡 甘裳院	
44	昭和47年11月28日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	
45	2月27日	新方 聖徳寺 清浄院	
46	3月26日	増林 林泉寺 勝林寺 宝生院	
47	4月23日	平方 林西寺	
48	6月25日	大房 浄光寺 薬師堂 五智堂	
49	7月23日	古河 光了寺他	
50	9月24日	金沢文庫 称名寺	
51	10月22日	蒲生 清蔵院 普請供養塔 藤助河岸	
52	11月26日	羽生城跡 田舎教師の墓	
53	昭和48年 2月25日	大泊 安国寺 上間久里地藏尊他	
54	3月25日	平将門を訪ねて 国王神社 安念寺他	
55	4月22日	行田 埼玉古墳 資料館	
56	6月24日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	
57	7月22日	大相模不動尊 見田方遺跡 宇田家	
58	9月16日	大松 清浄院 川崎聖徳寺	
59	10月21日	下総国府台城跡 真間の手児奈	
60	11月18日	大房浄光寺 神明七左衛門の墓他	
61	昭和49年 3月24日	大宮県立博物館 楽天会館 寿能城跡	
62	4月28日	下総国府台城跡 手児奈 柴又帝釈天	
63	6月23日	騎西町周辺	山崎善司
64	7月28日	春日部小淵観音 不二山 最勝院	
65	9月27日	野火止 平林寺	
66	10月21日	大相模見田方遺跡 南千疋21仏塔婆	
67	昭和50年 3月30日	増林 林泉寺 勝林寺 増森21仏	
68	4月29日	野与党を訪ねて	山崎善司
69	6月22日	見沼通船堀 清奈寺 見性院の墓	
70	7月27日	大宮県立博物館 浦和市立博物館	

越谷市郷土研究会 会員名簿
(市外居住者)

平成4年3月現在

	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
70	山田政信	114	東京都北区桐ヶ丘1-21- W16-204	(03) 3906 -0725
71	丸田富夫	174-01	” 板橋区常盤台3-28 -15-402	(03) 3969 -3441
72	竹内 誠	164	” 中野区上高田 4-8-1-106	(03) 3387 -4086
73	花房健次郎	168	” 杉並区下高井戸2-21-39	(03) 3329 -8713
74	星野昌治	272-01	千葉県浦安市入船38-117	(0473) 51-0417
75	木原徹也	278	野田市中根140-174	(0471) 22-0654
76	木村信次	339	岩槻市本丸2-9-3	(048) 757 -6095
77	大村 進	330	大宮市砂1472-9	(048) 683 -9595
78	加藤幸一	344	春日部市大枝859-5	(048) 738 -4181
79	若松清一	344	” 豊町3-7-47	(048) 736 -5370
80	林 和江	344	” 大枝812-5	(048) 738 -3036
81	坂巻房子	344	” 藤塚326-10	(048) 737 -8978
82	高島英一	336	浦和市太田窪5-16-3	(048) 882 -6912
83	泉 禎子	338	” 大久保領家540-17-103	(048) 852 -6775
84	中村舜朔	341	三郷市早稲田1-12-9	(0489) 57-2051
85	酒井達男	340	草加市旭町4-4-3	(0489) 41-9052
86	後藤千代子	340	” 八幡町1223-13	(0489) 36-9880
87	川村初枝	340	” 松原3-13-6	(0489) 43-3324
88	井上とめ	345	南埼玉郡宮代町東姫宮1-7-39-3	(0480) 33-1127
89	星野千江子	365	鴻巣市赤見台2-2-11-102	(0485) 96-2718
90	新井登美栄	347	加須市大室131	(0480) 65-4476

越谷市郷土研究会 会員名簿
(市内居住者)

平成4年3月現在

	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
61	星野三郎	343	越谷市越ヶ谷3-4	(0489) 64-0211
62	宮川 進		千間台西2-17-16	75-9139
63	宮下孝雄		宮本町1-183	62-3320
64	村田留吉		蒲生西町1-3-3	86-9287
65	山崎善司		弥生町1-9	62-3733
66	山梨隆司		袋山494-1	97-6294
67	山口美津江		神明町3-219	66-9555
68	吉田敏子		袋山192-5	74-3770
69	吉田 倭		南越谷1-6-75-206	85-8972

越谷市郷土研究会 会員名簿
(市内居住者)

平成4年3月現在

	氏名	〒	住所	電話番号
31	鈴木政子	343	越谷市増林3785	(0489) 63-2005
32	鈴木タカネ		大沢1579-9	78-3969
33	鈴木定夫		南越谷4-20-3-205	85-3971
34	染谷政之助		宮前1-8-1	66-6997
35	谷岡隆夫		宮本町3-117-8	62-7527
36	高崎 力		平方1416-1	76-3987
37	高橋正輝		東柳田町10-31	62-5766
38	高橋 清		新川町1-366	87-9254
39	田所義朗		東越谷5-4-8	65-3313
40	高谷良子		赤山町4-6-14	65-9760
41	高山はつ		大泊611-89 佐山方	75-6803
42	武井福三郎		東町5-23-2	89-5480
43	堤竹宏吉		宮本町5-210-17	62-1542
44	豊田 裕		南越谷1-6-75-106	87-4202
45	中村忠夫		柳町3-21	62-3429
46	名倉さわ		新川町1-82	86-2558
47	中村建生		平方1594	74-3785
48	中山善亮		南越谷3-26-8	62-6554
49	西沢許女		越ヶ谷2236-8-301	
50	西田 茂		谷中町1-80	62-4537
51	沼倉セツ		花田400 列ノツウ16-22	64-4045
52	野村勝八		弥十郎272-8	78-1133
53	長谷川鉄太郎		東越谷2-3-31	66-5237
54	原田熊蔵		瓦曾根2-11-19	62-1574
55	日置宗一		蒲生西町1-8-63	88-8162
56	平柳たけ		七左町1-78-2星野方	85-4950
57	平田静子		赤山町1-166-4	64-5692
58	古田美雄		千間台西5-26-37	76-8161
59	福田喜一		越ヶ谷1-4-20	62-2911
60	本間清利		柳町3-23	62-0210

越谷市郷土研究会 会員名簿
(市内居住者)

平成4年3月現在

	氏名	〒	住所	電話番号
1	会田 俊	343	越谷市神明町2-1	(0489) 62-3300
2	有瀧龍雄		越ヶ谷中町8-26	62-2054
3	新井義雄		大沢3194-17	64-0142
4	秋田 成		袋山776-10	77-8955
5	石塚吉男		北川崎77	74-2217
6	石塚陳正		越ヶ谷2-2-26	62-2604
7	生山カヨ子		東柳田町12-23-25	66-1360
8	井上すす		宮本町2-16	62-1039
9	池田 仁		相模町2-238-2	86-7765
10	岩沢 明		蒲生旭町6-8	88-4815
11	磯谷知子		神明町2-357-1 物1-202	78-8339
12	小原勤三郎		宮本町3-50	64-0005
13	岡田和子		花田146-3	62-3873
14	川村梅春		下間久里310	77-8045
15	上村 透		相模町7-184-2	86-7283
16	上郷千春		相模町3-132-2	88-6021
17	木村 実		恩間654	75-0872
18	黒田陽一		宮前1-9-3	64-2920
19	工藤さだ子		大林241-1,0	76-9680
20	楠田政子		下間久里886-722	76-7927
21	小島 誠		平方150	76-0647
22	小酒井信治		大成町7-79-1	85-2354
23	小林秀男		弥生町13-20	65-3411
24	佐々木 伸		千間台西6-6-27	77-2832
25	佐川敏子		七左町7-25-8	65-0167
26	斎藤友子		越ヶ谷1-3-29	62-8554
27	塩谷喜代子		大間野3-210	86-4005
28	渋谷正芳		蒲生1-14-9	86-3146
29	鈴木種雄		赤山町2-170	62-2017
30	鈴木秀俊		宮本町2-117-6	64-1009

越谷市郷土研究会 役員

平成3年度～4年度

常任顧問	木村信次				
顧問	竹内 誠	大村 進			
会長	小島 誠				
副会長	石塚吉男	山田政信			
理事	有滝龍雄 加藤幸一 高崎 力 日置宗一 山崎善司	井上すず 木原徹也 高山はつ 星野昌治 原田熊蔵	生山カヨ子 鈴木種雄 名倉さわ 本間清利	石塚陳正 鈴木秀俊 中村忠夫 丸田富夫	
幹事長	谷岡隆夫				
幹事	宮川 進				
監事	上郷千春	吉田敏子			
越谷市文化連盟理事	鈴木秀俊	名倉さわ			
越谷市文化連盟代議員	谷岡隆夫	鈴木種雄	堤竹宏吉		

あとがき

副会長 山田 政信

今回の会報の発刊については、会員の皆様から多数の寄稿をいただき有難うございました。お陰様にて、会報の第七号の発刊をみる事ができました。

人々の生活してきた土地には、その地特有の文化や民俗が創られ、それが現在に至るも伝承され、又継承されてゆく努力がなされている。併し現今の生活環境下において、その存続もままならないものがある。移動や破壊の憂き目にあい、伝承・保存の危機もまま耳にすることである。

当郷土研究会においても、文化遺産に強い関心をもち、記録作成・保存等のアピールの為にも会員の皆様の作品を例年の文化祭に出展するのも意義あるものと思います。又平成三年に実施した「虫送り」行事のような民俗行事の探訪等を企画し、郷土の文化財保存の一助にでもなればと思います。

会報の編集にご苦勞の皆様には謝意を表し、又第七号発刊をお祝い申し上げます。

編集委員

小原勘三郎

木村信次

小島 誠

鈴木種雄

高山はつ

野村勝八

宮川 進

吉田敏子

加藤幸一

木原徹也

鈴木秀俊

谷岡隆夫

堤竹宏吉

原田熊蔵

山崎善司

会報	七号	会員頒布
発行日	平成四年八月	
発行所	越谷市郷土研究会	
代表者	越谷市宮本町三一 二七七八	谷岡隆夫方
印刷所	小島 誠	中田印刷所